

2V-54

96-446



巖谷小波著

新洋行
土產

博文館出版

上卷





明治四十二年天長師範盛岡府に於て

序

著者先に伯林に在る事二年、極めて淺薄なる觀察を記して、『洋行土産』二卷を公にしたが、幸ひにも讀者の迎ふる所となつて、屢々版を重ねるの榮を得た。

但し當時は事情あつて、往復共に航路を印度洋に取つた爲めに、遂に米國の口元をも覗き得なかつた事は、頗る遺憾とする所である。

然るに待てば甘露とやら、其後數年を経て、例の渡米實業團に加はり、特に米國をの

み見物するの機會を得たのは、實に望外の幸福であつた。

殊に此の旅行は、元と彼國からの招待である。随つてその觀光の區域、乃至見學の範圍には、尋常漫遊巡回の徒の、到底企及し得ぬ點が多い。されば若し著者にして、その見聞の詳細を、一々記述する氣になれば、それこそ汗牛充棟の大部の物が出来るかも知れぬ。

然し又考へて見ると、今日米國に關するの書は、箕で量る程の有様である。著者には珍らしいと思つた事も、已に遼東の豕と成

つて、世人の眼を惹くには足るまい。

故に茲には、今更事新しく國勢を論じ、風景を説くの野暮を避けて、只自個の經來つた事、見もし聞もし感じもした事を、有りの儘に列べ立て、是を先の『洋行土産』に倣つて、『新洋行土産』と題する事にした。

若し夫れ、觀察の皮相に止まり、所見の淺薄を脱せぬ誹は、著者の甘んじて之を受くる所。少くとも此書に依つて、一面平和の使節と稱せられた、我が實業團の行動を知らしめ、一面所謂主人側なる、米國官民の好意の程を、幾分たりとも紹介し得るならば、著

者の能事は足りたと思ふ。

序ながら、著者をして此行に加はるべく、最初に紹介の勞を執られた、博文館主大橋君又其巡遊の間、終始指導の煩を辭せられなかつた、紐育總領事水野君に對して、茲に其謝意を表し、併せて澁澤男爵、神田男爵、其他實業團員各位に對しては、旅行中の缺禮の段々、延引ながら御詫申す。

明治四十三年三月

著 著

凡 例

一 本書を新洋行土産と名づけたのは、先の洋行土産に對しての事だ。この題が平凡であるのは、内容と相俟つてよからうと思ふ。

一 體裁も亦先例に倣つて、五六列の方形を取つたが、其意匠と挿畫とは、一切久保田金僊氏に托した。氏も蓋し今度の旅行には、舟車の苦樂を共にした一人である。

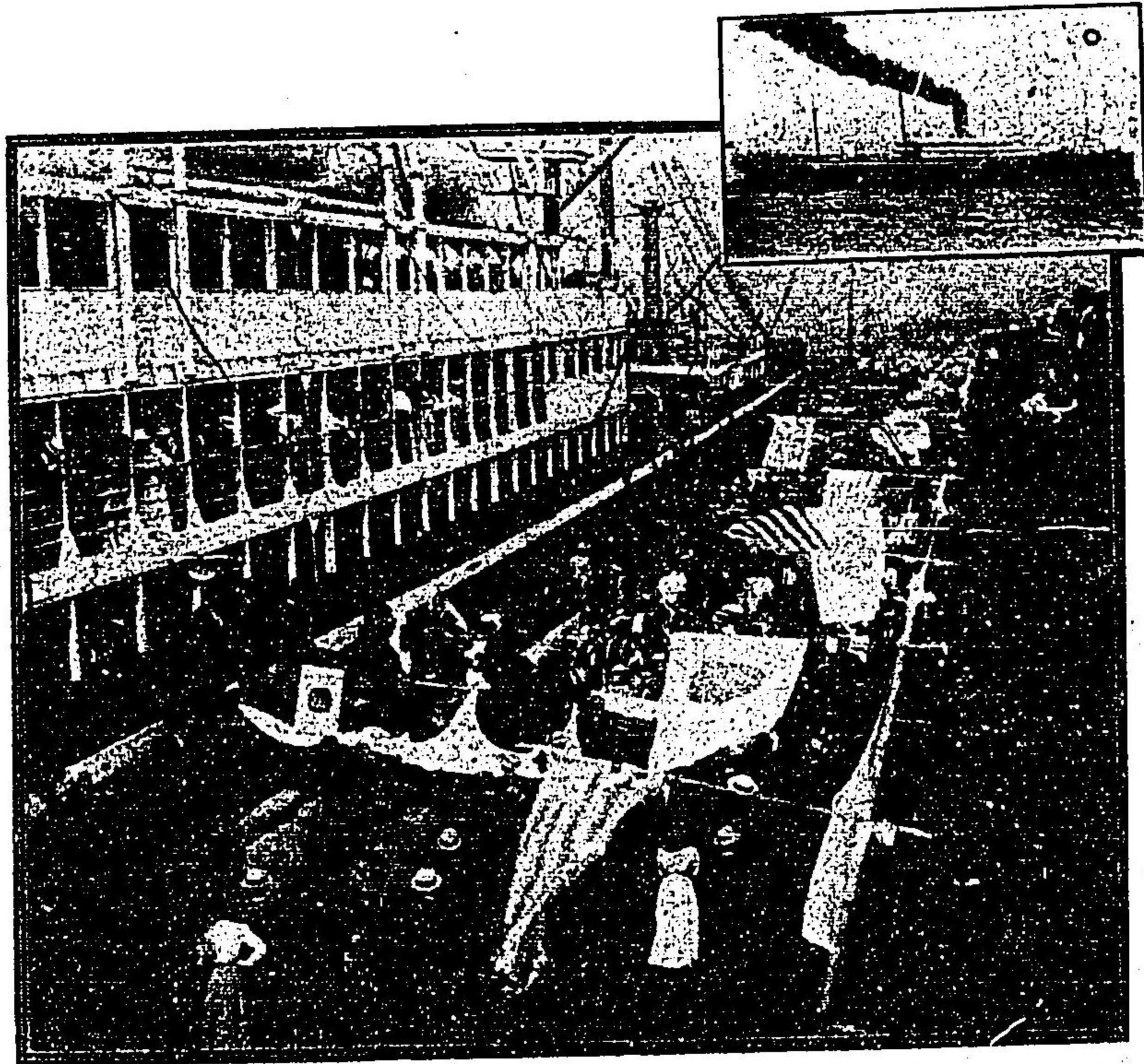
一 上卷には主として日記を掲げ、下卷にはおもに見聞を收める。

一 日記を「於譽破例日記」と題したのは、オヨバレ即ち招待に應ずるの意だが、特に此字を當てたのは、出發前の離宮の賜筵を、長く紀念する爲に他ならず。即ち譽に於て例を破ると云ふ意である。

上巻目次

於譽破例日記	………	一
地洋日記	………	二四五
ニューボートの雨の一日	………	二六九
實業團語	………	二七九
平和軍談	………	三〇九
見た米國の芝居	………	三一九
石と意志	………	三二九
歸朝當座録	………	三三七
東西旅籠競	………	三四七
米國の女と子供	………	三五七

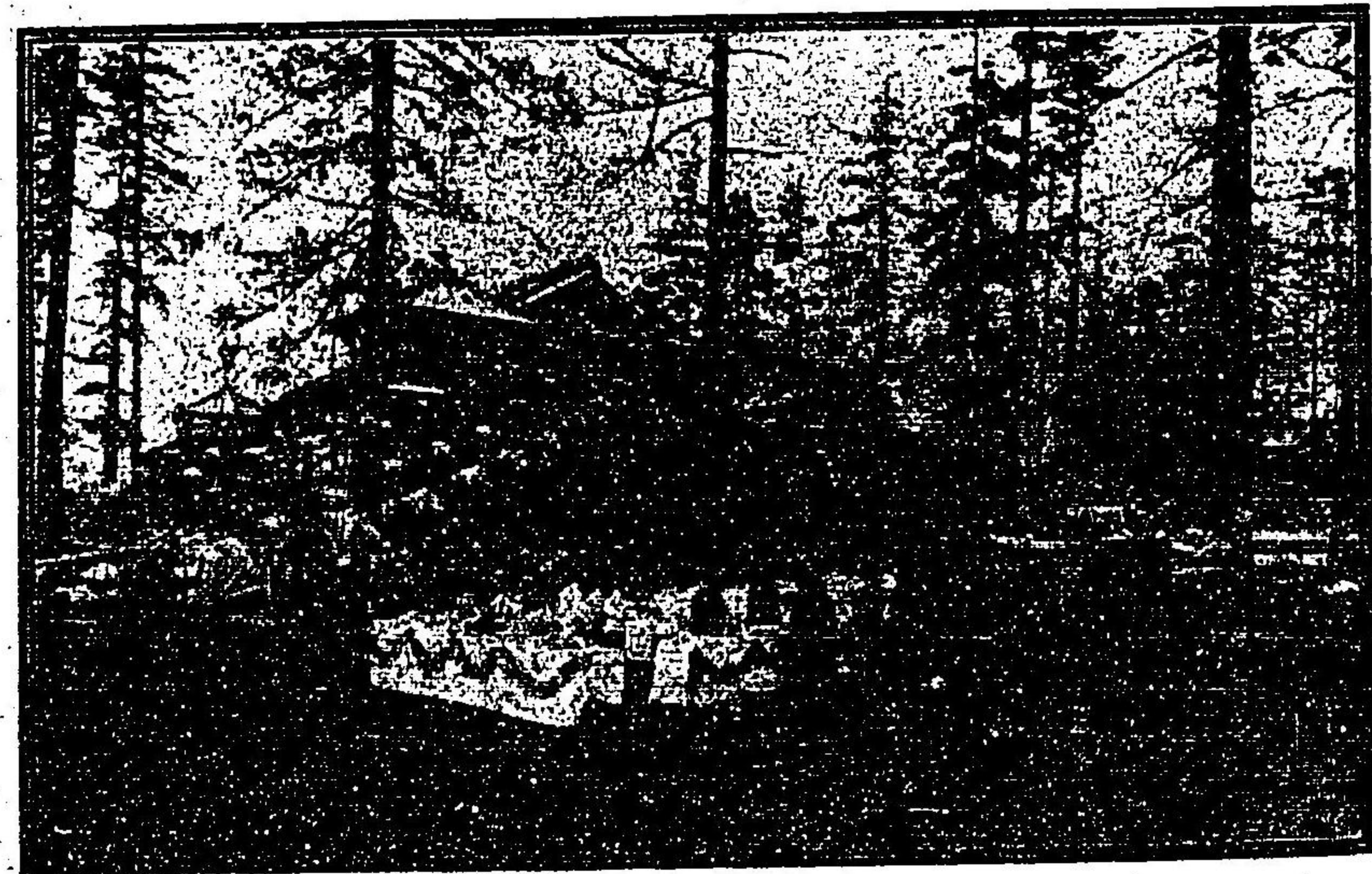
號タソネミ



景光の着到、港ルトヤシ



團業實の前館林森内會覽博ルトヤシ



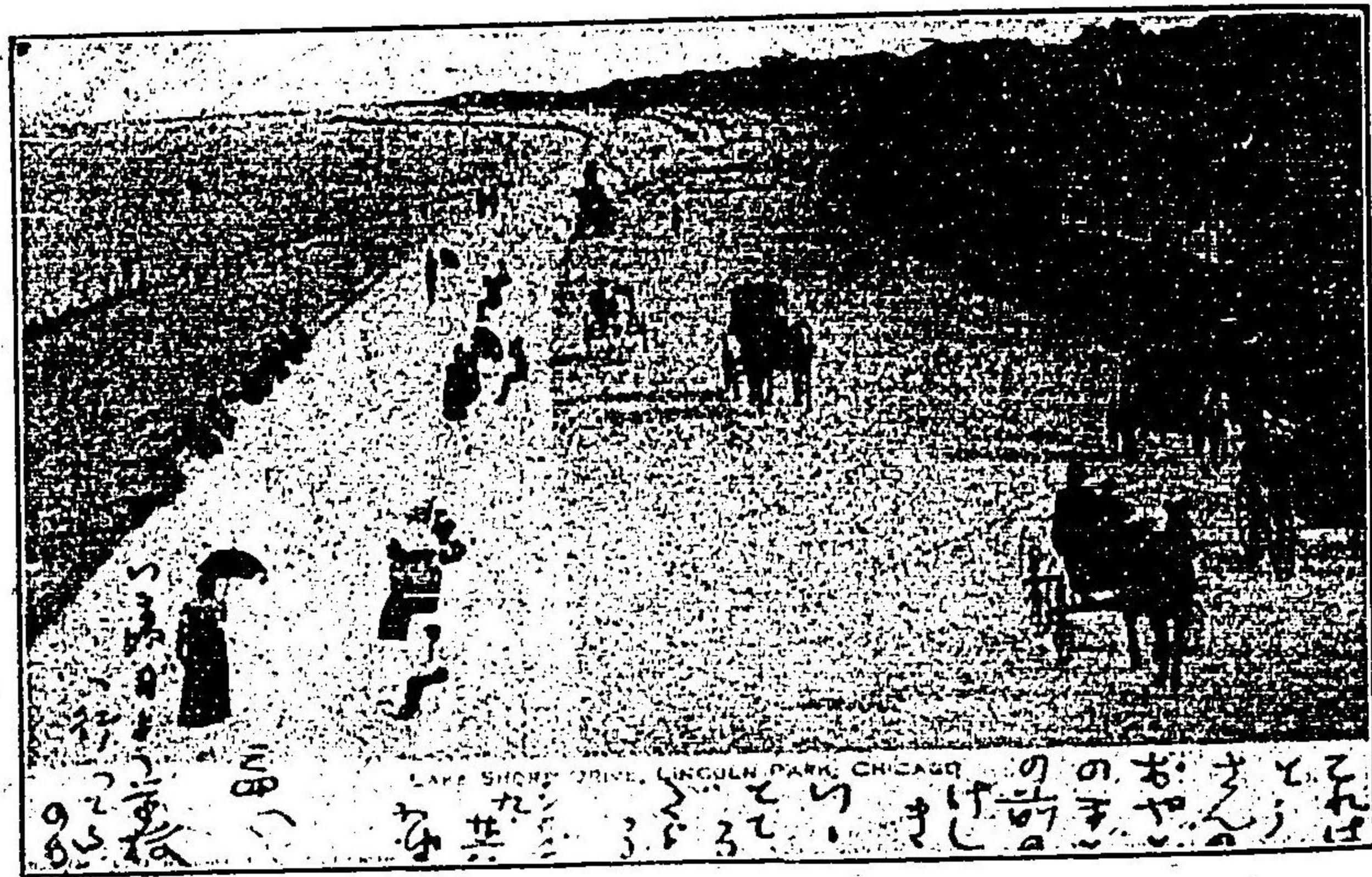
會遊園の日本日



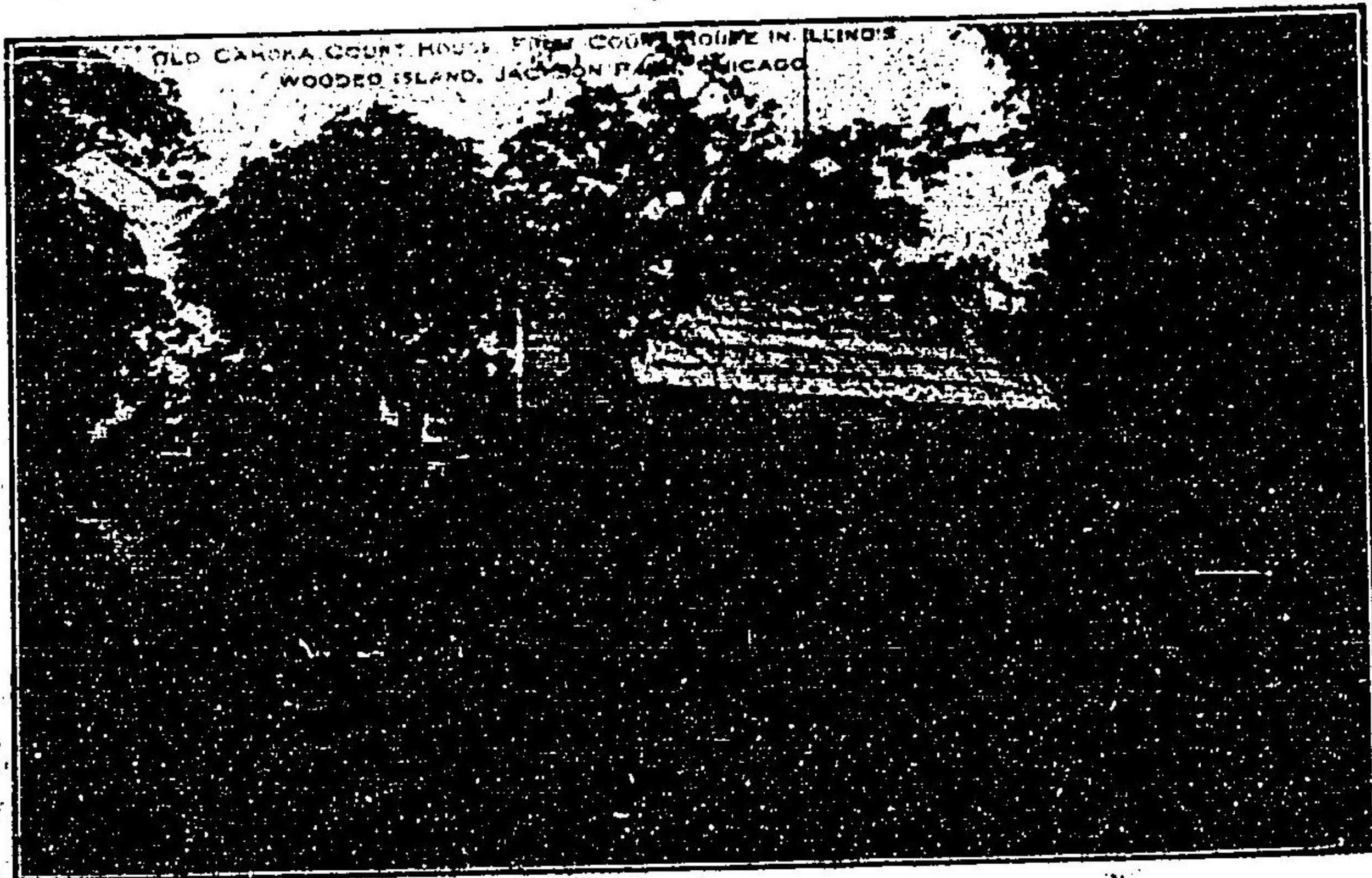
迎歡の市ルトヤシ



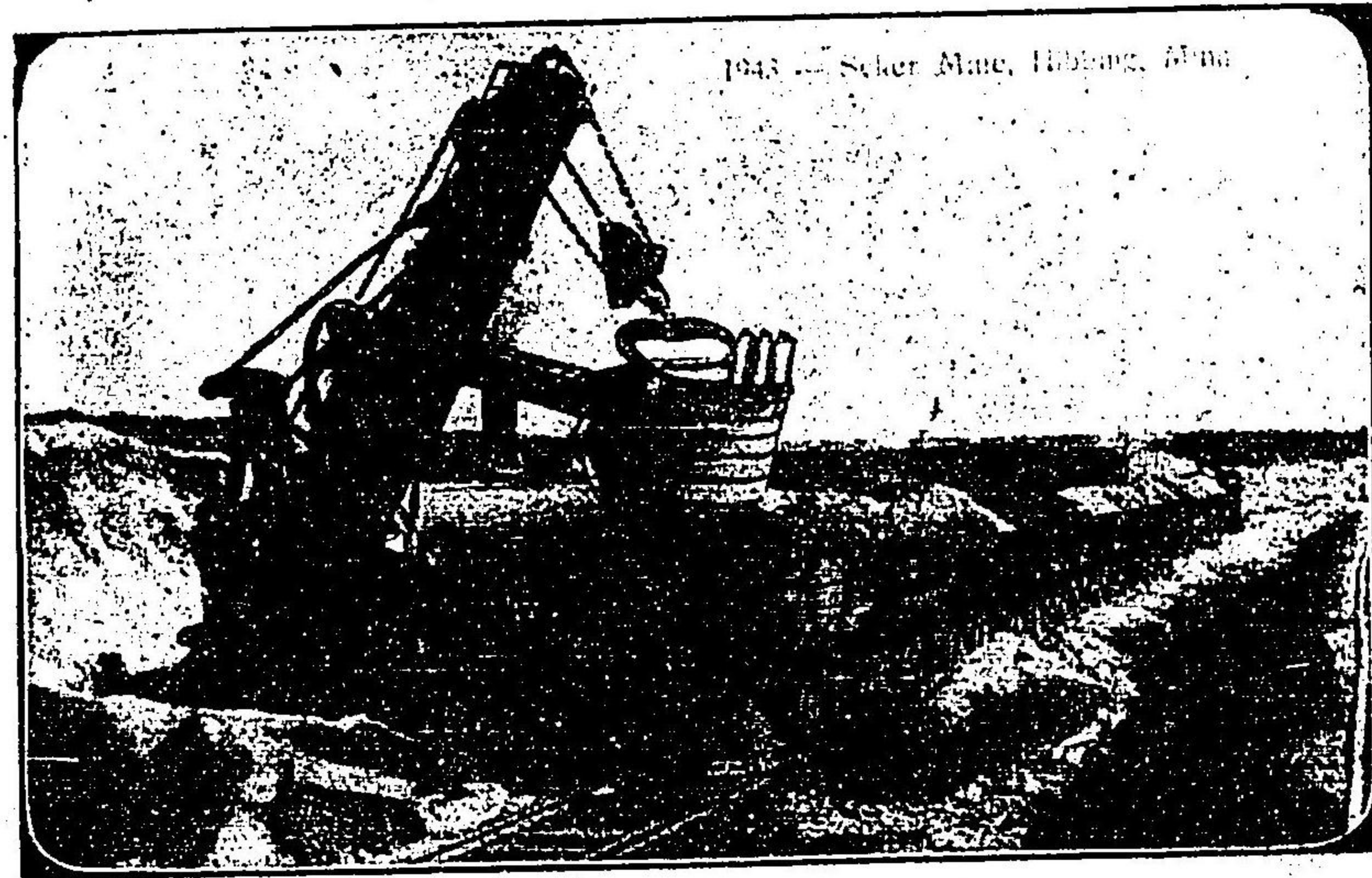
號ンタハ一ホ擬模の日本日



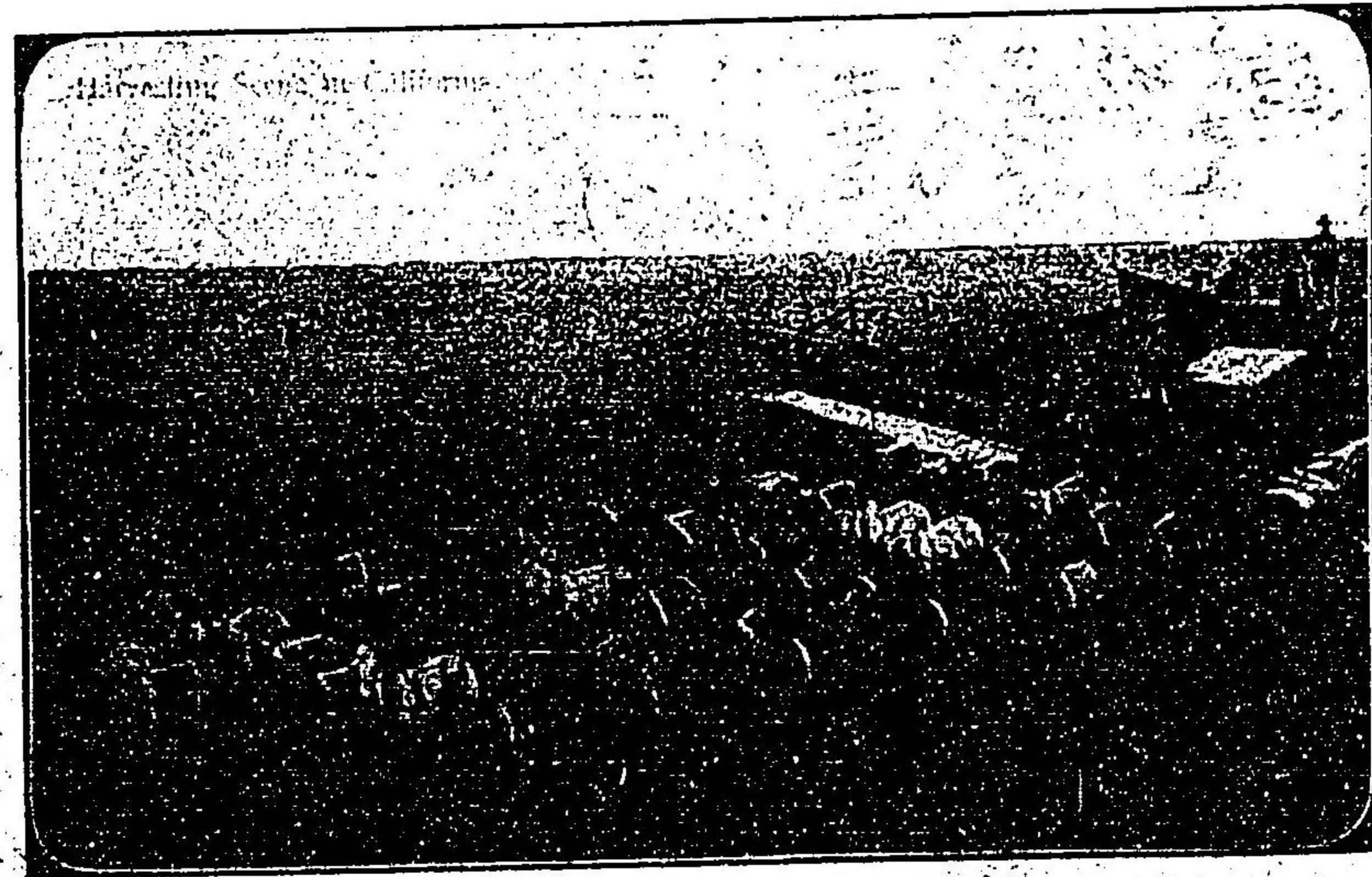
園公ソルヨソリ市ゴカシ



風古の内園公ソクヤツ市同



坑餓大の方地ケンピッヒ



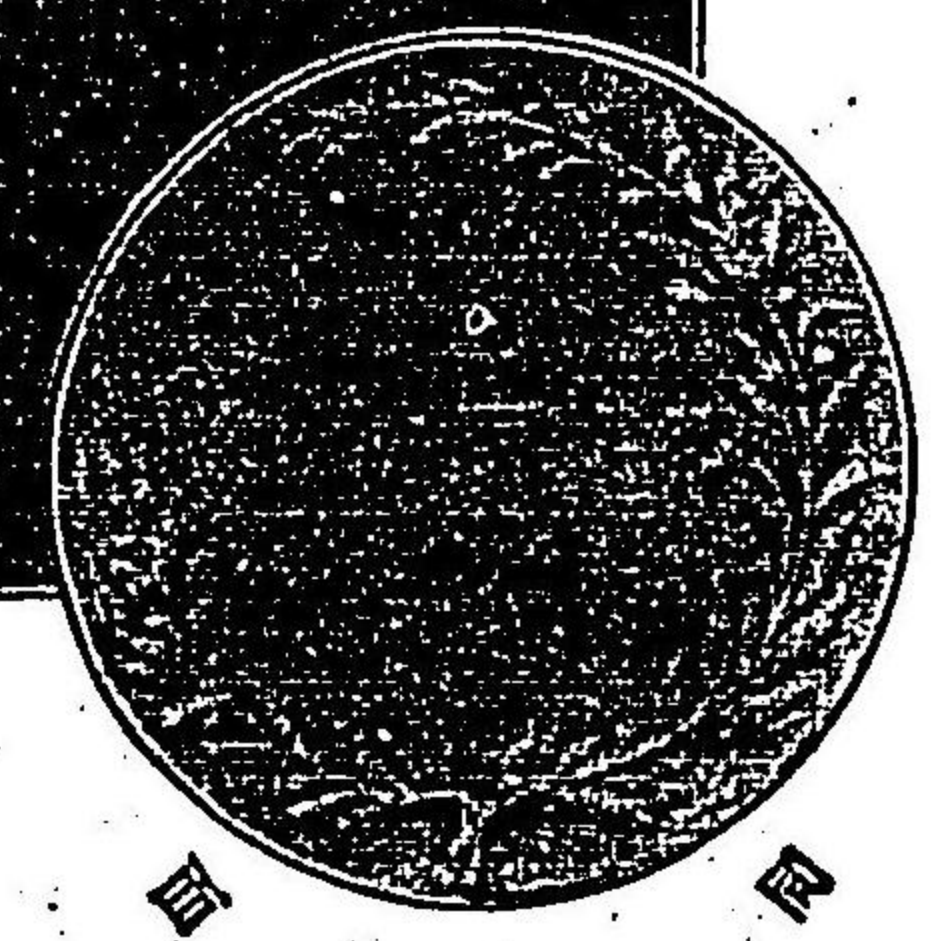
地農大の方地スクォフドンラケ



合衆國造幣局所贈紀念牌

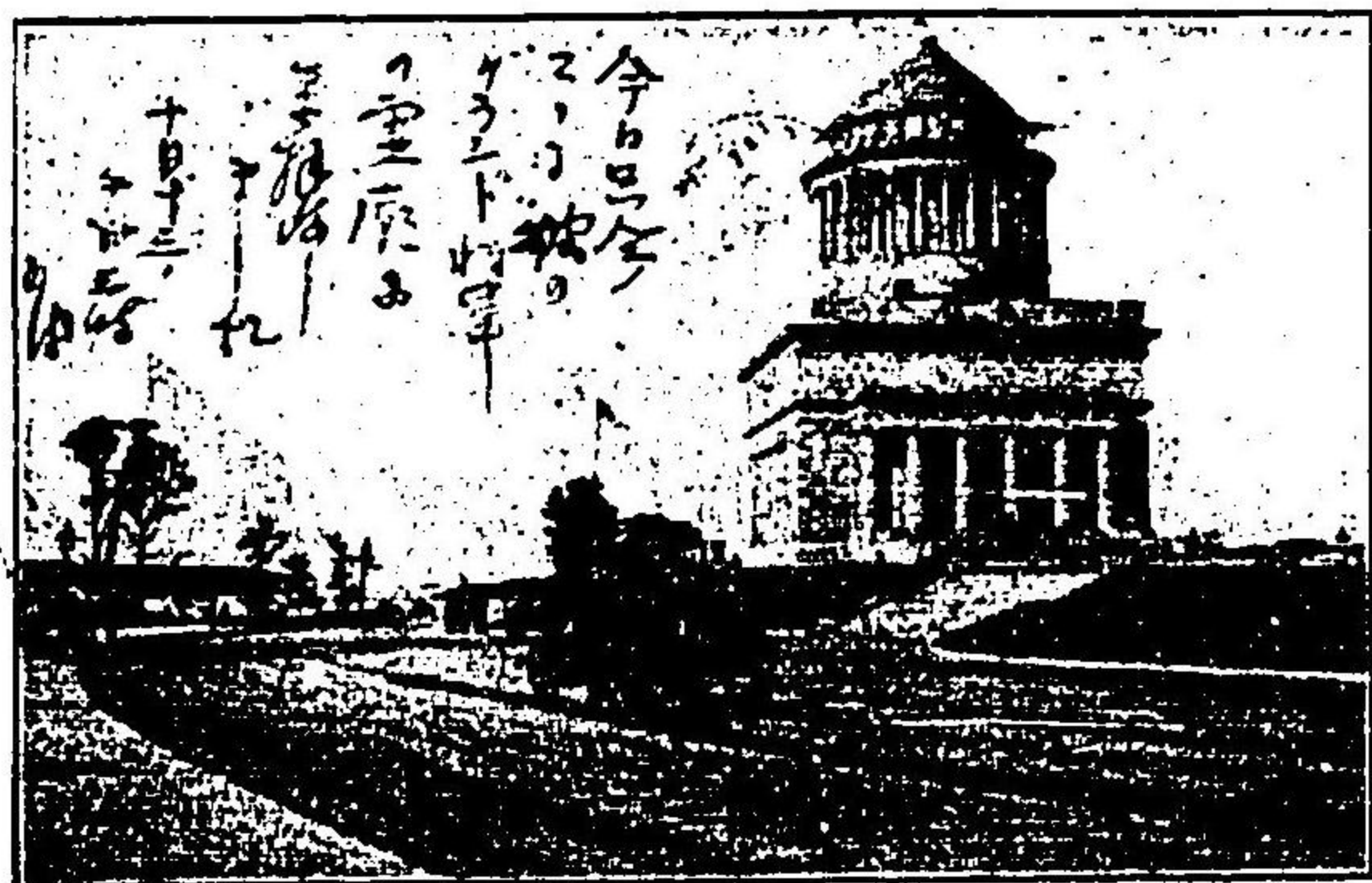


華盛頓府に於ける天長節晩餐會



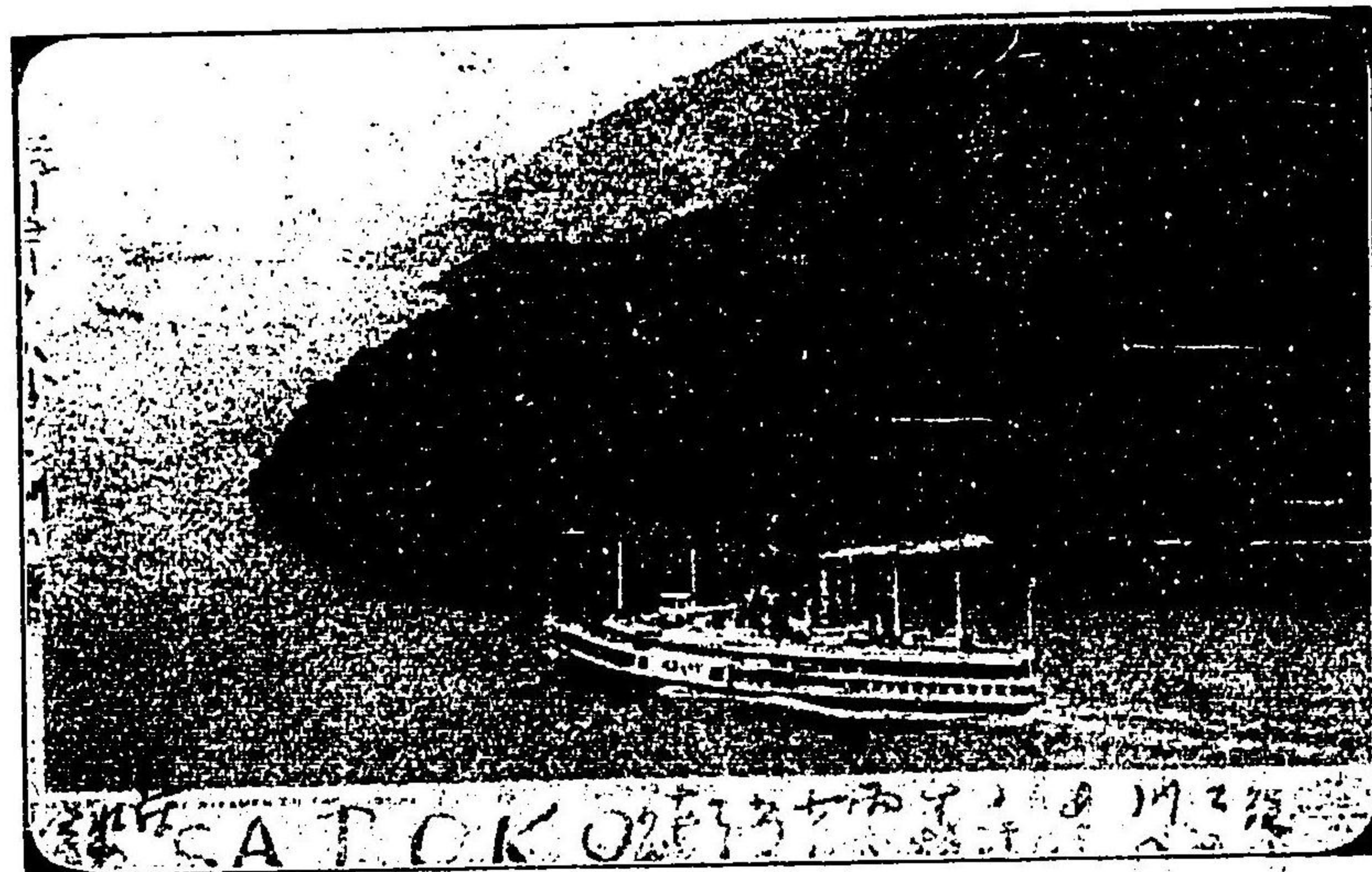
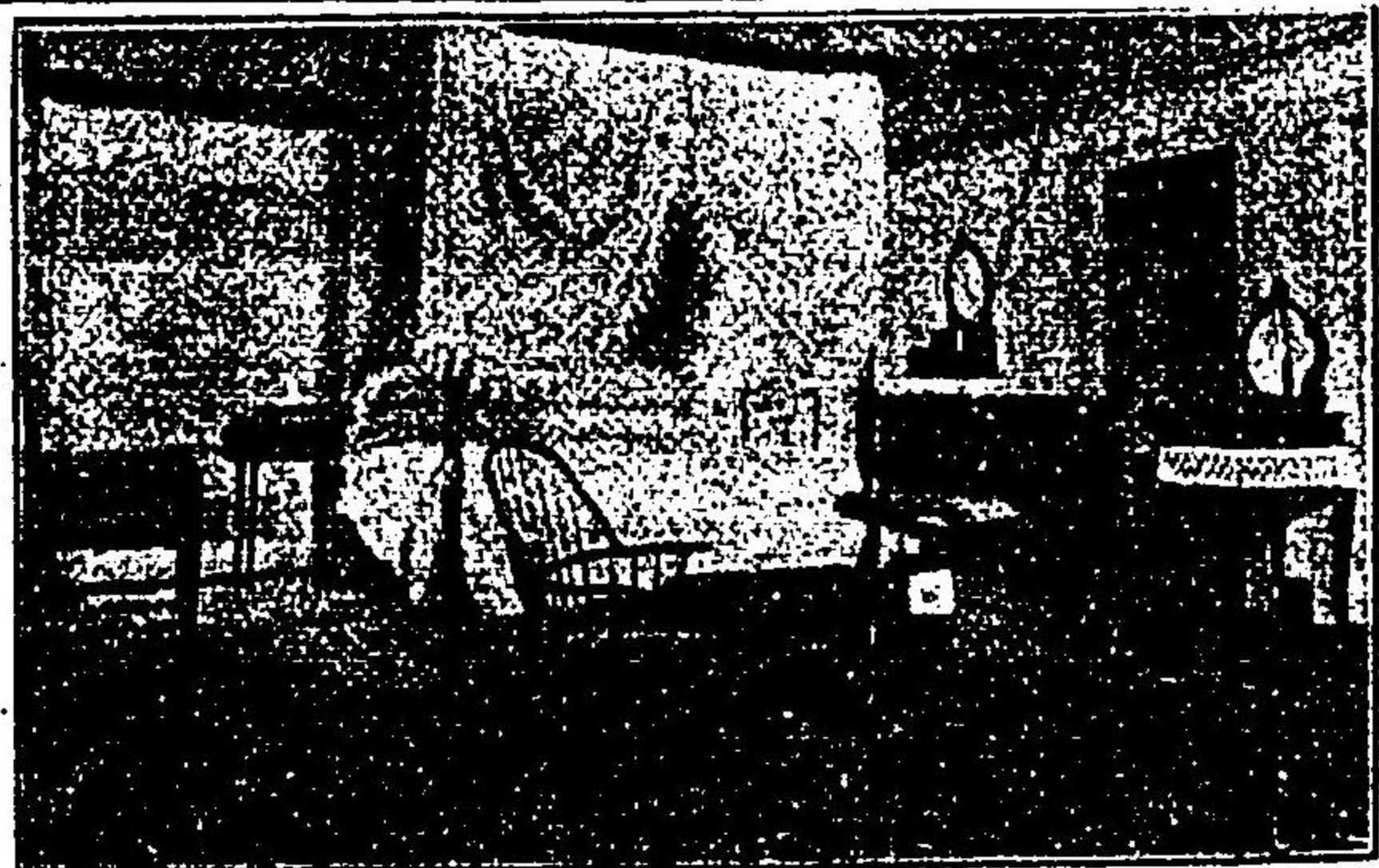
同上

グラント將軍の靈廟
(ニューヨーク)

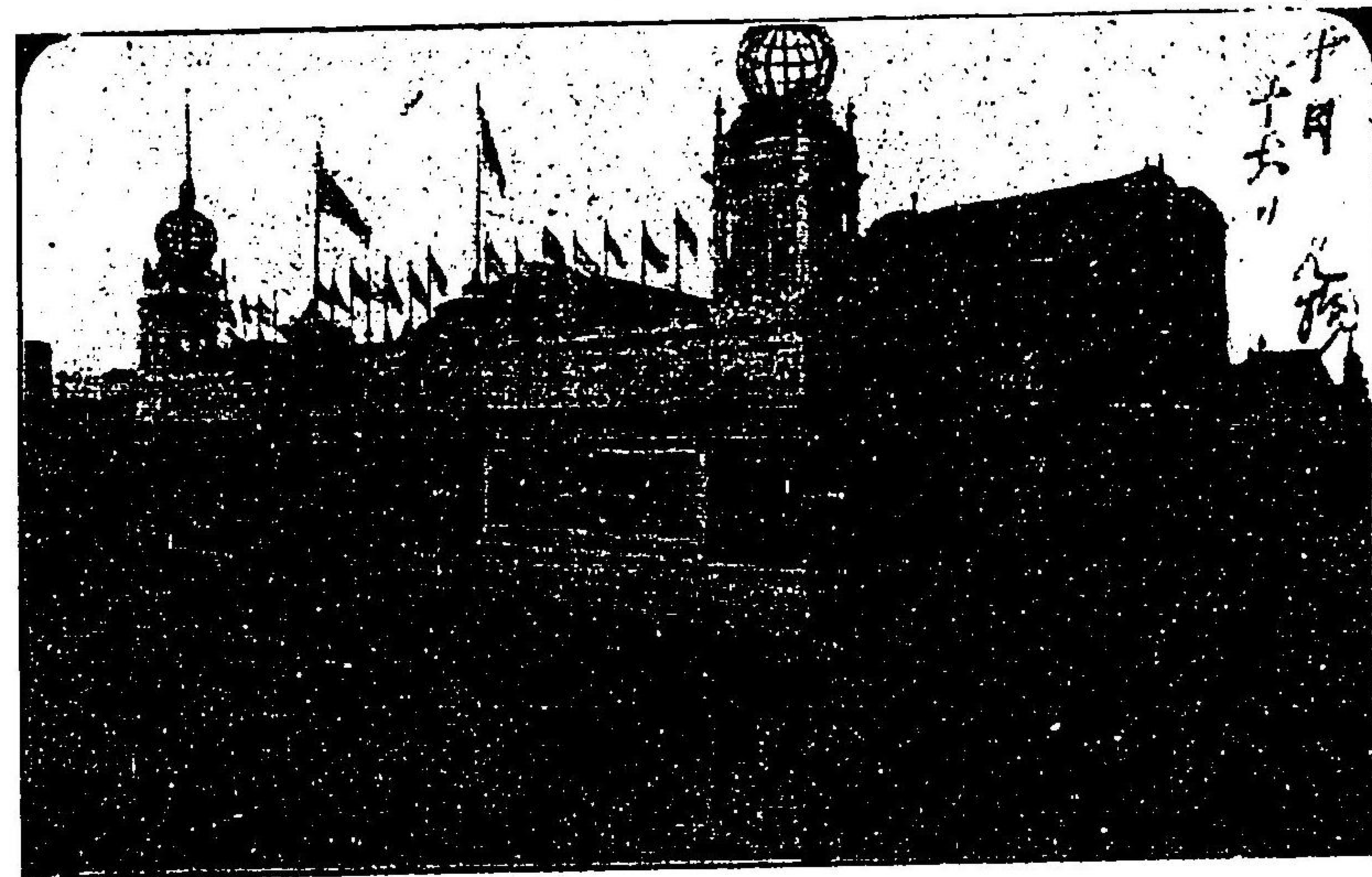


ワシントン記念樹
(ボストン)

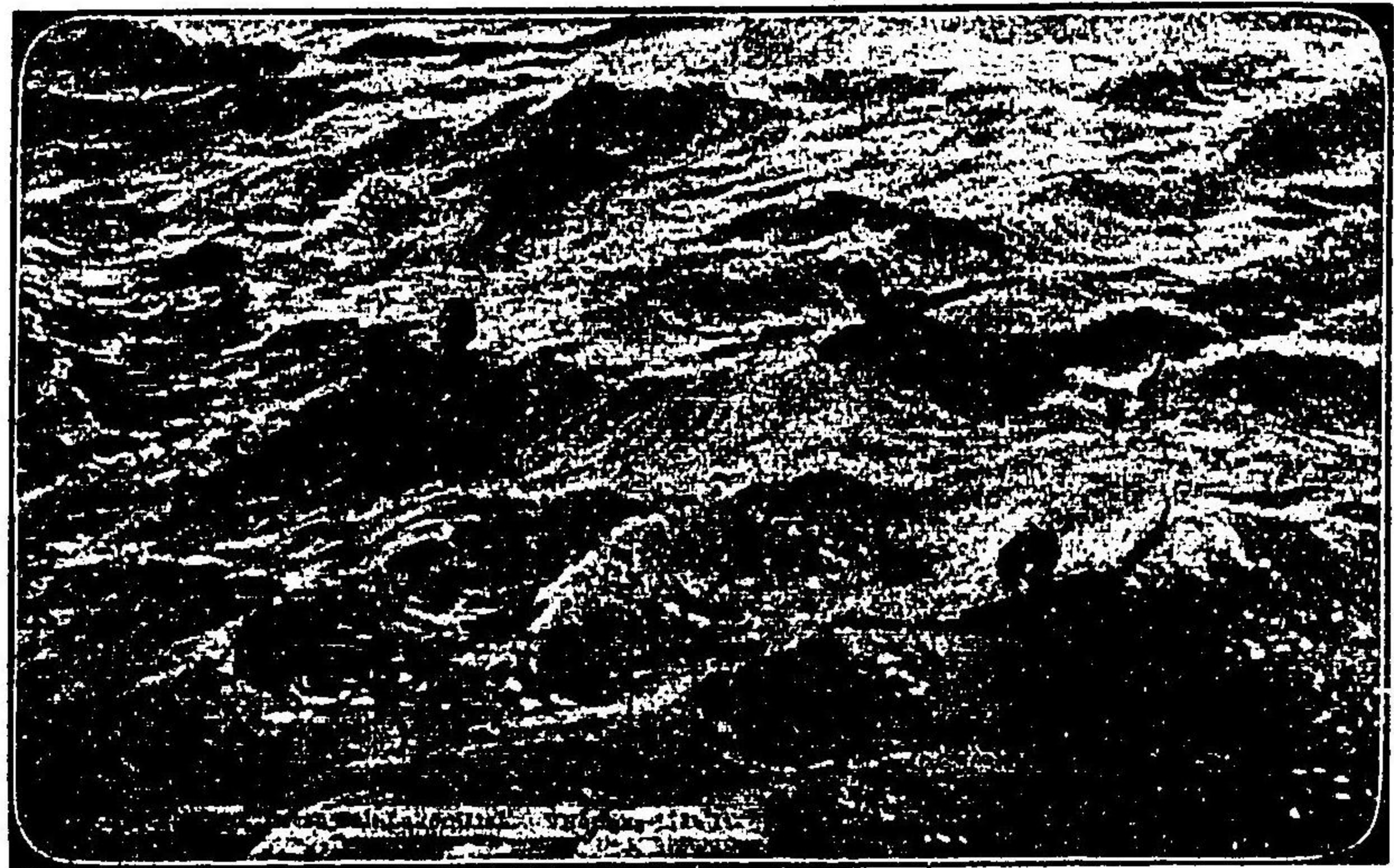
ワシントンの住宅
(モントペリエ)



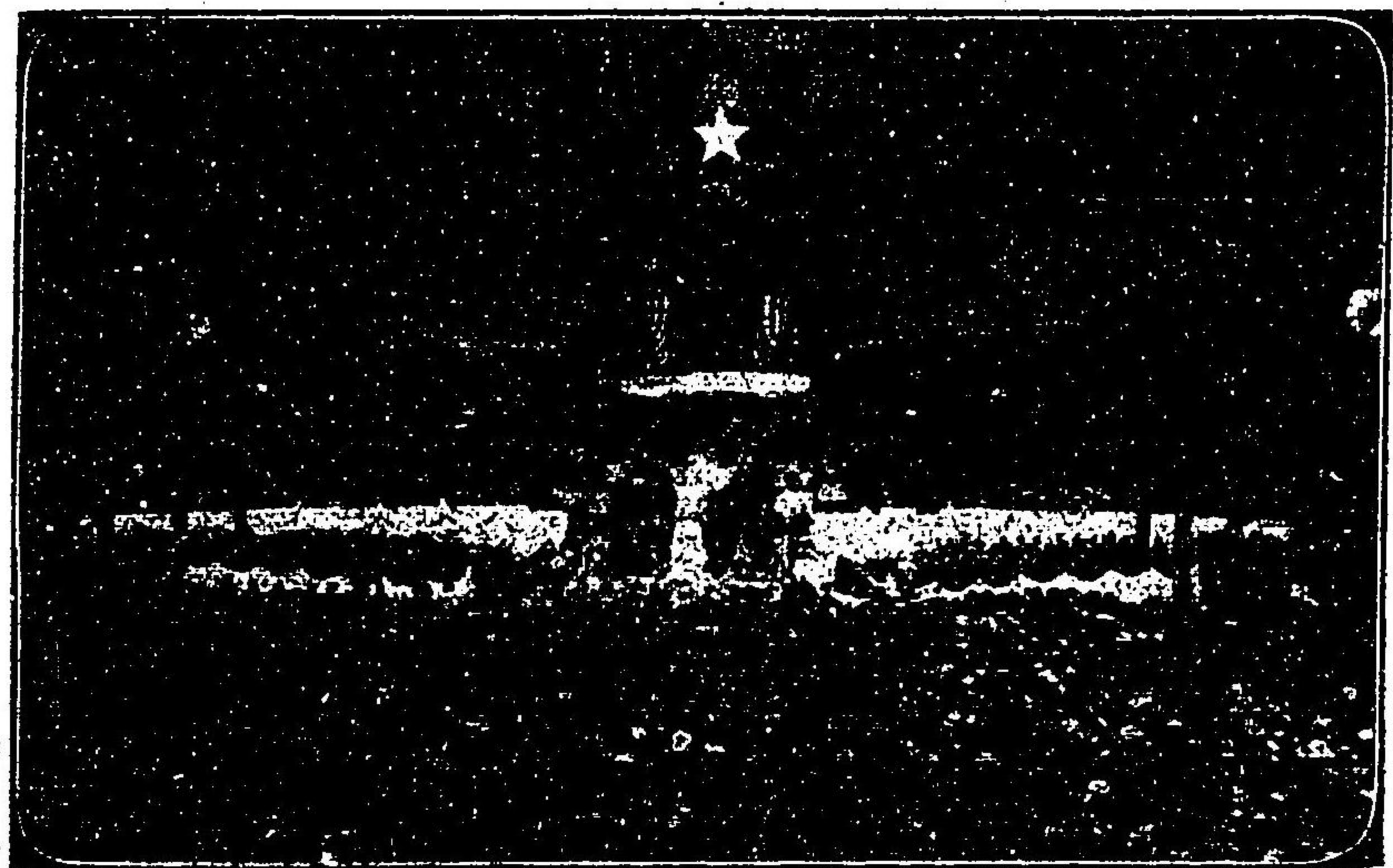
遊船の川ソドハ



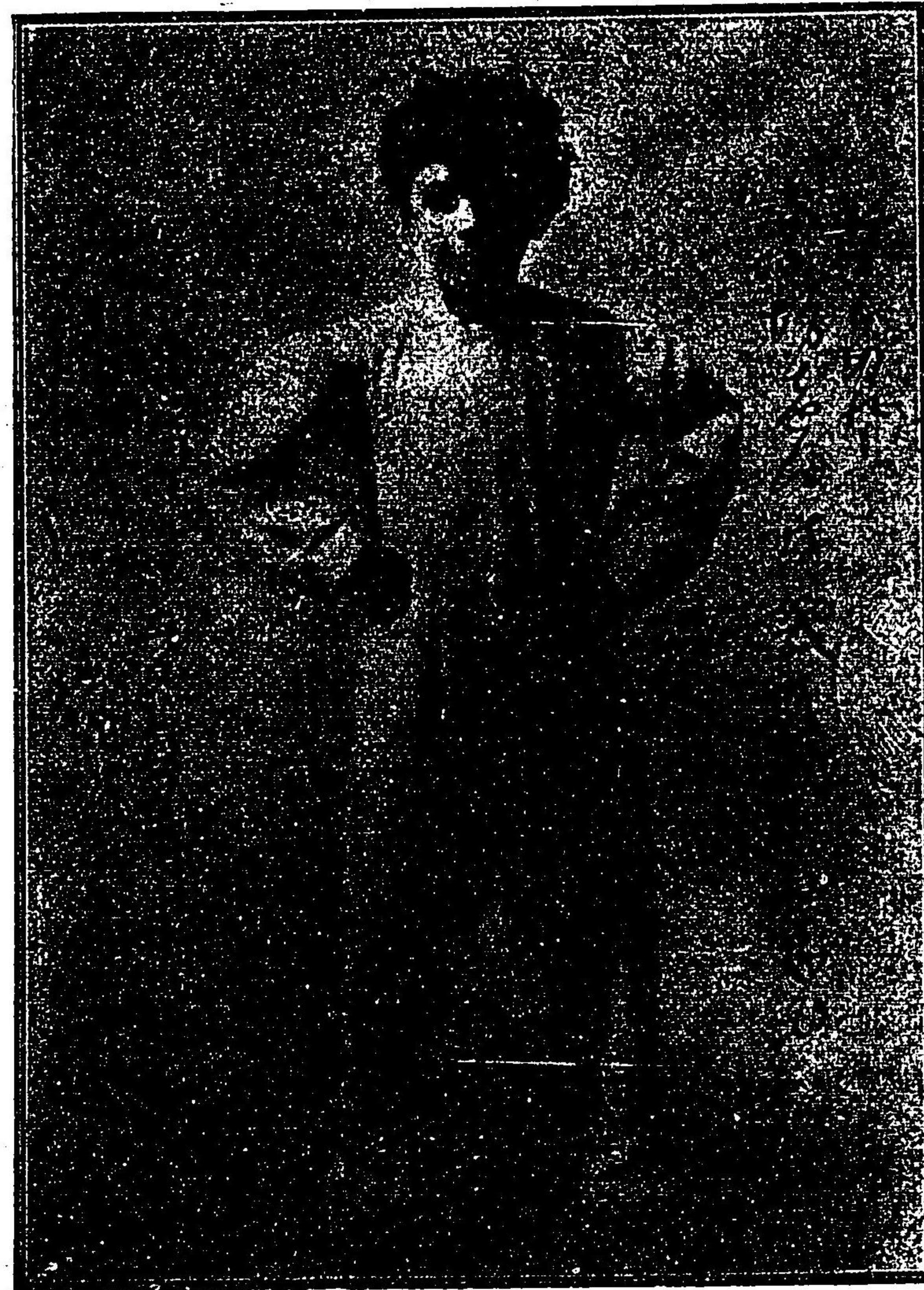
△ - ロドホヒの宵組



湖 登 大 の キ ー レ ド ル ソ

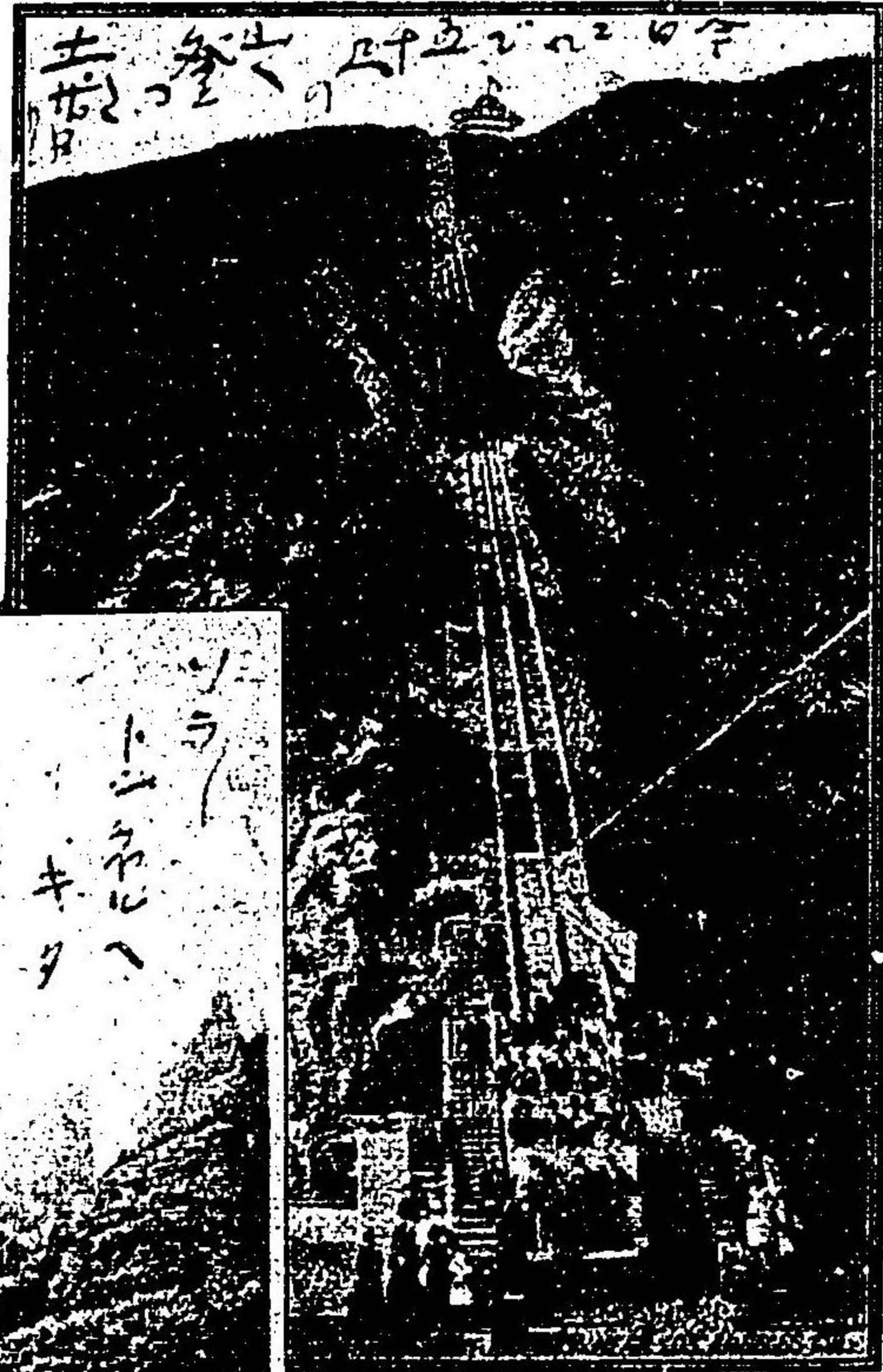


山 本 宗 ソ モ ル モ 同



氏 ア ラ ブ ガ ー タ ス マ

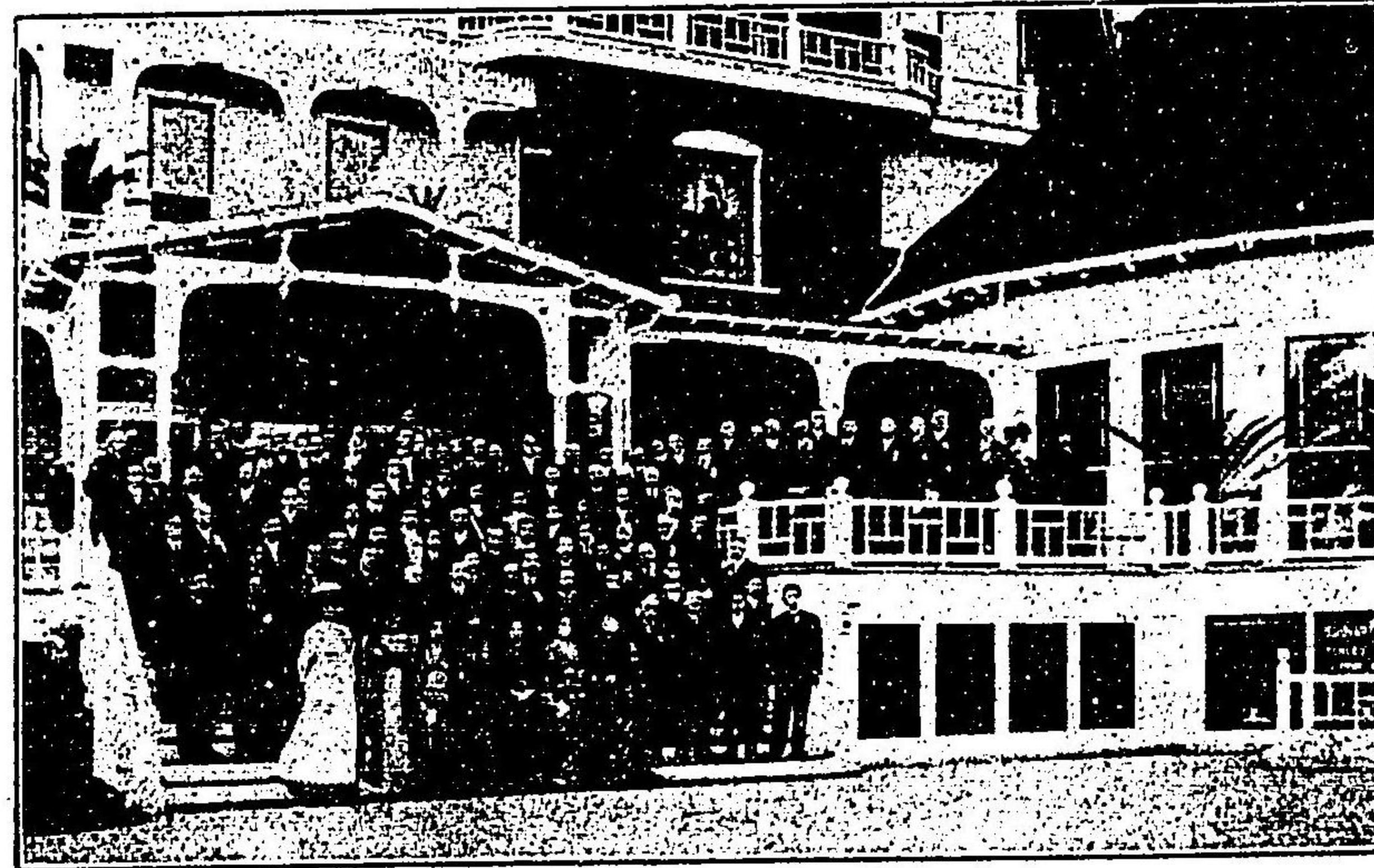
モンローの
登山鉄道



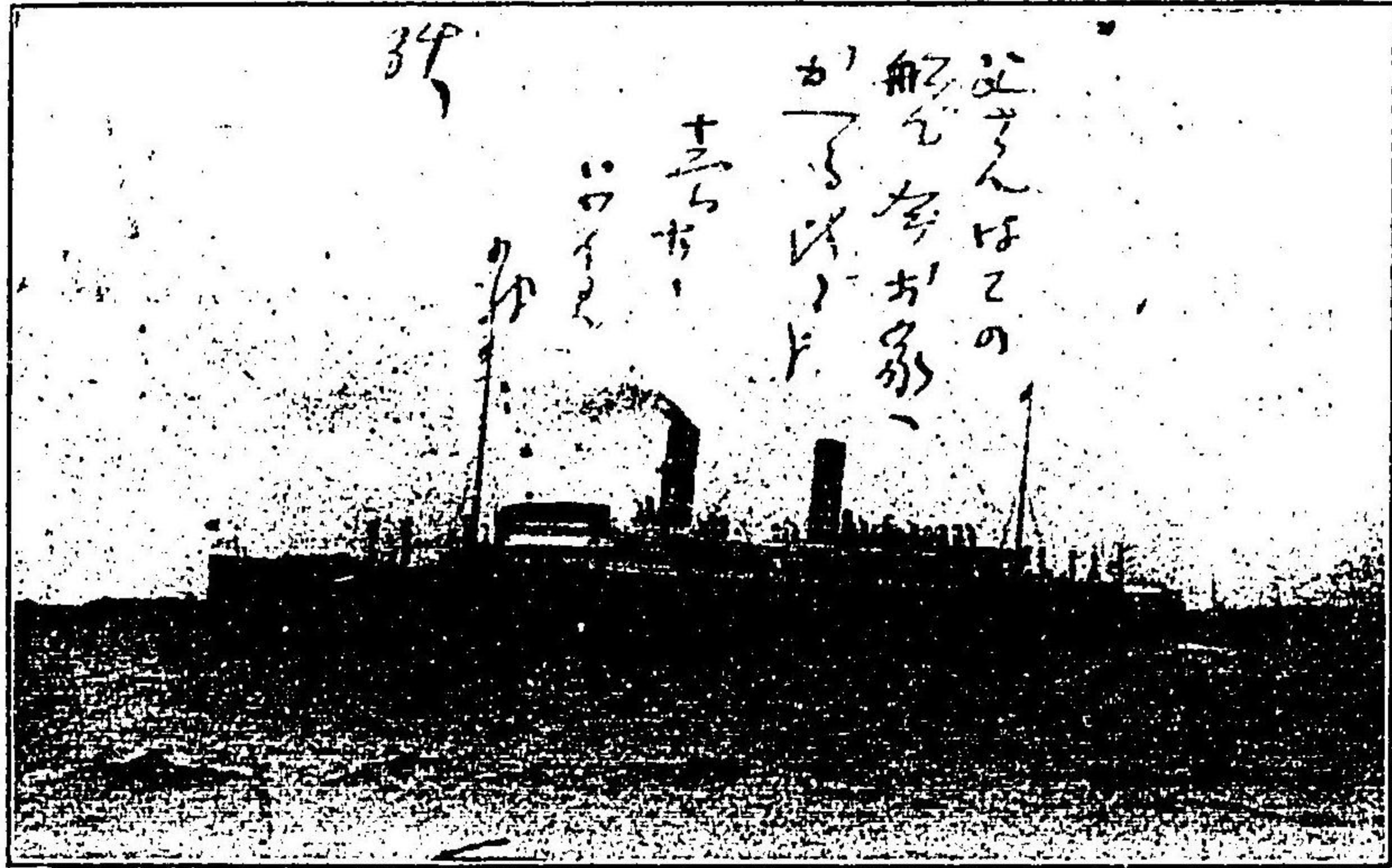
ロッキー山中の一部



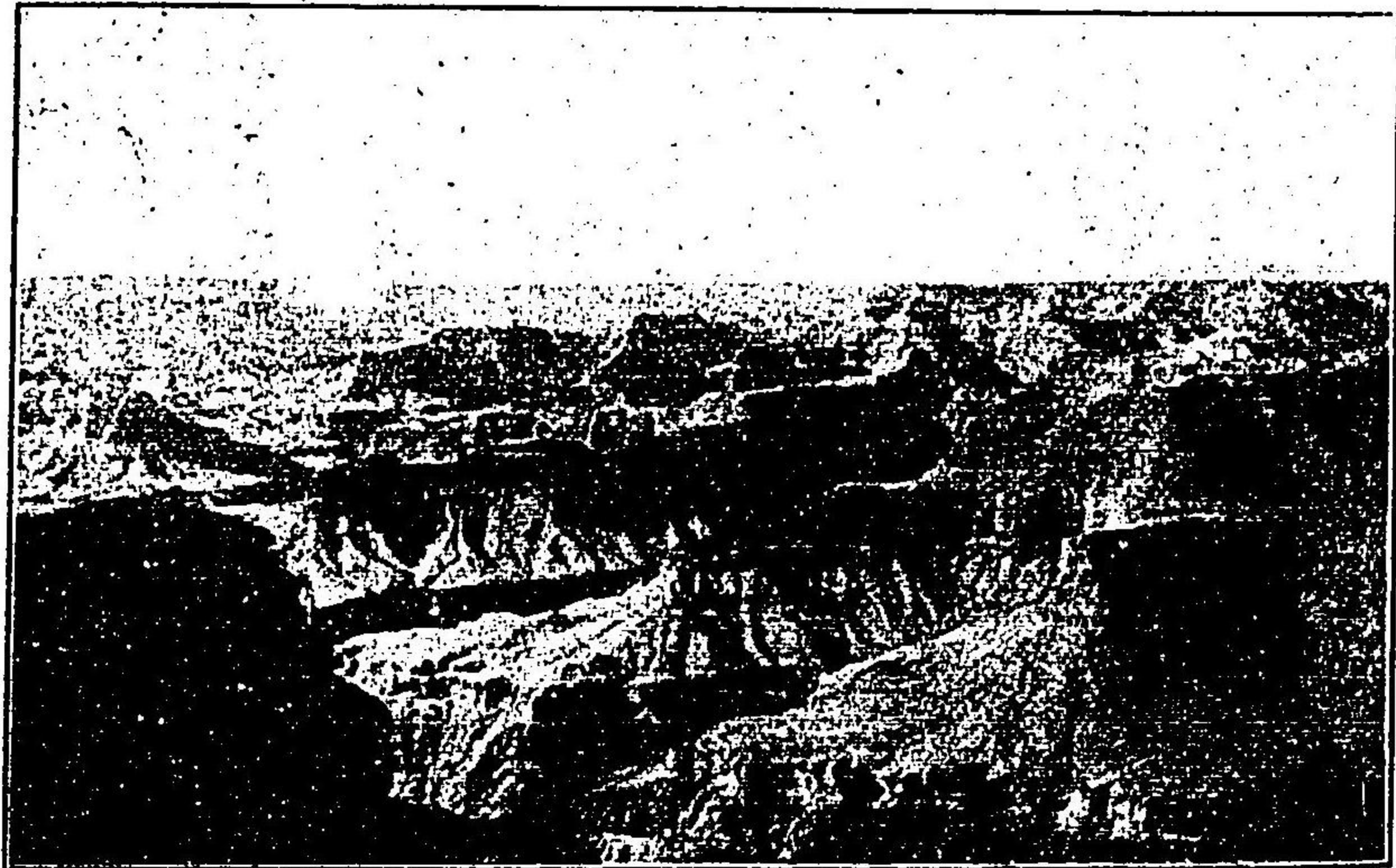
ロッキーの海岸



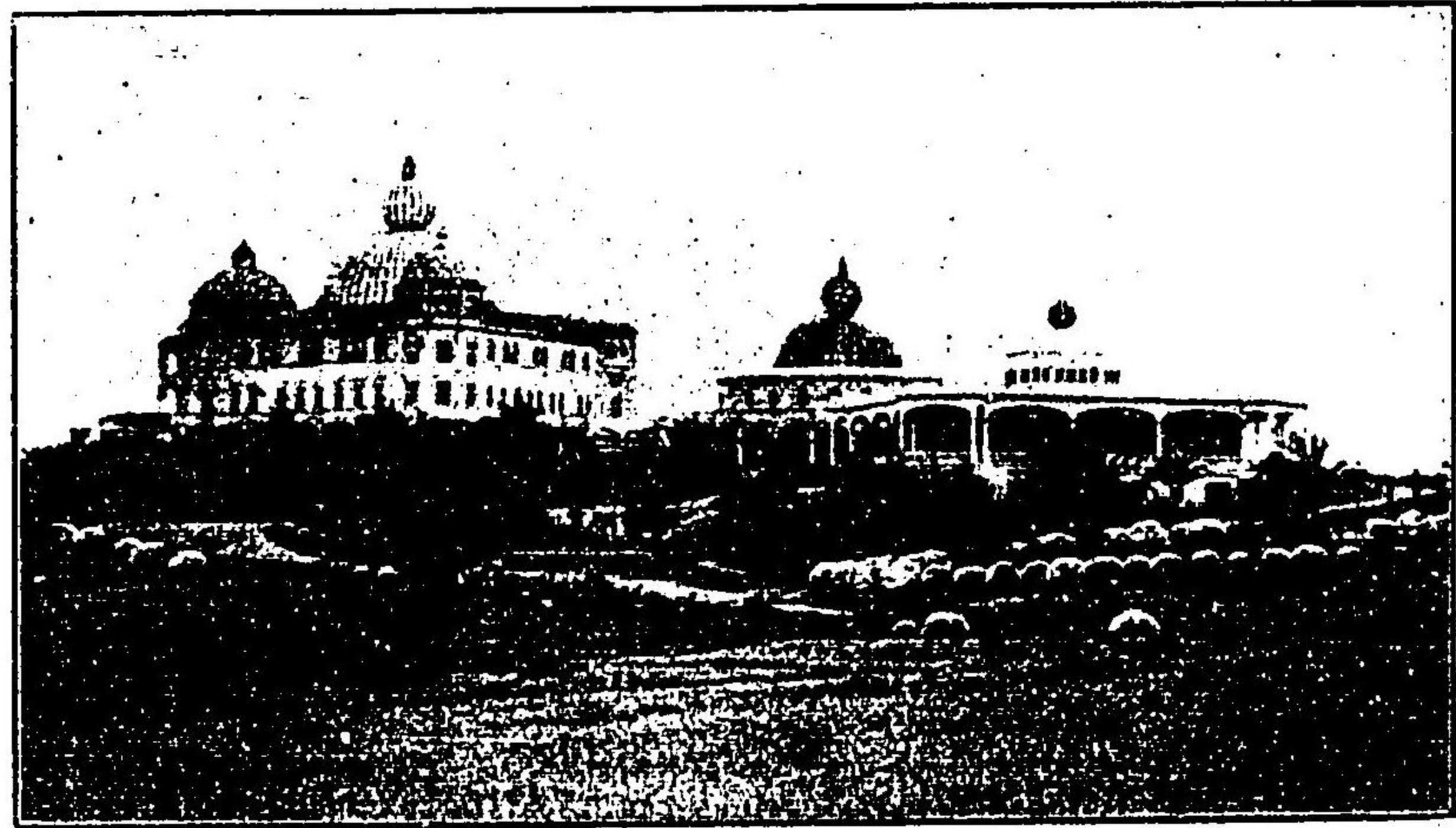
ロッキーの前の一歩



丸 洋 地



ンノヤキ、ド ンラ、ク



校 學 校 日、十、シ、ラ



徒 生 女、男 同



於譽破例日記

太平洋の部

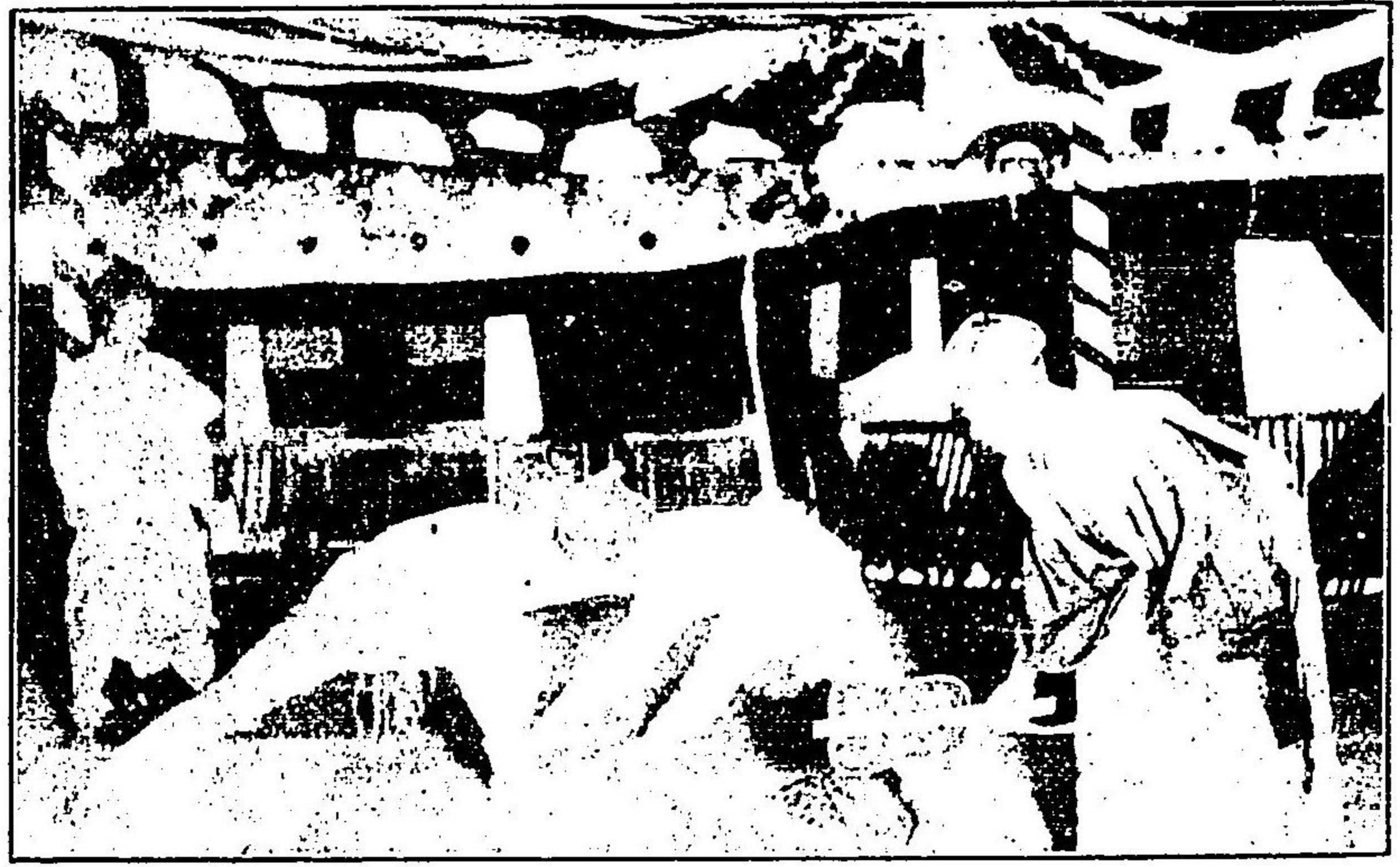
(一) 八月十九日 (木) 晴

午前十時三十分、新橋發の特別列車を以て、一行はいよく「オヨパレ」の途に上つた。何しろ三府、一市、二港に渡つて、約五十名の同行と云ふのだから、その見送りの大勢さ。この行が空前の事

太平洋の部



走競立旅一其會助運の板甲



力角二其

ある如く、又その混雑も空前であつた。何の事は無い、成田の節分
 か池上の御會式か。子は親にはぐれまいと、手代は主人におくれま
 いと、何れも目を皿にして、かき分け押し除け立ちまはつたが、そ
 れでも折角送られた者に、ろくに言葉も交はし得なかつた許りか、
 顔さへ見合さずに別れた者もあらう。

横濱に著いてからは、それく定めの宿に休息したが、その間を
 かけ廻つて、それく感想を聞いてまはる、新聞記者連中の御苦
 勞さ、殊に御察し申さるを得ない。

午後一時には、豫定通り税關の上屋に勢揃ひして、此所から船に
 乗り込む事となつた。元來最初の話では、船中の混雑を慮かつて、
 一切の見送りを此處で打切る筈であつたが、イザと成るとそんな事
 は迎も厲行は出来ず、岸に用意された幾十艘の端艇は、見るく中に
 人を以つて埋められ、果ては老人も女も子供も、猫と杓子を除くの外
 は、殆んど残り無く乗り込んで、本船まで押かけて來たから、さしも



二萬餘噸のミネソダ號も、忽ちの中に人間の鮮桶となつて、折角送
 り送られながら、又手を握り合ふ事さへ出来ず。やがて追出しの鐘
 に驚かされて、本意無く梯子を降て行く時、デッキの上から聲をか
 けて、辛くも別を告げた連中が、蓋し少なくなかつたのである。

午後三時の豫定も、爲に三十分おくれ出て出帆。此時迄も見送りの
 端艇は、本船の左右を離れず、旗を翻へし、樂を奏し、帽を振り、
 ハンケチを廻はして、萬歳々と叫びながら、名残惜氣に港外まで
 尾いて來た。何の事は無い、壇の浦の合戦か、日本海の時戦を、目
 の當り見る想であつた。

▲振りかざす帽子まばゆき残暑哉
 已にして本牧の鼻も過ぎ、富津の砲臺も經て、次第に東京灣を離
 れんとする時、尙未練の首を回らせば、富士は夕映の空に聳えて、
 わが一行を送り顔だ。土居君取りあへず、

▲かへり見る後に高し富士の山

無 鵬



四時の茶にはまだ知らずに出なかつた者もあるが、八時の食事には皆顔が揃つた。但し一行の男女四十八名の外、森村組の村井保固君、やまと新聞の正岡藝陽君も、同じ卓邊の人であつた。

余の室は一等百二十六號で、恰も熊谷醫學士と同室であるから、余は人より二割の徳がある。但しその徳は成るべく利用し度くないものだ。尤もドクトル先生、初晩から決してお茶を挽かなかつた。即ち佐竹町田の兩君は、陸から持越しの胃腸の故障で、其の處方を需めに來た。

食後喫烟室に集まつて居ると、大北汽船會社東洋總支配人マツク、ウイリヤムと名乗つて、愛嬌のある一人の紳士が、一行に挨拶をしに來た。これは特に我々の爲めに、接待係として乗込んだのである。澁澤團長、取あへず同氏に渡米團の紀念章を贈り、手づから其胸に掲げてやつたら、先生大いに喜んで居た。勳位を知らぬ米國人も、此種の裝飾を大に喜のである。

(二) 同 二十日

(金) 曇時々驟雨

昨夜の暑さは非常であつた。中にはデツキに寝た者もあつた。左舷の方が我が本國の筈だが、島一つ見えぬのである。

兼て持ち込んだ碁盤將碁盤は、甲板の其處此處に持ち出されて、朝から頻りに決戦が初まつた。中食後總員喫煙室に集まつて、互ひに名乗り合ひ、更に團長の指名に依て、團の委員が設けられた。即ち

- 中野 土居 西村 松方 大谷 上遠野
- 日比谷 佐竹 岩原 根津 中橋 大井
- 西池 左右田 伊藤 田村

の十六氏。但し中橋氏は先發して出たのである。即ち此旨を、直ちに本國に通信する。通信は云ふまでも無く、無線電信によるのだ。先是はこの無線子を利用して、本國と私信の往復をした者も少ない。中にはその妻君からと見えて、

オカラダハイカ、オダイジニ





など、云ふ優しいのも見えた。

夜の喫煙室では、例に依て談笑涌くが如く、澁澤男はその出發前に、ある若い傳道師に押かけられて、大に基督教を説れたと云ふ話も出た。

又中野氏は昨夜船室付の湯殿の鐵管が損じて、時ならぬ熱湯の洪水に、船室中を引くり返す許りの、大騒ぎをやつたと云ふ事だ。

今日は時々夕立が来た。

(三) 同二十一日 (主) 晴

今朝は際立つて秋氣を覺えた。

▲秋寒し船黒潮に別るとて

例のマツク、ウイリヤム氏、横濱から賞品を仕入れて来たから、大いに競技會を開かうと云ひ出して来た。即ち高辻氏を初め、加藤(中野氏随員)名取(佐竹氏随員)など云ふ若手のハイカラ連、日本部の委員と成つて、専ら之が斡旋の勢を執る。



午後喫煙室に會合して、團長の指名の下に、神田男を委員長として、専門家側の會を開く事に定めた。これは先方の専門家連中と、交渉する爲めの準備である。

三時過ぎ本國からまた電報が来た。而かも一椿事！大阪府下方の火薬庫破裂！團よりは第四師團長宛に、土居氏よりは大阪府知事宛に、何れも見舞の電報を打つた。

夕食の時は何れもタキシードで出た。今夜は船長が正式に挨拶に出るから、特に服装を揃へたのである。實は毎晩かうあるべき筈だが、外人側にもズボラな連中が大分見えるので、我々の方でも各自の随意と云ふ事にしたのだ。

喫煙室の談笑は、日増し、夜増しに盛に成る。就中松方、岩原、松村、田村の四君、蓋し其音頭取であつた。土居翁冷にこの體を見て、
▲打とけた話涼しき一室かな 無 腸

(四) 同二十二日 (日) 曇



船は餘ほど北へ来たので、氣候も大分寒くなる。其上北海名物の濃霧は、船の四面を押し寄せ、何と云ふ陰氣な事であらう。船も爲にボー／＼と不平を鳴して居る。此際せめてもの儲け物は、船の動搖の少ない事だ。

今日は日曜日だと云ふので、外人側は一向遊に出て来ない。日本人はそんな事にかまはず、朝から鳥鷲を戦せ、飛車角を取合て居る。試みに一同の年齢を調べて見ると、大阪の大井君の七十六を最老とし、根津氏隨行の上田君の廿三を最少として、その平均が四十六歳強。又た丈の高さを計つて見たら、名古屋の伊藤氏の五尺七寸五分を最長、東京の原氏の五尺を最短として、その平均が五尺四寸強。序に髭の有無を見ると、職員四十四人中、有る者が三十四人、無いものが十人、眼鏡をかけてるのと、掛けないのを見るに、かけた者が十九人に、掛けないものが二十五人と成つた。今夜の喫煙室では、とう／＼一同に促がされて、お伽噺一席を演



じた。平均四十六歳の聴衆を前にして、他愛も無いお話を聞かせたのは、拙者三十九年二月に成て、蓋し初めての事である。

(五) 同二十三日 (月) 曇

濃霧は相變らず。其爲めでもあるまいが、昨日から不通の無線電信は、今以て要領を得てくれない。

午前から圍碁の競技會が初まつて、三段の大谷氏之が審判長となる。外人等はこれを聞いて、誰が勝つての敗けるのと、例の賭を初める。何の事は無い、大日本實業界の大家連中も、かう成つては競馬の馬同然だ。

團中の新聞記者を見渡すに、朝日の石橋君あり、毎日の高石君あり、之れにやまとの正岡君も加はり、一番船中で新聞を發行しやうと云ふ議も出たが、印刷機關の不備の爲に、遂に立消と成てしまつた。日本を離れてから、まだやつと五日にしか成らぬのに、もう米の飯を戀しがる連中は、特に日本ボーイに註文して、晝食に日本食を



命じた。鹽鮭、牛肉の煮込、玉子焼、玉菜の味噌汁、あとは福神漬に味付海苔。日本でなら下宿屋式の献立にも、皆舌鼓を打つをがしさ！ 但しこの一食には、別に支拂ふ代金一名が三十錢宛。これではあまり贅も云へない筈だ。

中食後、團長の命令で、高石君「赤心一片」の一節を朗讀する。これは園田孝吉氏の、西洋禮式を説いたものだ。

今夜喫煙室に集まつた所で、試みに一行諸氏の見立てを作つた。

まづ之を動物にすれば、濞澤男の牛、中野君の水牛、田村君の獅子、大谷君の山羊、松方君の猿、岩原君の犀、土居君の象、大井君の狒狒、左右田君の狸、佐竹君の神馬、日比谷君の犢、根津君の豹、坂口君の熊、高石君の洋犬、上遠野君の虎、伊藤君の麒麟、神野君の駱駝、石橋君の龙犬、松村君の豚、神田男の白熊、堀越君の騾馬、及び拙者の馬の如きは、まづ適評と云ふ事であつた。更に七福神を作つて見る。まづ大黒天が濞澤男、惠比須が中野君、辨天が西村君

毘沙門が田村君、壽老人が佐竹君、福祿壽が大谷君、布袋が土居君。まづこんな事で、大いに喝采を博したのである。

(六) 同二十四日 (火) 曇

園藝競技會の決戦は、午前の中に結果が解つて、中野君優勝の名譽を得た。

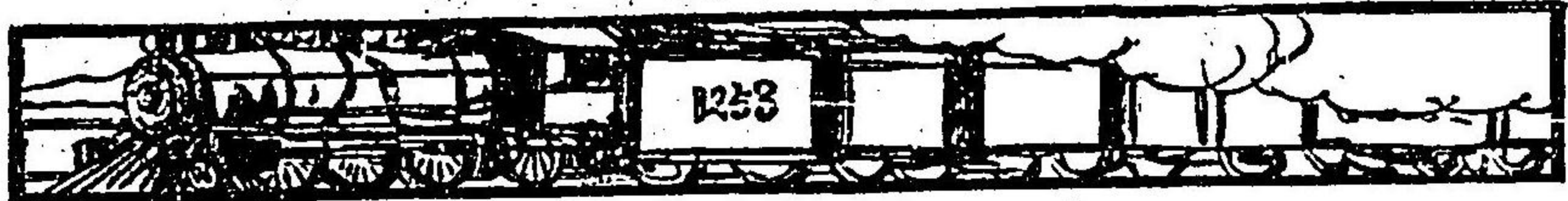
碁將基と、併行して、今日からトランプを弄ぶ者も初まり、又闘球を争ふ者も殖えた。尤も將基は田村君審判長と成つて、新たに競技を初めたのである。

大分寒氣が増して來たので、皆冬服と著かへ初めた。夕方新月を艦の方に見る。但し霧に隔てられて、恰も大觀子の畫を見る如くだ。

我が國は日出る方と思ひしに

月の入り端をなつかしむかな

(七) 同二十五日 (水) 曇時々小雨





相變らず朝飯前から碁盤を睨み合ふ人がある。
中食後名取君の朗讀で、大阪新報の加藤恒忠君が書た、「ハイカラぶり」を聞く。ついで堀越君から、風呂場や便所での作法の注意がある。中には耳の痛い人もあつたらう、又齒の痒い人もあつたらしい。

甲板運動會は又催された。中にもピロウ、フアイト」と云ふ、丸木の上に馬乗に成つて、枕で打ち合ふゲームは、當人が轉倒する度に、看者をして絶倒せしむる、頗る振つた競技であつた。

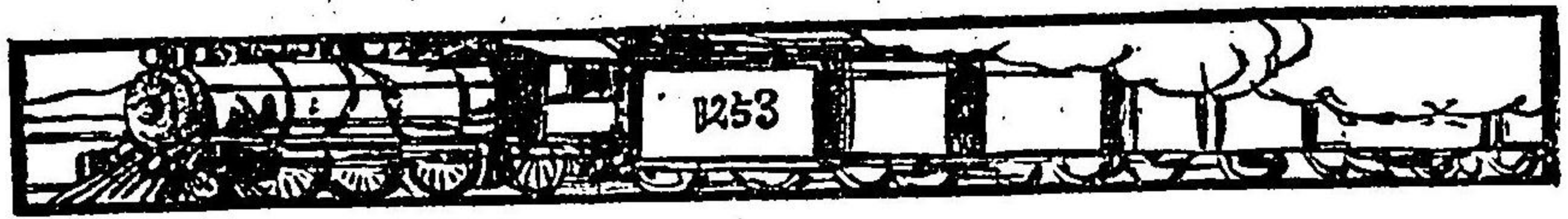
將基の決戦の結果を聞いたら、神戸の多木君優勝と云ふ事である。

(八) 同日 陰晴

此處に同日の重るのは、例の子午線の致す所で、東西兩半球の繼ぎ目を、恰も船が越えるからである。土居翁に句あり曰く、

▲徒然の拾ひ物なり秋一と日 無 勝

昨夜ふと家に歸つた夢を見た。それがをかしいでは無いか、丁度



餘分の日が一日出來たから、此間に一寸歸つて來たと云ふのだ。道理らしい馬鹿げた夢だ。

中食後昨日の「ハイカラぶり」の續きが讀み上げられた。但しハイカラを卒業した松方、岩原、田村君などは、むしろ眠りを催はされて、中にはズボンを焦した人もある。

今日もサクレースや、薯拾レースがあつたが、五目並の競技では、横濱の原博士が勝つた。

誰が出し初めたか、喫煙室に雅帖や唐紙や統が出されて、紀念揮毫がはじまつた。しかつめらしい熟語を題する者、途上の口吟を試みるもの、乃至戯畫を揮ふ者、何れもなか／＼隅に置けない。而も之が實業團である所を見ると、更にコントラストが面白いでは無いか。昨夜すれちがつた丹波丸から、一寸電信が掛つたと云ふ事だが、其後何等の沙汰も無い。それには高平大使が乗つて居られる筈だが、本意無い別れをしたものである。

夜は中野君の夜酌に招かれた。相客は京都の西村君。下物は雲丹ぎすけ煮、福神漬、からすみ、海苔の類で、御持参の正宗を、純日本式の徳利と猪口でチビくやる工合、兼て噂の通りである。耳漸く熱するに及んで、東西兩商業會議所會頭の氣焔、正に好個の新聞材料であつた。只惜らくは、我れ經濟記者に非る事をだ。



レニヤママウンテン

(九) 同二十六日 (木) 晴

久し振りで青空を見る事が出来て、甲板逍遙の心地宜さ！ 但し

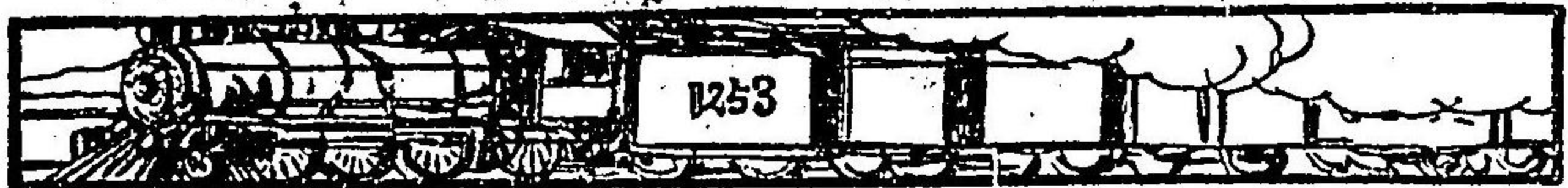


寒さは十月の下旬と思ふ位だ。

今日の中食後には、神田男爵のシヤトル談があつた。これは船中に配られてある、彼地の博覽會の廣告帖を、譯述したに過ぎないものである。

其話に引ついで、松方、田村、名取、村井、堀越等と云ふ、既成ハイカラの面々が、それく赤毛布時代の失敗談をさらけ出した。後學の爲に謹聽する者、曰く根津君、曰く小池君、曰く大井君、左右田君。

夜一品會が開かれた。これは各自の所持品の中から、旅行用品若くは旅中の慰み物を持ちより、其中で最も振つた者に賞を與へ、又他人とつき合つた物には、一弗宛の罰を課すると云ふのだ。それで各自喫煙室に持ちより、大谷、田村、堀越、名取の四君、及拙者が審査員に成つて、とくと審査をした結果、田村君の懷中バロメータアが、遂に最高點を占める事と成つた。又罰金の方では、松方君と飯

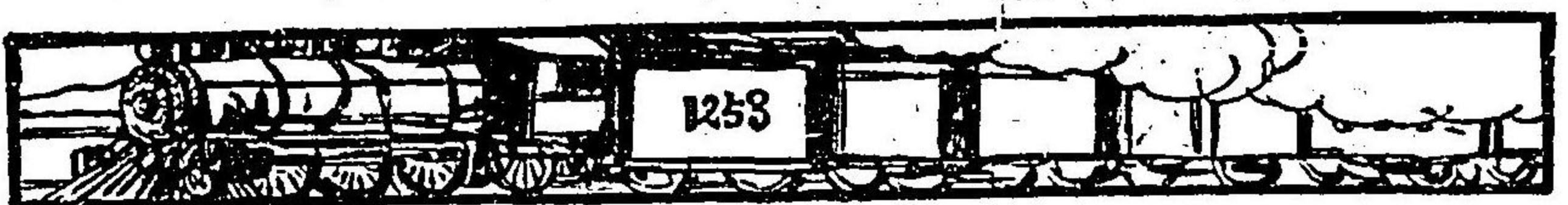




利君(日比谷氏随員)とが錢、佐竹君と南博士とが楊枝、町田君と西村君とが熨斗、大井君と熊谷君とが人形で、各衝突したのである。尤も七十六歳の大井翁が、三寸許の可愛い京人形を出したのは、寧ろ大喝采であつたのだが、何分初めの約束だから、罰はやはり受けねばならぬ。

(一〇) 同二十七日 (金) 曇

滅法寒くなつた。聞けば五十一度だと云ふ。今日は一つ體量を計つて見る。田村君の百七十七ポンドが一番重く、原君の九十八ポンドが一番軽いのだ。それで一行の平均はと見ると、百三十二ポンド強。悲かな拙者なぞは、その平均以下であつた。
午後食堂に委員會を開き、各分擔を定め、又一行を七組に別ち、それぞれ幹事を置く事に定めた。追々著米に近づいて來ると、こんなまじめな會も開かれねば成らぬ。



同船の米國人一同が、上院議員スチブソン氏を筆頭にして、我が一行に案内状をよせた。それは明二十八日午後三時半、喫煙室に我々を迎へて親睦會を開かうと云ふのだ。團長即ち神田男、岩原、松方の三君を指名して、之に對する打合をなさしめた。

夜の喫煙室の一隅では、排苦學談、後進養成談、乃至自家の立志談など、云ふ、眞面目な問題に花が咲いて、いつも混せ返へす松方君も、此時は眞顔で二三の經驗談を爲し、大いに耳を傾けしめた。

(一一) 同二十八日 (土) 曇

午前圖書室に東京組の總會を開き、これを三組に別つ事にした。引ついで神田男座長席につき、専門家側の相談會を開く。これは彼地に渡つてから、各専門の研究に便宜を謀る爲である。

今日は會の流行る日で、中食後は又食堂に總會が開かれ、原(林之助)氏の調べて來た、ベデカア案内記の抄譯朗讀を聞いた。三時半からは、兼て案内のあつた、同船の米人側の招待で、團員一同此喫



煙室に集まり、シャンペン、サンドキッチ、菓子、煙草等の饗應をうけた。發企人を代表して、まづスチブソン氏の挨拶があり、濫澤男の答辭があり、我が天皇陛下の爲に、米人側からフアラ〜が叫ばれると、彼の大統領の爲に、日本側から萬歳が三唱され、それから引つゞいて、彼我交る〜立ち上つては、思ひ〜のスピーチを試みた。要するにこの二時間許りは、日米親交の實を擧げて、頗る愉快に送る事を得たのみならず、我々一行に取ては、彼地に於ける歡迎會に臨む場合の、云はゞ簡單な豫行演習とも成たのである。

今夜の喫煙室では、土居君の懷舊談が出た。それが維新史に關係のある丈、殊に興味が深かつたが、惜いかな之を聞いた者は、拙者等三四人に過ぎなかつた。

今日我々を呼んでくれた、米人側の筆頭スチブソンと云ふのは、デンバアの上院議員で、前大統領とも親交のある、彼地では有名な男だ。只見る梅ヶ谷其所退けの大兵肥満、頭髮から顔面の容態、舶來の矢口の頓兵衛とも云ひ度い位。又一座の中に居た大尉某は、南米土人との混血兒とも覺しく、其の人相の犖猛に、服裝の武張つた工合これは黒旋風李達と評すべしだ。

(一一一) 同二十九日 (日) 雨風

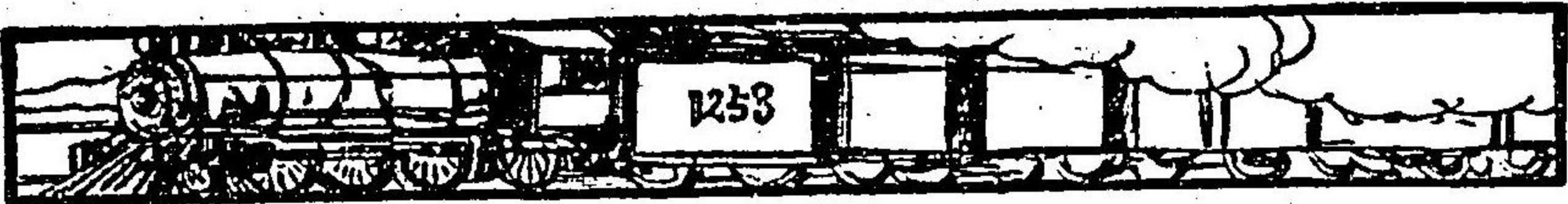
寒さは遂に五十度に下つた。

午前總會が開かれ、引つゞいて各分科會に移つた。分科と云ふのは、幹事、庶務、會計、新聞檢閲、及記録の五部である。

午後の總會には、高辻氏の「労働者取扱談」があつた。これは彼地で演説すべきものを、豫め團員に披露したに過ぎない。

明日の晩は、此方から米人側を招待するので、その餘興の準備に取かゝる。その委員は高石、加藤(中野氏秘書)名取、飯田、上田の面々、及び拙者なのである。

今夜初めて無線電信が通じた。そして初めて知れたのが、アラスカ通ひのオハヨー號が、二十七日の午前一時頃、暗礁に乗あげて沈





没したと云ふ事だ。如才無い船員が、これを小冊子に書き込んで、船内を賣つて歩く。但し一部が二十五錢、戦時の號外どころでは無い。

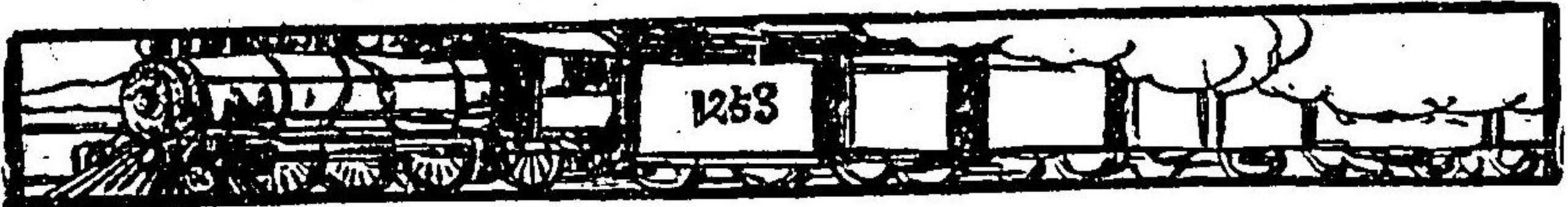
喫煙室の夜話では、松方君の落第談を聞いた。豫備門名代のあはれ者は、去つてエール大學の優等生と成る。其間の消息は、大いに後進の鑑と成らう。こんな風で每晚諸家の成功談を聞く。これも宵つ張りの餘祿か。三文の徳、豈に朝起のみならんやダ。

(二三) 同三十日 (月) 曇時々雨

午前高石、飯利、上田の三氏と、一室に立て籠つて、今夜の餘興の打合せをする。演題は英譯の狂言太刀奪。拙者はその振附であるのだ。

又團長室の幹事會に列して、團の覺書の起草にあづかる。此處では内閣書記官と云ふ役廻り。

それで午後のミネソダ議會では、右の覺書を初め、各係の申合



が議題と成つた。無論異議無く原案通過、更に會計係の請求に依つて、各員分擔金を支出に及ぶ。即ち正賓の一に對して、専門家は四分の三、隨行秘書は二分の一、婦人は總て半額の割合。

三時頃、陸が見えるくと騒いだら、何の、それは雲であつた。昨日と變つて今日は少しも風浪を認めず、且到着も近づいたので

一同云ひ合せた様に元氣がよい。尤も船もへビイをかけて、昨日の正午から今日の正午までに、三百四十二哩とは、今までに曾て無いレコードだ。

さて夜はいよいよアトホームの催し。但し今夜のは團員の主催で乗組米人の男女數十名を、残らず招待したのである。時刻は夜の九時から、會場は本船の食堂、主客共に禮服の揃ひ。酒はシャンペン下物はサンドキツチにアイスクリーム、茶菓と云ふ献立。まづ濫澤團長から挨拶があつて、例のステブソン氏の答辭、それから船長と接待員とへの感謝状を、神田男が朗讀し、それから餘興に移つ

たのだが、その間に此間からの競技會の優勝者に、それ／＼賞品が授與された。中にも高石君の如きは、一人で四品まで受けたのである。

次に餘興は、まづ伊藤君の仕舞羽衣、地は中野君がつとめた。それから飯田、田邊、高辻、西村、西池、石橋、町田の諸君、及び拙者の八人が、觀世、喜多混成の謠曲松風を呻り、次に齋藤君の劍舞があつて、大切が英譯狂言太刀奪。これは一夜漬としては、頗る振つたものであつたので、米人側にも大受けであつたらしい。尤も此間に、米人側の唱歌や、ピアノや、バイオリンや、ギタアやらが、數番演せられ、其度に打つ拍手の爲に、何れも掌をヒリ／＼させるに至つた。かくて主客歡を盡し、彼我兩國の國歌を以て、會を畢つたのは十一時半。

此會では初めから司會者となり、通譯者となり、將た演藝の説明者と成つた、神田男の御苦勞は、一同の感謝する所だが、又伊藤君の



兼て用意の目録を、ゴンザレツツといふマニラの青年にかぶせ、これを日本婦人に仕立て、手をつないで會場へ出たには、何れもアツと云はされた。

此夜珍らしく空晴れて、月光晝の如く、甲板上の逍遙に、誰も眠を忘れたのである。

▲此月や只煤烟を時の雲

(一四) 八月卅一日 (火) 晴

朝の中は霧があつたが、日が昇るにつれてそれが晴れると、いよいよ左右に陸が見えて來た。左はカナダ、右は即ち合衆國の大陸である。但し山には雪のあるのも見えた。それはモウと云ふべきだか、マダと云ふべきだかを知らない。

正午頃には無線電報が切りに來た。太北鐵道のヒル氏の歡迎辭を初めとして、水野總領事がポートタウンセント迄出迎へる事や、税關が好意で一切檢閲しないと云ふ事や、折柄シャトルに滞在中の博



覽會の織田事務官長が、明日の晩日本料理の御馳走すると云ふ事や、何れ一行を喜ばすもの許だ。

午後四時ボートタウンセントに着いて、檢疫が無事に済むと、出迎の水野總領事は、シャトルの田中領事、織田事務官長、此處で一行を待ち合はせた頭本元貞氏、日本人會長の高橋徹夫氏、其他竹澤博覽會事務官、土屋旭新聞社長等と共に、本船へ乗込んで来た。又米人側からは、シャトルの接伴委員パーカス氏を初め、三四人が出迎へて、著後の手順を打合はせる事になつた。

そこで夕食後、食堂でその打合會が初まつたが、その結果として、明日の歓迎式の答辭起草したり、又先方の歓迎辭を譯したりで、記録係爲めに二時まで眠ることを得ず、高石君を臨時兼務に囑托するに至つた。

斯して出迎の面々は、此の夜我等と共に、船中に一夜を明す事である。

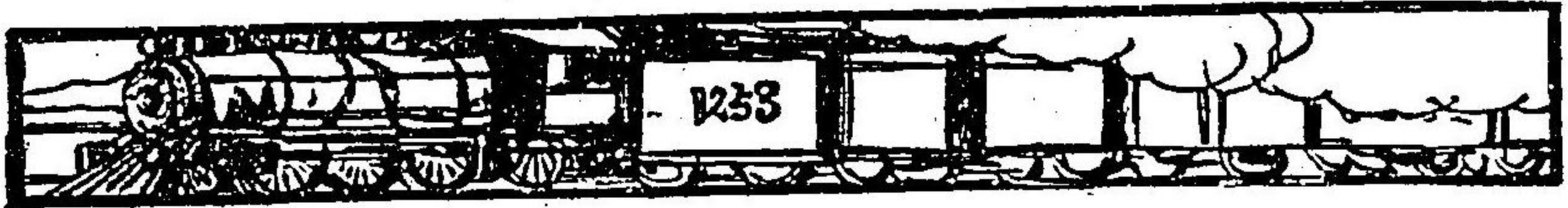
合衆國の部

(一五) 九月一日 (水) 晴

昨夜船はボートタウンセントに泊まり、曉方から進み初めて、十時半にはいよくシャトルの港に着いた。思つたほど大きな港でも無いが、それで居てこの二萬噸のミネソダが、ちやんと棧橋に横付けに成る。

見ると、棧橋には、日米の國旗が盛んに立てゝある。歓迎の鳥居が立つてゐる。樂隊が囀して居る。花火が場る。出迎の日米の男女は、しきりにハンケチを振り、帽を廻はし、果は萬歳を絶叫する。中にも國語學校の生徒數十名が、行儀好く列を正して、君が代を唱ひ初めたのには、人は知らず、拙者は涙が出てならなかつた。

所謂の歓迎式なるものは、ミネソダの食堂で行はれた。即ち去年





日本へ來遊した、例の米國側の實業團の統領、シャートル商業會議所長ローマン氏を初め、華盛頓州知事の代理に來たトリート氏、シャートル市長のミルラア氏、判事バック氏などと、何れも熱誠な歓迎の辭を陳べ、濫澤團長一々これに答へ、それから甲板で紀念の寫眞を撮られて、いよいよ上陸すると、此所には自働車が十數臺列んで居て、一行を五六人宛乗せては、日米の旗を翻へしつゝ、ワシントン、ホテルと云ふのに運び込まれた。

このホテルは新築の十四階、今のシャートル市には過ぎた建物だがその廣い建物の、それぐの室へ案内された時、初めて外國へ來た感じがして、折角の隨行員とも引きわけられては、杖に離れた按摩同様一寸面喰つた旦那衆もあつた様だ。

それでも無事に中食を済ますと、直ぐ總會が開かれた。其座でも第一議案は、紐育の滞在の、僅か三日は忙がしいから、いつそ桑港發の船を延ばして、十日に改めてもらふ様に、主人側に交渉する



事であつた。中には二三の異議者もあつたが、大多數で可決して、遂に田中領事を煩はし、その交渉をして貰ふ事に成つた。

午後六時半、昨日から樂しみにして居た、織田事務官長の招待で、日本料理の御馳走に出かけた。會場は博覽會場内の臺灣喫茶店、献立は、鮪の刺身、鶏のすき焼、味噌汁に、茄子の田樂、それに給仕が洋装こそすれ、皆日本の婦人と來て居るので、イヤもう一同嬉しがるまい事か。但しこの料理も給仕も、實は日本街隨一の料理屋、まねき亭から仕出したのだ。

折角米國の招待に來ながら、その初日から日本料理の御馳走とは一寸勝手がちがふ様だが、實は米國側では、我々の著後一兩日を、その休息の時間にしてあつたので、即ちその時間を利用したに過ぎない。

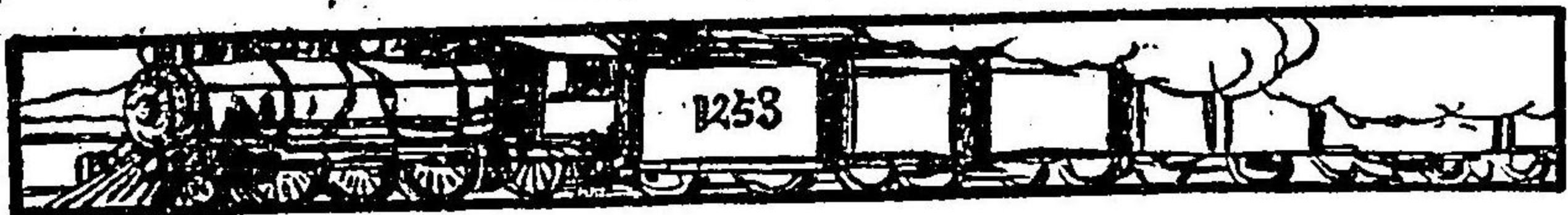
食事が了ると、場内の夜景を見物し、南北戦争の海戦の見世物に案内された。これは先年歌舞伎座へも來た様に思ふ、所謂活動パ

ノマラなるもので、蓋し今度の見世物の中では、一番好評と利益とを博しつゝあるものだと言ふ。

(一六) 同二日 (木) 晴

今日もまだ休息日だ。けれども籠の鳥の放された様に、一行は朝飯もそこ〜に済まして、思ひ〜に見物に出かける。博覽會へ材料取りに行くもあれば、デパートメントストアに買物に出るもあり。船中では、あれほど毎日顔を合はせて居たのに、斯うなると何所に誰が何をして居るやら、とんと御無沙汰勝に成つてしまつた。

午後二時、ローマン氏の案内で特に消防豫習を見せられた。初めその分署に連れて行つて、應急演習を見せておき、再びホテル前まで引かへして、此所で防火の演習をやつて見せた。それは我々の居るホテルに、假に失火があつたとして、その時の消防手段を、實地の通りにやつたのだ。プログラム以外の御馳走としては、なか〜念の入つた事であつたが、拙者の殊に感じたのは、この演習の間、約十



五分間許り、大切な交通機關を停めた事である。而もそれが場末なラ兔も角、東京で云へば、本町通りかお成道とでも云ふべき、賑かな往來の中央だから驚く。

この演習の後、一行は自働車を驅つて、田中領事の私邸に赴き、單に敬意を表するつもりであつたが、却つて園遊會的の招待をうけた。

其後拙者は大谷氏と共に、日本人會の依頼に應じて、日本町の救世軍會堂で、青年や子供の爲に講演を試みた。會するもの男女六百名許り、大入はよかつたが、暑いには閉口した。

此夜一行は商業會議所に集まり、此地の接伴委員等と、各専門取調について、まじめに打合の會をやつた。此座の様子で見ると、主人側でも非常な熱心で、今度は米國の各方面の商工業を、十分に見て行つて貰ひ度いと云ふ意氣組。むしろこれらはお客側の方で、少し面喰つた様子であつたが、最後に濫澤團長の、立つて試みた演説は、

大いに主人側に満足を與へたらしい。平和の大使の皮切談判、先以て大出来々々と云ふべしだ。

(一七) 同三日 (金) 晴

いよいよ今日から本題に入る。即ち正賓専門家の面々は、午前から接伴委員の案内で、各工場を參觀に出かけた。

其間に拙者は、神田男、南博士、熊谷學士、高橋日本人會長と共に、即ち教育關係者として、華盛頓州大學總長ケーン氏の招待で、博覽會場内の、紐育館階上の午餐會に臨んだ。會する者は、何れも大學に關係ある學者連三十餘名、席上神田男と南博士とは英語、熊谷學士は獨逸語で演説をやつた。但し獨逸語の解つた者は、果して幾人あつたらう！

その歸りにフレデリック、ネルソンと云ふ、デバートメント、ストアに立より、兼て知る佐々木氏を尋ねて、買物をしたり、組織を尋ねたりした。これは日本の三越に、さして優つたとも思へないが、

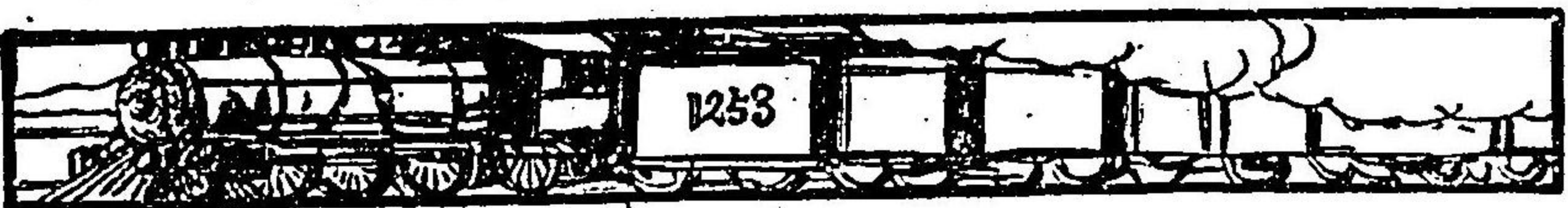


他のボンマリシエなどよりは、品物の好いのと、持主の熱心なので土地でも評判が好いと聞いた。尤もその三階にある、東洋式參酌の一室や、又食堂の様子などが、立派と云ふよりも氣が利いて居て、いくらか得る所があつたと見える。

夜はレニヤ俱樂部で開かれた、商業會議所の招待會に臨んだ。蓋し公式晚餐會の第一回で、主客共に曠れの舞臺。濫澤團長を初めとして、中野、松方二君の演説も、大いに振つて居たのである。但し松方君は英語が自在なので、斯な時には一層儲かるのである。

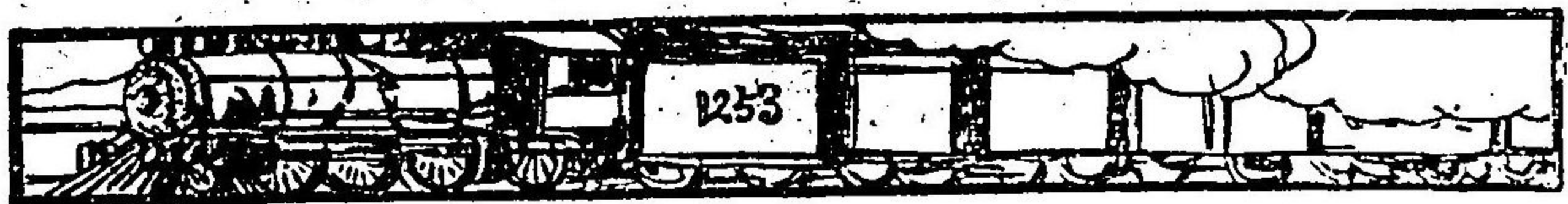
(一八) 同四日 (土) 快晴

今日は『日本日』の當日だ。日本日と云ふのは今度の博覽會の紋日の一で、即ち日本々位の餘興をやつて、大いに日本の示威運動をしやうと云ふに過ぎない。で、在留の日本人を始め、タコマ、ポートルンド邊の日本人まで應援に来て、その同勢無慮七八千人、これが思





ひくの假装をして、博覽會場内を練つてある。造り物には、當年のポーハダン號の模造軍艦もある。日本風の山車もある。それには無論馬鹿囃子も付いて居る。聞けば手古舞も出す筈であつたのが何しろ此處を先途と趣向を凝したから、イヤ中々の見ものであつた。我が一行は即ちその先鋒に立つて、數十臺の自動車に國旗を翻へしつゝ繰込み、森林館の裏手で紀念の寫眞を撮つてから、更に日本館の後庭に移つた。此所では特に園遊會が設けられた。それが濟むと、同じく場内の大講堂に、演說會が開かれた。當日は濫澤團長を初め大谷、西村の兩氏も、それ々々氣焔を吐いたのである。これが濟むと、一同博覽會見物と云ふ順序であつたが、時間が不足でとても十分に見ては居られず、拙者は岩原、松村の二氏と、僅にアラスカ館と、エスキモの見世物を覗いた許り。但し前者には、その金塊の嘘の様なのに舌を捲き、後者には、其の土人の眞に日本人に似て居るに驚いた。



夕方宿に歸ると、直ぐ又ドレスに更めて、同じ場内の紐育館へ駆けつけた。今夜は此所で、男女合併の大夜會が開かれるのだ。食事の後は、別館で大レセプションがあり、それから餘興の花火を見、船で湖水に遊んで、再び自動車で運ばれ、宿へ歸つたのはやつと夜半の一時頃。

今日の暑さは又格別、イヤなか／＼草臥れることであつた。

(一九) 同五日 (同) 晴

日曜日だと云ふので、一同教會へ案内された。無論其説教も神妙に聞いたのである。中には牧師の巧みなジエスチアを、只感心して見て居た許りの者もあらう。

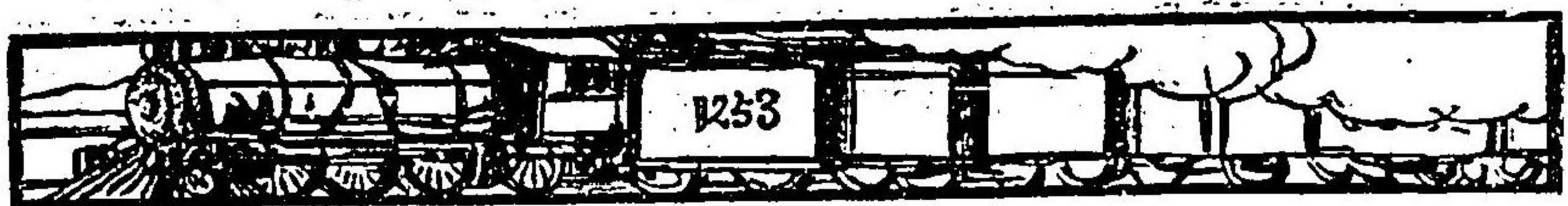
十二時半からは、例の自動車で市中を通りぬけ、ワシントン湖を渡つて、また土煙に捲かれながら、レトモンド村にクライス氏の別荘を訪ひ、其所で中食を饗せられ、御自慢の家畜小屋を見せられて四時頃に引取つた。その間約二十哩、自動車なりやこそ一時間餘り



で歸れたが、その代り總身は埃まみれ！
 歸ると直ぐに風呂に飛込んだが、出ても浴衣で涼んで居る間は無い、直ぐに又燕尾服でシヤチコ張つて、夜の招待に出かけなければ成らぬ。尤も今夜の招待は、一行が四五人宛幾組にも別かれて、市の有志の私邸に招かれたので。拙者は南博士、左右田の二氏、及び接伴員グリーン氏と共に、パーカス氏の客に成つたのだ。氏は有名な資産家で、去年夫婦連で日本へも来た人。殊に夫人は獨逸人なので、大いに拙者の話相手に成つた。

十時には宿に歸つて、直ぐに又衣服を更め、行李ををさめ、勘定も済まして、特別汽車へと乗込んだ。

この特別汽車こそは、我が一行が三ヶ月間、北米合衆國周遊中の、云は、假設ホテルとも云ふべきである。されば大北鐵道會社でも、曾て無い奮發を以て、大切な列車を持ち出したのだから、その立派で、便利な事は、一寸日本では見當らない位だ。



今日の總會の決議で、水野總領事を一行の幹事長に推した。

(二〇) 同六日 (月) 晴

七時頃目を覺まして見ると、もう汽車は動き出して居た。が、間もなくタコマに著いてしまふ。

が、直ぐには降りず、其儘接伴員に擁せられて、午後三時アツシユノオールドと云ふ所まで行き、其所から更に合乗馬車に分乗して、十二哩を埃を浴びながら、タコマ山へと向つたのである。

尤もこの山行は、老人や婦人には、ちと厳し過ぎやうかと云ふので、澁澤團長は婦人連と共に、五六人で汽車に残られた。

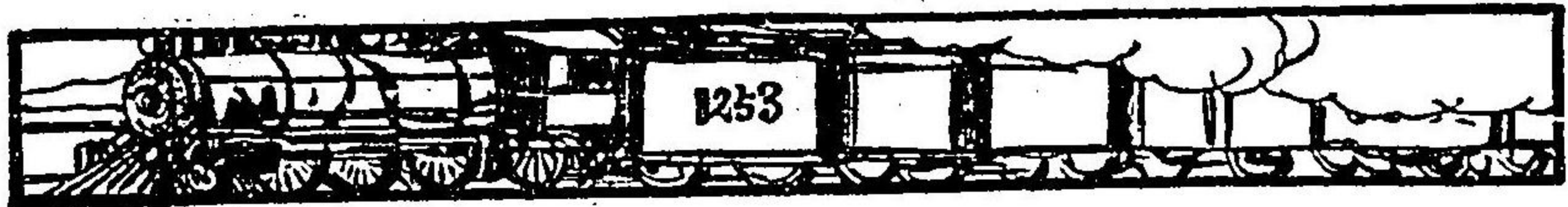
さて馬車路の十二哩、成る程頭から埃を浴び、尻は車臺にこづかれて、随分難儀は難儀だつたが、その代り又嬉しい事には、その行く手の道の左右は、皆天を突く許りの、所謂アメリカカ松の老樹許り、千古の深林の鬱蒼たる景色は、流石に大米國と領かされた。

その途中に、小さな田舎家がある。而も前庭には、種々の草花を



咲かせて、千紫萬紅の飽かぬ眺めには、誰も車上に振り向かぬ者は無い。聞けばこの主人は、曾て某大學に教鞭を執つた老博士だと云ふ。アメリカにもこんな淵明先生があると思ふと、増々床しさを覚えるのである。已にしてナショナル、パーク、インに著いた。即ち乙のホテルに立寄り、ボーイに埃を拂はせも敢へず、直ぐに又馬車に揺られて、更に登ると六哩、溪流の極まる處に、世界の偉觀の一とも云ふべき、氷河を目のあたり見るを得た。

全體このタコマ山と云ふのは、米



國の富士とも稱へられる、この國一番の高山で、而もその形までが日本の富士に似て居るのである。さればその山域十八哩に涉つて、この種の氷河は何ヶ所もあるのだが、普通の見物人は此處まで来てこれでその一斑を認めるのだ。只見る數十尺の大岩、それに一寸手を觸れて見ると、指先が切れる程冷たい。ト云つて何も不思議は無い。皆幾千年幾万年を経ながら、而も溶け損の雪であるのだ。奇と呼び快と叫んで、佇徊去るに忍びないが、日はもう暮れかゝつて居る。暮ては路次の便が悪く、まかりまちがへば馬車から投げ出される虞があるので、一同又歸路につき、其夜は例のナショナル、パーク、インに泊つた。

今夜食事が済での後、神田男は一同を集めて、簡單に氷河の説明をされた。其際外人の傍聴もあつたので、男は日英兩語で演じたがタコマは日本語でタカヤマの略、即ち高い山の意であると云つて、



赤い髯の口を開かせたのは、故事附け得て妙である。

其癖タコマの眞の意味は、土人語の「母の乳」と云ふ事で、即ちこの山の雪解の水が、此地方の人類、草木を潤す事、さながら母の乳の如くだと云ふ、面白い意があるのださうだ。

雪解と云へば、此頃も盛に解けて居ると見えて、途中で見た溪流も瀑布も、その爲に折角の水が、皆汁粉の様に濁つて居た。

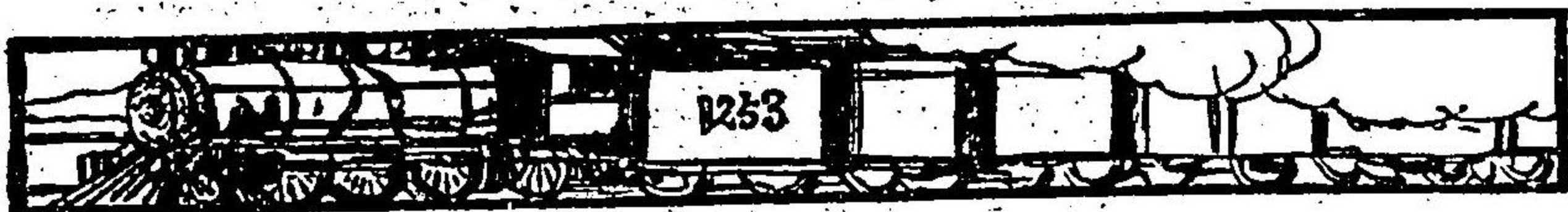
(二二) 同七日 (火) 晴

午前七時半、朝飯を済まして宿を出ると、恰も雪のタコマ山は、直ぐ正面に巔を見せ、我が一行を迎へ顔である。その崇高雄美、一句無かるべからずして、只僅かに得る所

▲天に朝す松や柏や雪の山

▲欄や狭霧に仰ぐ多胡麻富士

宿の前に鑛泉の涌く處がある。近所には天幕住ひの保養客が澤山居た。我等もそれ等に交つて、此處に山靈に親しんだら、どれほど壽



命が延やうかと思つたが、プログラムはなか／＼それを許さない。

八時には又馬車上の人と成つて、二時間許りにアツシユフォールドに歸り、再び汽車で運ばれて、いよいよタコマ市へ向ふ事と成つた。

途中イトン、ビルと云ふ所で、汽車が妙な所に止まつた。何處へ行くのかと思つたら、それは此處の製材所の、材木切り出し作業を見る爲であつた。

猶此製材所には、日本人が數十人働いて居て、それ等がわざ／＼歓迎に出たので、濫澤團長はそれ等の爲に、一寸訓誡的の挨拶をされた。

タコマに著いたのは二時半。地名の儘のホテルに入つて、直とまらた商業會議所に出かけた。それは歓迎式に臨む爲めであつたが、會議所と云つても、歓迎式と云つても、至つてお手軽なものであつた。

但し此處では中橋君の爲めに、特に立派な贈物をくれた。これは大阪商船會社が、今度此地に航路を開いたので、それを祝ふ爲めで



ある。

今夜ハイド氏方にレセプションがあつて、一行は大方それに臨んだが、中にも日本料理を食ひに出かけて、つひその時間にはづれた者もあつた。かく云ふ拙者も、實はその一人である。

シャトルを發して以來、所謂接伴員十二名は、至る所で乗り込む事に成つた。それは各地の商業會議所から九名、政府から三名の定めだが、その政府からの三名の中で、大連の領事グリーン氏は、拙者の古くから知つて居る、グリーン牧師の子息でもあり、日本語にも巧みなので、大いに一行の便を得た。

(三三) 同八日 (水) 晴

午前の中は、各自に工場の參觀。拙者は根津、頭本、石橋氏等とタコマ、レヂヤールと云ふ新聞社を見に出かけた。社長ベアキンス氏はこの他に新聞七種と雑誌五種を持ち、又各種の事業にも従事して居ると云ふ、此地でも幅利きの紳士、快く拙者等を迎へて、穴倉から



四階まで、自から隈無く案内して、委しく説明してくれた。地方新聞でも馬鹿には出来ない、否、小ぢんまりとよく整頓して居る所は、寧ろ大いに参考の價がある。

今日は銀行へ金を換へに行つた。即ち信用状を正金に換へるのだ。所が正金は不用心だと云ふので、小切手にして貰ふ事にした。米國も西部は金貨を喜ぶが、東部は紙幣が歓迎されると云ふ。

午餐は商業會議所の招待だと云ふ事だが、拙者はそれを辭してホテルに立て籠り、此間からの記録を整理し、又通信に取掛つた。

夜はタコマ、ホテルの食堂で、公式の歓迎の宴を張られた。席上の演説には、團長以外中野、土居、中橋、松方、神田の諸氏が立つた。宴が済むと直ぐ汽車へ乗り込み、夢の儘にポートランドへ！

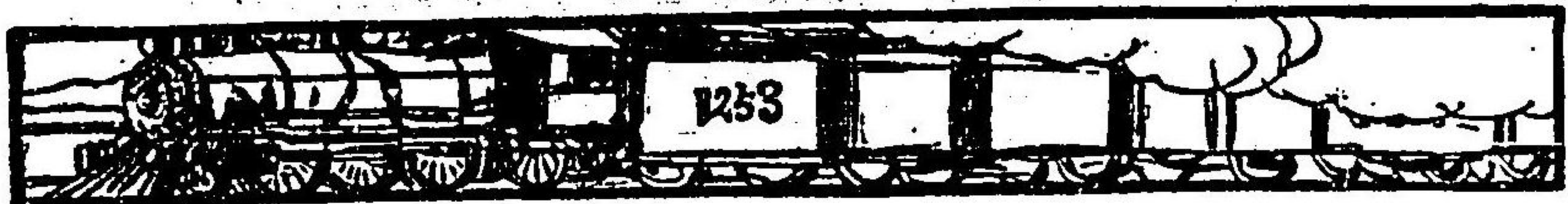
(三三) 同九日 (木) 陰晴

午前六時ポートランド著。間も無く歡迎の人々が來て、珍らしくも馬車でポートランド、ホテルへ案内し、此處で朝食を済ますと、



直ぐ特別の電車に乗せられて、市内を見物に出かけた。ポートル
 ンドは曾て博覽會の開かれた所だ。で、その名残の森林館を見たが、
 二百年位の埋木を抱へて、その上に又二百年程の大木の生えたのを、
 根から切り出してある出品には、一同オツ魂消ざるを得なかつた。
 更に轉じて、電車は市街を見降しつゝ、廻り／＼つて遂に千二百
 尺の高地、コンシル、クレストに登つた。此處からはコロンピヤ川
 を越えて、オレゴン全州が殆んど一ト目に見渡せる。蓋し市街鐵道
 の線路が、こんな高處まで通じて居るのは、アメリカにも他には無
 からうと云ふ話だ。

中食は市の有志者と共にホテルの食堂で済ませ、次いで寫眞を撮
 た。後は別れ／＼に又工場、會社、銀行等の見物。拙者は中野、小
 池、左右田、熊谷氏等と、ローレンスの馬具製造所を見に行つた。
 蓋し米國西部に隨一の工場だと云ふ。これが済むと拙者は別れて宿
 に歸り、四時に婦人青年會館へと出むいた。



此處では在留日本人の爲めに、特に演說會が開かれ、下村日本人
 會長の司會、沼野領事紹介の下に、澁澤團長、大谷君、水野總領
 事の演說があつたが、拙者も前座を相勤めたのである。

午後七時、商業俱樂部の晚餐會に招かれた。例の燕尾服着用公會
 であるが、今夜から水野幹事長の發案で、白、赤、青の小さな徽章を、
 各自の襟につける事と成つた。それは宴席での交際上、互ひに語を交
 へる便宜を謀つたので、即ち白は日本語許り、赤は英語の出来る印、
 青は獨逸語の通じると云ふことを、一見して解かる様にしたのだ。毛
 布では赤いのは氣が利かないが、この徽章では赤が一番幅が利く。
 今夜の演說は團長、中野君の外に、松方君と岩原君、共に例の赤
 組で、通譯なしにやつてのけたのだ。

このポートルランドと云ふ所は、名高い蓋薇の産地で、ポートル
 ドとは、即ち蓋薇の都と云ふ意だと云ふ。道理で今日も方々の庭に
 その花の咲いて居るのを見、又夜の宴席にも、専らその花が薫じて



居た。所で今日は九月九日、

▲菊の日を薔薇の都に迎へけり

(二四) 同十日 (金) 陰晴時々雨

午前九時ホテルを出て、直ぐ汽船に乗り、コロンビヤ川の支流、キルラメット川を遡つて、途にキルコック氏の製粉所と、クラック氏の製材所とを見る。

製粉所は兎に角、製材所は正に是木地獄とも云ふべきものだ。

▲秋寒し材に挽かるゝ木々の聲

寒いと云へば、今朝は大分涼氣を感じて、甲板の逍遙も外套の襟を立すには居られぬ。

▲朝寒のカラア隠すや旅の垢

それに天氣も甚だ不定、船漸くコロンビヤの本流に入つた頃は、時々村雨に、あたらし展望を妨げられた。

其代り、その時間を利用して、喫煙室に總會を開き、沼野領事のオ



レゴン談を聞いた。其後でシカゴに於ける見物の順序を相談するやら、又呑氣に運座をやるやら、久し振で談笑賑かな事であつた。

中食は船中の手料理の外に、ポートルランドの日本人會から寄附された、日本風の鮓と料理の折詰。これには何れも舌鼓を打つた。

三時頃ポートル、バンクウバアに著くと、直ぐ乗合馬車に分乗して、

その旅團の所在地に出かけた。これは特に一行の爲めに催された、分列式を見る爲めである。亞米利加へ來て陸軍を見せつけてくれやうとは、聊か見當がちがつた様だ。

分列式の後は、將校集會所で例のレセプション。將校の夫人連もつめかけて來て、珍らしがつては一行の婦人を款待する。

それが了ると、又馬車で送られて、再び汽車へ戻つたが、蓋し汽車は何時の間にか、此所の停車場に廻はされて居たのだ。

此夜は汽車の中に眠る。

(二五) 同十一日 (土) 曇時々雨



午前六時にはもうスポケーンに着いた。七時半までに食事を済ませて、直ぐにホテルへと送られたが、大きな所が無いと云ふので、六組に別れ々の投宿、拙者のはマジソン、ホテルと云ふのであつた。息を入れる間も無く、師範學校長サムソンの案内で、神田男と共にハイスクールを見に行た。但し土曜日で授業は無い。只空ツバの講堂や、實習室や、體操室や、家政教場を見た許り。その後、水力電氣の發電所を見た。但し其の水力は、恰も町の中央を横断して居る、スポケーン川の大瀑布から取るのだ。評判丈にこれはなかく、壯觀である。

正午は商業會議所の御馳走、但し略式とあつて場所は縁の下。縁の下と云と人間が悪いが、西洋では珍くない、所謂地下室なるものだ。尤も三階の日本室には、此地方の農産物の天産物が、これ見よがしに陳べてある。かう云ふ事は日本の商業會議所では見られまい。食後は自動車行列ねて、例の市中の見物だ。土埃をさんく浴せ



られたは弱つたが、その代り景色の佳い所もあつて、不圖仙臺の東公園邊を思ひ出した。殊に驚くのは此の地方の市區改正だ。シャトルでもさうであつたが、只町幅を廣げる許りで無く、地を掘り下げたり、岩を割り砕いたりして居る。

山手の見晴しのよい所に、ダバンポート氏の別荘がある。ひどく日本風を氣取た庭だ。その代り園遊會のあつたクラーク氏の庭は、純西洋風の青々とした芝庭。此所に東西のレチースが、曠衣の裳をひるがへしての逍遙、新聞屋がこゝを先途と、カメラを向けたも無理は無い。

六時頃に宿に送られて、埃だらけの體を洗つたと思ふと、又ハイカラの窮屈袋(燕尾服の事)をつけて、ダバンポート館の晚餐會に招かれた。之は同氏の有する料理店だが、西米隨一の結構だと誇つて居る。成る程狭い事は狭いが、如何にも念の入つた普請らしく見えた。中にも此邊の名物だけに、食卓から、欄間の飾りまで、蔓な

りの生葡萄を用いたのには、感心せざるを得なかつた。
此夜は演説の長かつたのと、皿の運びの緩かつたのとで、宴の終つたのが午前一時半!

▲二度宛の演説を聞く夜長かな
二度宛とは、但し通譯附の意である。

(二六) 同十二日 (日) 晴

今日は朝から近在の湖水へ連れられて、其處で中食を饗せられる筈であつたところを、一行の重要問題に就いて、總會を開く必要があつたので、主人側に断つてしまひ、皆幹部のスポケーン、ホテルに集まつたが、昨夜があまり更け過ぎたので、幹部連の出頭に手間取り、その上委員會の議論が長引いたので、遂に總會も延期となつた。

そんな事で一日不得要領に暮れたが、拙者に取つては寧ろこれが有難かつたので、その時間を幸ひに、若干か通信を書く事が出来た。
中食は頭本高石の二君と、支那料理を食ひに行つて、思ひの外座敷



の綺麗なのと、食物の甘いのに氣が乗り、夕飯も亦根津、松方の二君を誘つて、同じ家に食ひに行つた。

夜は八時からアウヂトリヤム座の芝居に案内された。外題は「曲馬のポリイ嬢」。其名の如く曲馬入の喜劇で、深い意味はあまり無いが、一寸目先の面白い物だつた。

打出し後直ちに汽車に歸る。

(二七) 同十三日 (月) 快晴

午前七時スポケーンを發した。途中は目に餘る許りの廣野に、大農式の麥叩き作業を見て、更らにポトツラチの製材會社に向向いた。

まづ本社で中食を饗せられてから、工場を順次に案内されたが、流石西部米國第一と誇る丈に、その大仕掛な事と、材料の澤山ある事には、誰も舌を捲かされた。

六時一旦スポケーンに歸り、直ちに東に向つて走り、夜をかけて有名なロツキー山脈に入つた。



(二八) 同十四日 (火) 晴

午前八時半、アナコンダに著。但し昨日から一時間早まつた。

このアナコンダは、有名な銅の精錬所のある所だ。まづ電車で運ばれて、その工場を參觀するのに、成る程盛大な物に相違無い。何しろ世界中の銅の産出高の、十分一は此所で扱ふと云ふのだから。

それで各所を案内される許に、ざつと通つて而も二時間を費やし、序に州立の養魚所を見たが、之は至つてお手軽な物だつた。

十二時、汽車に歸つて食事を済ますと、三時にはビューティにいた。これはアナコンダへ送る銅の出る所で、其銅坑を覗きに行つたら、之が又大したものだ。何しろこの町の七萬餘人が、皆その山の爲に生きて居られるのだから、我が足尾も遜色無き能はずだらう。

銅坑見物の連中には、わざ／＼千二百尺許りの地下まで降つた者もあるが、今朝のアナコンダで大分足を疲らせて、此處では途中で御免蒙つた者も多い。



其辭銅坑のある所までは、立派に電車が通じて居るから、大して草臥れる筈も無いのだ。

此邊は總てロッキーマウンテンだから、前の山も後の峰も、皆天を摩する許りの壯觀はあるが、惜むらくは木が一本も無いから、唯殺伐な感より起らぬ。

▲鑛毒の山赤々と秋暑し

▲鑛毒や地に染む秋の水黒し

但しそれは鑛物を扱ふ近邊丈の事で、汽車で走る途中には、なかなか愉快な景色がある。中にもシルバアボウ、譯して銀の弓と云ふ所などは、探幽も筆を投じさうな風致、恰も事故で汽車の止まつたのは、山靈の然らしめたのかと嬉しい。

▲秋の水岩を鳴らして廻りけり

▲秋高う空に巖を仰ぐかな

その名所の名をつけた、ビューティのシルバアボウ、クラブと云

ふのに、夜は宴會が催はされた。これには燕尾服に及ばぬと云ふので、心安く腹を満たし、夜はすぐ汽車の中に夢を結ぶ。

此處まで送つて来た田中シヤトル領事は、此夕その任地に歸られた。初日から茲に約二週間餘、一行の爲め陰陽に心を盡された事は、深く多とせねば成るまい。

(二九) 同十五日 (水) 晴

有名なエローストーン、パークは、残念乍ら曉夢の中に過ぎた。

然し明けてもまだロツキーの麓、流石に秋氣の冷なのを覺える。

▲朝を今海抜五千尺寒し

▲朝々の尻に冷たき廁かな

後の句は、汽車の旅をせぬ者には解せまい。

今朝ビルリングスに一寸停まつた時、車を下りて停車場を散歩したら、土人が手細工を賣つて居た。酔狂にもこれを冷かして、中橋君は牛の角の帽子掛を、拙者は蹄鐵形の細工物を買はされた。



今日は終日車中の人と成つて、中央合衆國のモンタナと、北ダコタの二州を横断するのだ。

送り迎へる、廣原、平沙、放し飼の牛や馬、手も入れぬ森や叢、

凡と云へば凡かも知れぬが、島國人種には正しく珍らしい天地の風

光、拙者はむしろ其のチャームする所と成つて、オブザベーションカ

ア(後尾にある觀望列車)の椅子を離れるに忍びなかつた。

終日全くプログラムの無いのは、今日以外滅多に無い事だと、委員諸君は特に會議を開いて、會計の決算やら、其他の打合せをやつ

た様だ。

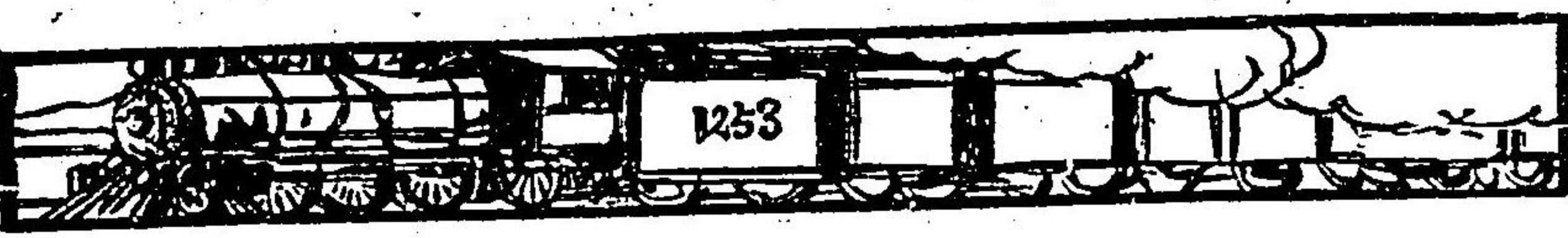
其結果、車中の車掌やボーイ共に、一週間分の酒手を取らせたか

ら、常から愛想の好い黒奴先生、一層ニコ付いて見えるに至つた。

こんな風で一日無事に苦しんで、夜は珍らしくも九時頃から寝た。

(三〇) 同十六日 (木) 晴

東へくと走りついで来た汽車は、今朝の七時半、北ダコタの





東端の小都、フアークと云ふ町に著いた。

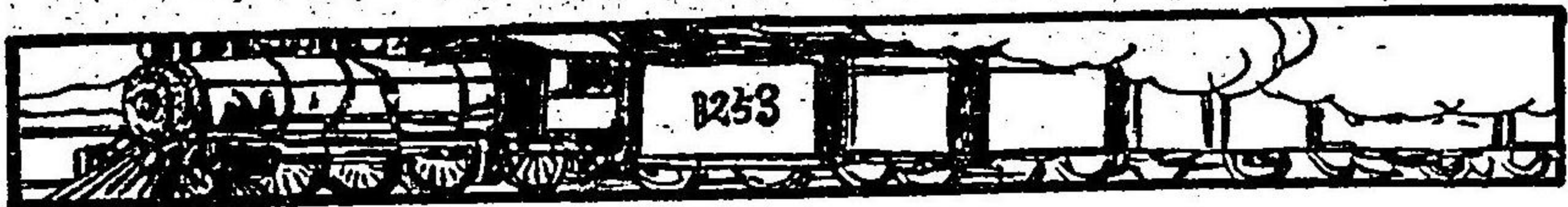
出迎への自働車に乗せられて、農學校や農園やらを見て、更にハ
イスクールの前へ来ると、兼ねて待ち設けて居た者が、男女數百人
の生徒が、皆其の前に整列して、一行の自働車を迎へて居る。

其所で神田男は、特に車上から挨拶をしたら、これにまた喜んで、
喝采する事殆んど狂氣したかと思ふ許り。

メンニツク、テンブルに一寸寄つて、其處で歓迎の辭を受けて、
急いで汽車に歸り、中食を濟ませたかと思ふと、間も無くグラランド、
フオークスに著いた。

此處でも亦自働車で迎へられ、田園を廻走する事約二時間、其痛
快さ云ふ許りで無い。

▲自働車や沃野を廻ぐる秋千里
千里はちと大袈裟かも知れぬが、たしかに百哩四方に渡つて、殆ん
ど平坦な畑地だから驚く。



更に驚くのはフアークと云ひ、グラランド、フオークスと云ひ、共
に人口二萬とは上らない、小さな田舎の都會であるのに、イザと云
へば無慮五十餘臺の自働車が、難無く揃つて走る事だ。

斯くて散々麥籾や菜圃を見せられた揚句、森の中の小さな俱樂部
で、氣の利いたレセプションがあり、互ひに應答の辭があつて、六
時後再び汽車に入つた。

概して米國も此邊へ来ると、人氣が大分優しくなつて、日本人が
珍らしい故でもあらうが、一行に對する歓迎の度が、殊に眞面目に
見えるのである。

中にも高石君の如きは、ある若いレディーに望まれて、自分の徽章
を贈つた所が、レディーは手づから胸のボタンをもぎ取つて、又會ふ
時までの紀念にと渡した。其夜高石君、知らず三鞭を抜かされたか
如何か？

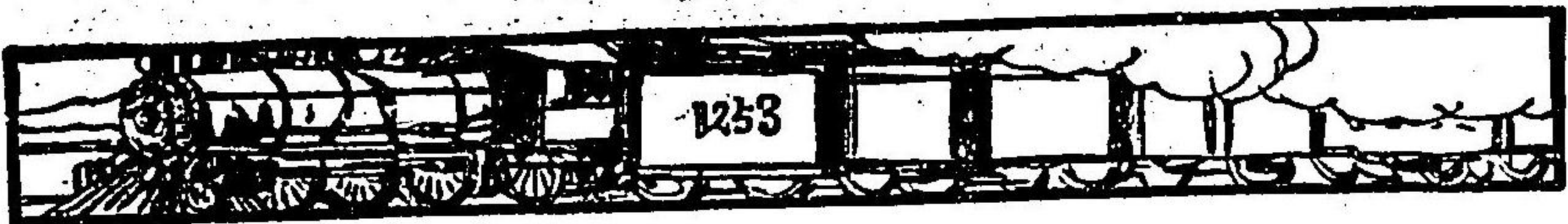


夜が明けた頃、汽車はもうヒツピング附近に止まつて居る。此邊は一帶に鐵坑のある所だ。而もその鐵は、穴から掘り出すなどの迂遠は要せず、皆地面から二三十尺も掘れば、一面に鐵だらけで、その鐵土には、何れも六割以上の鐵分が含まれて居ると云ふ。

即ち車から降りて、まづステップソンの鐵區を見たが、例の巨人の手の様な、スチム、シヤベルを盛んに用ゐて、ザクリ〜と鐵鐵を採掘する所は、いかにも小氣味好い心地がする。

更に進んでマホニング其他の大鐵區を見る。是はさながら富士山頂の、お鉢の中の様な所を、無蓋の貨車で乗りまはして見るのだが、その壯觀は流石世界一と誇るだけある。殊にこれ丈の寶の山が、元は大北鐵道の敷設の際、偶然見付けられたのだと聞いては、いよいよ天寵を羨まざるを得ない。

十二時ヒツピングを發す。中食後招待員中のグーツ教授は、地圖に依つてこの地方の地質を講演し、又大北鐵道のエリソン支配人は、こ



の鐵鐵の由來と利益とを説明した。

この鐵區で採られる鐵は、皆ツルースへ運ばれ、其處の大々的棧橋を経て、それ〜船へ積み込まれ、これがシユーペリオル湖の水に依つて、又各地方へ送られるのだ。

で、この大棧橋も途中に見て、夕暮にツルースの町に著いた。今夜は何のプログラムも無いので、汽車に残る者もあれば、ホテルへ入る者もある。余等は即ち其後者に屬して、停車場前のストルニング、ホテルに投じ、早速風呂に飛込んで、スポケーン以來の垢を流した。

此夜は近邊の上海樓と云ふのに、又支那料理を試みた。

昨日にかへて、此地の寒さ！

(三二) 同十八日 (土) 晴

午前九時別仕立の小蒸汽に乗つて、港内の周遊に出た。港内には世界に三ツより無いと云ふ、素晴らしい架空橋がある。ト許りでは一寸想像がつくまいが、これは渡船を高い橋にかけて、あちこちへ吊

り渡す様なものだ。又昨日途中で見た様な、鑛鐵積込用の大棧橋もある。又天然の勝地としては、天の橋立も其處退けの、長い岬もある。是等を見物しながら乗りまはすのに、甲板上の冷氣は、正



に日本の霜月頃と覺えた。

正午は市内のメソニック、テンプルで招かれ、それからは自動車

に分乗して、今度は山手の方を引張りまはされた。蓋しこのヅルースの町は、湖と山とに沿うた、幅一哩内外、長さ十五哩と云ふ、不思議な形をした市街なのだ。山手から見おろすと、市街を越えた湖上の眺め、暫らく自動車を停めずには居られない。

此間、鐵工場を見に行く者、エレベーターを參觀するもの、それぞれ手分をして視察に出かけた。

晚餐には名物のホワイト、フィッシュを饗すると云ふ觸れ込みで、再びメソニック、テンプルに招かれた。燕尾服着用に及ばすと云ふのは、大いに一行の喜ぶ所であつたが、その代り下物は所謂るホワイト、フィッシュ一品、而も酒無しの水許りと來ては、一行中の上戸仲間は、玉の盃、底無き心地。

▲酒にかへて水飲む宿や冬隣

その癖演説は例より餘計あつて、水野總領事まで引ぱり出された、





▲お下物のかはり演説四品も出

▲口よりも耳から腹を膨らませ

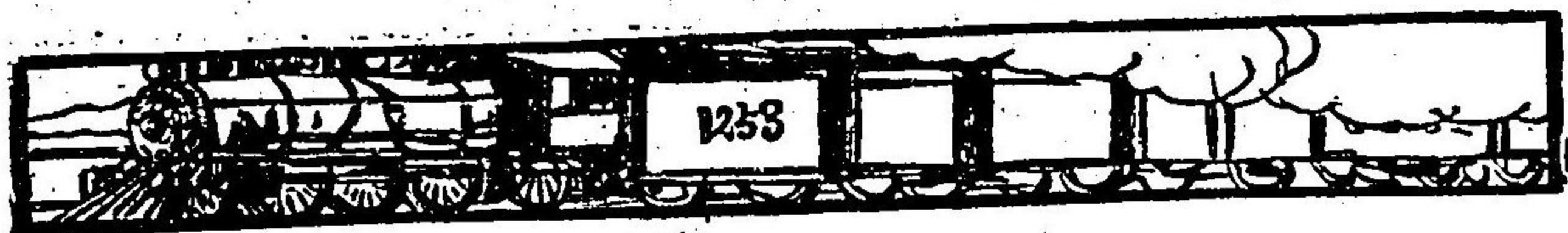
耳からの物まだ之に止まらず、宴後特に音楽會まで催して、ゆつくり聞いて行つてくれと云ふ事だつたのを、よい程に御免蒙つて、皆それぐに二次會へ逃げ込んだのは、双方共に氣の毒であつた。十時車に歸れば、間も無く發車。

(三三) 同十九日 (日) 晴

今日は特筆大書すべき日だ、即ち我が一行が、大統領閣下に謁見を得た日である。

即ち早朝ミネアポリスに著くと、先ウエスト、ホテルに入つて、フロックコート、シルクハットに改め、それから教會へ行つて禮拜に列した。

教會はメソヂストの一派で、今朝の説教は特に我が一行の爲めに題を設け、而もその劈頭に、日本語の朗讀を聞かせられたが、何分



不意を喰つたので、一寸羅旬語の様に聞えた。

禮拜が済むと、一同電車に乗せられて、走る事二十分許り、更に小蒸汽に乗つて、ミネトンカ湖を渡り、ラファエット、クラブに著いた。これを即ち記念すべき、大統領謁見の場所であるのだ。

一體同日の會は、ミネアポリス商業俱樂部の主催で、折から滞在中の大統領の一行と、我が實業團の一行とを、共に一堂に招待してこの謁見の機を與へたものである。

で、大統領タフト閣下は、已に一行に先だつて、この一室に來合はせられ、やがて我等の著を待つて、階下の廣間に出張し、水野總領事の紹介で、溢澤團長、神田男爵以下、各商業會議所會頭、正賓、専門家及び婦人等を、東京、京都、大阪、横濱、神戸、名古屋の順序で、一々握手を與へられたが、その度に、その人々相應の挨拶をして、一々に愛嬌を振りかけられる處、更に敬慕の念を深からしめた。

この接見が済むと、直ぐ食堂が開かれた。食後濫澤團長は、會長の紹介で、珍らしくも朗讀演説を試みた。これは今日は曠の場所故、大事を取られた故であらう。

その後タフト閣下は立たれた。満面に愛嬌を浮べつゝ、便々たる腹の底から、朗々たる聲を振り出しての演説、誰か耳を傾けずに居られやう。閣下は日米の親交に就いて、満腔の誠意を盡くされ、また我が一行の渡米に對して、非常の満足を表せられた。

食事が済むと、閣下は随員一同を率ゐて、直ちに自動車に乗り込み、其儘旅館に引揚げられたが、聞けば今夜は又汽車に投じて、更に西方へと旅程を急がれるのださうだ。

要するに、クラブは至つて質素な田舎作り、謁見は廣間の一隅での立話。窓の外には近傍の老若男女が、さまで巡查に制せられもせず、頻に中を覗いて居ると云ふ仕末、總てが手輕極まつたものだ。

大統領を送り出してから、我等もこのクラブを辭し、再び前の小



蒸汽に乗つて、今度は湖水の他面をまはつた。其間に水野總領事は、甲板の中央に立つて、先刻の大統領の演説を、簡單に通譯して一同に聞かせたが、それと知つてか知らずにか、行き會ふ程の船の者が、皆帽を振りハンケチを廻はして、バンザイ〜と呼んでくれた。

要するにこの湖水の景色は、何處やら伯林附近のツンゼイを思ひ出させて、梢の紅葉、岸邊の青芝、その間にある別荘の物數寄、何時まで居ても飽かぬ想であつたが、船は臆て棧橋に著き、それから又電車に盛られて、ホテルに歸つたのは點燈頃であつた。

此夜岩原君は、一行に別れて紐育へ先發す。

(三四) 同二十日 (月) 雨

午前九時半商業會議所で歓迎式があつた。その後は各自各方面の見物。

拙者は濫澤團長、神田男等に尾して、ミネソタ大學の參觀に出かけた。此所には日本の學生が六人居るので、案内にも非常の便宜を

得た。

學長はノウスロップ博士と云つて、曾てはエール大學にタフト閣下を教へた事のある名士。去年在職廿五年に満ちて、辭職を申出でたのだが、上は大統領より、下は學生、スクールボーイに至るまで、等しく留任の運動をしたので、其儘留まつて居ると云ふ人望家である。

即ち同學長の案内で、講堂に赴き、神田男は學生等に、教育勅語を讀んで聞かせた。

それから文科、理科、工科等を見たが、中にも文科の建築は、殊に優れて居る様であつた。此間熊谷君は、別に醫科を見に行つた様だ。中食はドナルドソンと云ふデパートメント、ストアの招待で、即ちこれに出かけた。食堂は大分日本かぶれがして居た、但し寺院染みたのが面白くない。

食後は圖書館を見に行つた。この内には一寸した博物館様の設備

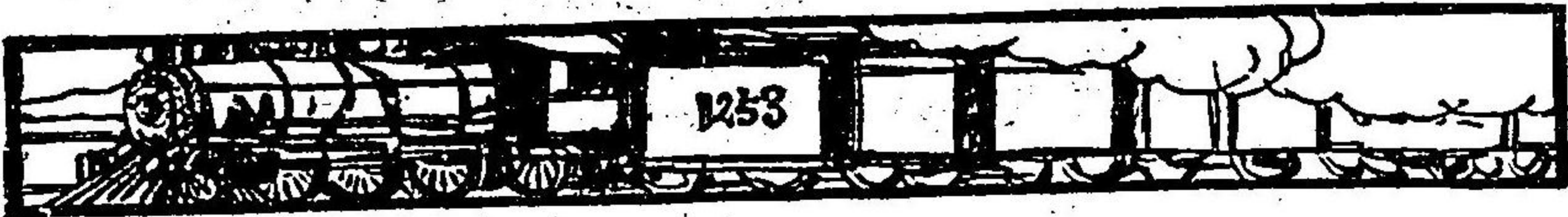


もある、序に階下の少年の部も見つた。

次にラーカア氏方の美術室を見た。此も有名の物だけに、洋畫の逸品が大分見えた。然し拙者個人としては、埃及の古器物の中に、少からず垂涎を催したのである。

次にブランドストリート氏の私宅へ行つて、日本美術のコレクションも見た。氏は日本通丈あつて、庭の作りが純日本風である。中にも玄關前にある石燈籠は、曾て神戸にあつたのを、多木君が目をつけて居た間に、何時か此處へ買はれて來て居たと、長大息をしたのも可笑しかつた。

夜は自由行動と云ふ事であつたから、即ち柴原君とチヨブスイで支那飯腹をこしらへ、近所の劇場に『リングマスター』と云ふのを見た。これは紐育でも評判であつたもので、我利専門の株屋の大將と、義侠心の深い仲買とを對照し、之にあつさり戀をからませた、やゝイブセン式の所もある、面白い芝居であつた。



それがはねてから直ぐ汽車へ歸つた。

(三五) 同廿一日 (火) 晴午後雷雨

朝六時セント、ホールに著いた。八時半から車を出て、まづウエスト法律書印刷會社を見る。單に法律書許りの印刷所としては、頗る規模の大きな物だ。

次いで各工場の參觀と云ふ順序であつたが、拙者等筆硯黨は、機械の音を大分聞き飽きたので、直ちに公園廻りに出かけた。

此日このミネソタ州の知事、ジョンソン氏が死んだので、各所に半旗を掲げ、弔意を表して居るのが見えた。

十二時前にハム麥酒會社へ來たら、恰も階上に略式の食卓を陳べ、一行に麥酒の饗應があつた後、更に門前で消防演習をやつて見せられた。

これが濟むとアウチトリウムで午餐會。その席には、我が一行に極めて關係の深い、大北鐵道會社社長、ゼイムス、ヒル氏も出席され



た。

この午餐の會場はアウチトリウムの舞臺を以て、臨時にこれに當てたのだが、架設の圓柱、臨時の天井、主賓の食卓の中央に、美麗



な噴水器を仕掛けたなぞ、大いに感服させられた。

要するに此町では、恰も州知事の計に接して、十分の歓迎が出來ぬ



のを、大いに遺憾とすると云ふ事であつたが、此の大舞臺に、この大仕掛、而もその料理には、特に狩り集めた野鶏の珍味あり、一行の満足は此上も無いのだ。

食後は再び見物と云ふ事であつたが、拙者等は直ぐ車に歸つて、通信の筆を執る事とした。時恰も天地暗澹、雷鳴頻りに起つて、大雨は車軸を流さんばかり。先刻見物に廻つた連中は、爲めに少からず狼狽したらしい。

雨は夜に入つてもやまず、一寸散歩に出かけて見たが、流石に途中から引かへした。

(三六) 同二十二日 (水) 晴 後雨

午前の中にマヂソンへ来た。一寸下りて電車で送られ、聞及ぶキスコンシン大學を見る。接伴員ギルマン君は、即ち此所の商法の教授であるのだ。

図書館から工科を見て、それから農科を參觀したが、此大學は特



にこの科に意を用ひて居るのであるらしい。

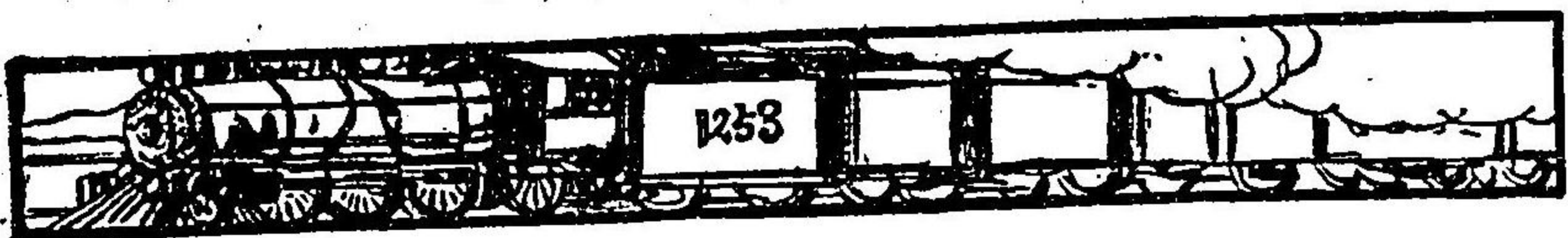
殊にこの大學の敷地は、ミネトシカ湖を背後に控へて、頗る景勝の地を占めたものだ。

十二時再び車に投じて、午後二時半ミルラーキーに著く。

ホテルはペンニングトンと云ふのだが、一寸寄つたばかりで直ぐ例の見物に出かけた。但し拙者等は、公園視察の名の下に、雨中自働車を飛ばして、まづミシカン湖邊より、レーキサイド公園をまはつたが、其近傍にある屋敷町の美観は、今までにまだ見ない位に覺えた。

で、賞めれば案内者も得意になつて、更に市中を横断し、他の公園二三を見せて、夕方に宿迄送つてくれた。

尤も此町には、獨逸人が三分の二まで居るさうで、したがつて麥酒會社も、パブストだのスキフトだのと云ふ、非常な大規模な物がある。無論一行の大多数は、この會社を見舞つたに相違無い。



夜はホテルでの晩餐會、曾て黒木大將をも招待したと云ふ、その七階の食堂に、日章旗を飽くまでもかざり立てた、當家の主人の趣向は嬉しい。

▲日のかげに秋暖き

うたげ哉

今夜の晩餐會には、曾て日露交戦の際、我が司令部に付て従軍した、マツク、アーサー將軍も出席し、特に一場の演説をも爲した。將軍は蓋しこの市の人で、今は豫備役に居るのである。

(三七) 同二十三日 (木) 晴



デニリス



午前グーツ教授の案内で、神田男夫妻、松村君等と同乗して、まづ師範學校を參觀し、次で女子大學をも見た。中にも女子大學では、その結構に少からず感嘆した何の事は無い、その寄宿舎の一室は、狭くこそあれ、我等のホテルの室も及ぬ位、小綺麗なものである。

又女子大學も、此頃は家政科が盛んに成る傾きがあると云ふ。これも喜ぶべき事では無いか。

次いでマアクエツト大學と云ふ、舊教の學校をも尋ねたが、恰も木曜日で授業は無かつた。師範學校でも女子大學でも、神田男は土産に教育勅語を出して、講堂で之を朗讀し、大喝采を以て迎へられたが、マアクエツト大學は、休日の事で其儀には及ばず、只各教場を見たと過ぎない。

此等の參觀の後、遙に六哩を自動車で飛ばせて、アリス、チャンバア會社のクラブへ行つた。午餐を饗せられる爲めである。食後

の鐵工場を見たが、イヤその大にして而も整然たる事、我等門外漢
とても、只感嘆の外は無い。

但し他の一行は、午前に參觀を済ましたので、皆去つて居るので
ある。其處で我等四人は、更に三哩も進んで、ラスト氏の農園を訪
ふた。氏は牧牛の大家で、四十餘頭のホルスタイン種の中には、毎年
金賞を取る逸物さへある。牛の事はよく解らぬが、兎も角純田園式
の、生活の一斑だけでも覗がひ得たのは、拙者の深く喜ぶ所だ。

我等の辭して歸らうとする所へ、南博士が來合せた。博士は専門
家であるから、定めし主人とも話の合つた事だらう。聞けば晚餐ま
で饗せられて、閑談に夜を更かしたと云ふ事だ。

歸宿後直に服を改ためて、アウヂトリアムの音樂會に招かれた。

これは新築の大公會堂。兩國の相撲常設館も及ばぬ位の廣さ。

舞臺には男女六百餘人の合唱。但し今夜の聞き物は、有名なるシユ
ーマン、ハイン夫人の獨唱にあるのだ。

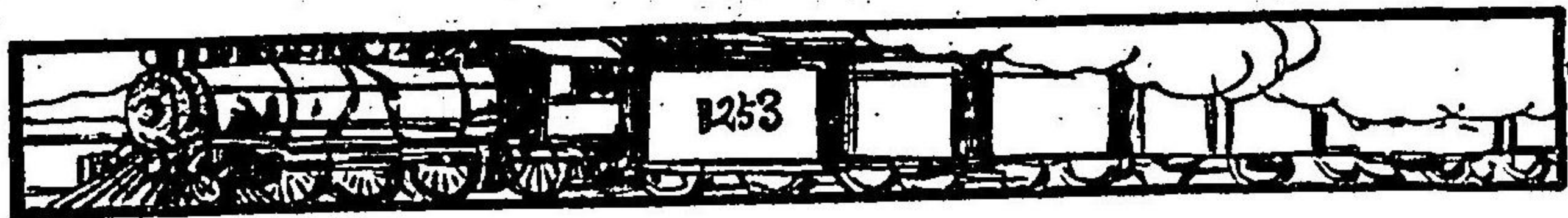
會後直に汽車に入る。明日はいよいよシカゴへ行くのだ。

(三八) 同廿四日 (金) 晴

早朝シカゴに着いた。出迎の人も大勢見えたが、此處では下車せ
ず、直ぐにストックヤードへ向つた。

此處宛に來た手紙は、皆汽車の中で受取つたが、その中に記憶す
べき電報があつた。それは廿一日附を以て、『アンザン、ナハイカガ』
と云ふ文言である。それは他でも無い、二男出産の報で、名は何と
つけやうと云ふ事だ。早速これに答へて、『バンザイ、ナハイエイジ、エ
イハサカエル、ジハフタツ』と打つた。蓋し濫澤男の名の一字を、紀
念の爲に貰つたのである。

この吉報を懐にし、ニコくしながらストックヤードに着いたが、
此處では又眉を擡めざるを得なかつた。何しろ兼ねて聞いては居た
が、その屠殺場の大仕掛である丈、悲惨の度もまた言語同斷。只見
る秋の奥山に、血腥い紅葉を踏みわける心地悪さ。鹿こそ鳴かぬが





牛、豚、羊の悲鳴をあげる哀れさ、酷さ！

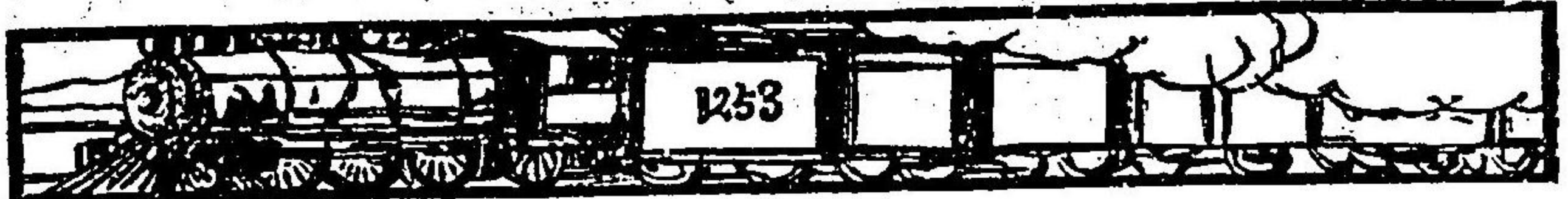
昨日はミルラーキイの片田舎で、牛羊の頻りに欺待されるのを見、今日はシカゴの都の中央で、同じ動物の無雑作に屠られるのを見る。彼はその乳を搾られ、是はその肉を刻まれる。共に口腹の爲めとあつては、所謂の文明の人間ほど、自分勝手な物は無いと思ふ。

屠殺場でさんく胸を悪くした我等も、鑛詰製造所へ来たら、何時か気が紛れた許りか、果はその中身をつまんで出されて、それに指を出す氣にも成つた。いよく以て自分ながら自分勝手に驚く。

午餐は此近所の俱樂部で饗せられた。聞けばその俱樂部の名まで「鞍下及内股」とか云ふ。一番味の好い所の名が付いて居る。

食後更に一行は、ゲーリーの鐵工場へ案内されて行つたが、拙者は其儘高架鐵道で、ホテル、コンGRESに送られ、その十四階の一室で、ミシガン湖を眼下に見ながら、通信の筆に半日を親しんだ。

夜はこの市の接待員等の案内で、スツードベエカア座に「古い町」



と云ふ滑稽樂劇を見た。これはオペラの俗なるもの、見た目は成程綺麗であつたが、その中で、日本風を凝した男女の群の、盛んに唱ひ狂ふ所は、當年のゲイシャやミカド時代に比し、殆んど何等の進境を見ず、相も變らぬ無意義さ加減には、折角の御馳走も、實はあまり難有くは無かつた。

(三九) 同二十五日 (土) 晴

午前から各自方面をかへて、それく見物に出る、視察に向ふ。中には十數哩の遠きに走つたものもあらう。

拙者は松村、柴原、及び書記小塚氏等と、有名なマアシャー、フィールドを見に行つた。三越を十倍したほどの大デパートメント、紐育のワナメーカーも、今ではこれに及ぶまいと云ふ事だ。

上は十三階の頂邊の、毛皮の冷蔵庫から、下は地下の荷作り場まで、ざつと見せられた丈で約二時間。欲しい物が澤山ありながら、さてそれを買ふ間も無く。一足が百五十弗と云ふ女の靴足袋を見せ



られた計りで、アツと云つて引下がつてしまつた。
その後は直に自働車を飛ばして、この市の公園と云ふ公園を、片
ツ端から見てもはらうと云ふことにした。

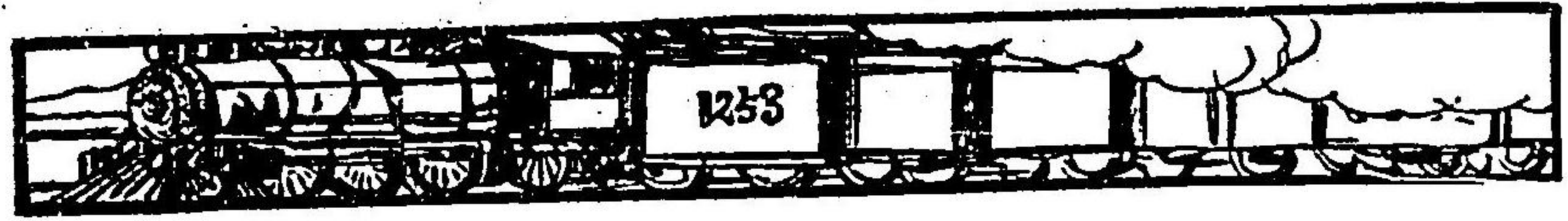
で、最初にリンコン公園、これは湖岸でなかく大きい。次に
フンボルト公園。これは別に變つた事もない。第三がガアフィール
ド公園。これには大分人工が加つて居るが、其で居ても厭味の無
い、如何にも綺麗な公園だと思つた。

それから尙進んでは、ワシントン公園、ジャクソン公園等を経て、
午餐の會場に定められた、南汀俱樂部へ向ふ豫定であつたが、途中
あまり走らせた爲めに、自働車のタイヤが二度まで損じ、遂に療治
の道を失ひ、餘儀無くその持主の案内で、電車や馬車に乗りかへて、
やつとの事で俱樂部へ来た時は、もう食堂が開かれて居た。

この公園は先年大博覽會の開かれた、ジャクソン公園の地つゞき
にあたるので、今もその近所の池の中には、當時の出品だつたと云
ふ、コロンブスの船の摸型が残つて居る。

此日の午餐會はシカゴ、ミルラーキー鐵道會社の御馳走で、其會
の後には、シカゴ大學へ立寄る筈であつたが、拙者等は例の乗物を損
じてしまつたので、歸りの時間のおくれるのを恐れ、そこへに御
免蒙つて、汽車路を宿へと急ぎ、序に又ワナメーカーへまはつて、
少し許り買物をして歸つた。

するとその途中で、すばらしい行列に會つた。それは禁酒軍の大
示威運動である。様々の旗を樹て、幾臺かの馬車、自働車をつらね、
或は樂を奏し、唄ひながら、男女老若無慮數千人。その行列約三哩
に涉ると云ふことであつたが、その最後には、例のグラント將軍
が、馬に乗つて悠々として練つて行く。將軍は今豫備役に入つて
居るのだが、次回の選舉には、是非とも禁酒黨を代表して、大統領
に當選しやうと云ふ意氣組。之に對して路傍の者が、口々に何やら
囁し立てる中を、一々愛想よく答禮して行く所は、一寸面白い圖で



あつた。

此夜は兼て廣告のあつた、竹田屋と云ふのに日本料理をやりに行き、歸つてから後、澁澤團長、中野、頭本、松方、根津、石橋、其他の數氏と、有名なトリビュン新聞社を參觀に出かけた。日曜紙を約三十萬出すと云ふ、それを丁度刷つて居る所であつたが、流石に米國第二と稱する丈ある。

社長は我が一行を歓迎し、特に應接間で三鞭酒をあげてくれた。思はぬ御馳走に夜冷を忘れて、十二時歸宿、直ちに就寝。

(四〇) 同廿六日 (日) 晴

天氣は誠によく續く。隨て日中はまことに温かい。

今日は日曜日と云ふので、午前十時半から、一同アウヂトリウムの大講堂で、有名なゴンサロス氏の説教を聞いた。氏は特に我が一行の爲めに、東西兩洋の倫理觀を論じ、兩者相融和して、初めて完全な道徳が成立するものであると説いた。



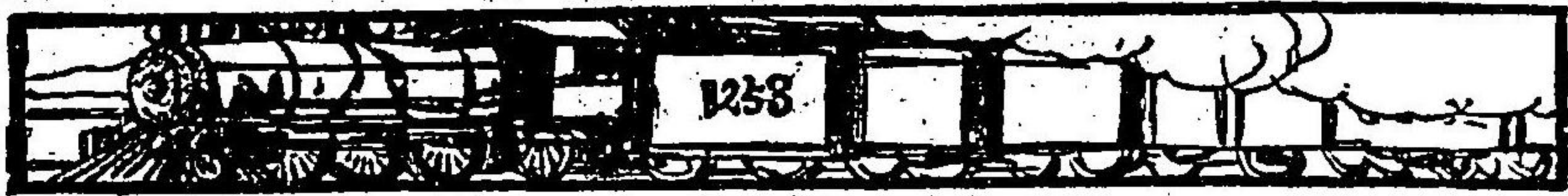
正午は水野、土居、高石、頭本氏等と、瓊彩樓へ食ひに行つた。

ペデカアにも出て居る名代のチヨブスイ、さまで大きくも無いが、構造も風味も、蓋し今までに比を見ない

二時からは松原領事の私邸に招れて、鮮、サンドキッチ、茶菓、日本酒等の饗をうけた。交際家の細君が主としての幹旋、何れも饜腹頂戴に及んだ。

この腹を減らすべく、拙者は土居、高石君等と、ジャクソン公園を散歩して、其處に今でも遺つて居る、鳳凰堂を一見したが、イヤ大分頽廢に及んで、當年博覽會の呼物であつたそれも、今はむしろ無くもがなの感がある。老いては麒麟許りでは無い、鳳凰も野鷄に如かずと云ひ度い位だ。

されば土居君は、今昔の感に耐へかねてか、折から其邊に居合はせた、素人のカメラを煩らはして、一行の寫眞を撮つてもらつたが、それが首尾好く出来たか否かは、送つて来るまでは請合へない。





其れより一寸面白く思つたのは、同じ公園の一隅にある、古代の裁判所の建物だ。掘立小屋に似た小亭の上に、英、佛、米の三國の旗が立つて居る。それすらが變つて居るのに、四邊が皆角材の積みあはされたもの、同行の田邊工學士も、しきりに首を傾けて居た。約一時間で汽車に投じ、夕方ホテルに歸ると、直ぐ又支度して、今夜は基督教青年會の招待に出かけた。これは丁度滞在中の、東京の丹羽清次郎君が、彼我の間に斡旋されたのである。まづ青年會の建物を見て、それから大學俱樂部に案内され、その一堂で晚餐を共にしたが、會するものは三十人許り。客としては、澁澤團長、神田男、南博士、西村、西池、石橋、渡瀬、田村、原(林)、熊谷、川崎(巳之太郎)及拙者である。

但し青年會とは云へ、列席の會員は大方分別盛りの紳士學者で、中には八十八歳と云ふ、好個の老武者さへ居合せた。

實は今迄商工業の説教許り聞いて居たが、今夜は精神修養と、社



會教育との議論で、腦裡に一種の印象を刻まれた。争はれないものだと思ふ。

(四一) 同二十七日 (月) 晴

午前九時、神田男、高辻君、及婦人連と、ハル、ハウスを見に行つた。是はハル氏の紀念の慈善事業で、貧民の爲めに設けられたものである。

ついでその近所に、少年裁判所を見た。これも日本ではまだ見られない所である。丁度公判中だから、一寸傍聴して見たが、これは少年自身の裁判では無く、子供が四人までありながら、その養育を怠つて、酒ばかりくらつて居る、心得ちがひの母親が、その被告の様に見えた。そしてその原告はと云ふと、二十三の凛とした美人、聞けばそれはこの市に於ける、婦人の牒者の一人で。この種の牒者は、特に市中の兒童に付いて、始終監視しつゝあるのだと云ふ。

それから去つて師範學校へ行つたが、丁度時刻であつたので、そ

の食堂で午餐を饗せられた。元より別に御馳走は無い、職員や生徒の食べる品を、二三品見本に出された許り。

食後生徒と大講堂に會して、神田男は例の教語を朗讀した。この時見るのに、生徒は九分まで婦人で、男生は約その一分に過ぎない。

午後は進んで工業學校へ行く筈であつたが、拙者は此處から御免蒙つて、一まづホテルへ歸り、それから中野、水野、高石、正岡の

四氏と、ベースボールを見に行つた。これは此頃開かれて居る、云はゞ斯道の本場處とも云ふべきで。兼て日本へも名の聞えて居る、

チンカー、エバア、コリドン、マキイなどの名手も見えたが、シカゴとヒラデルヒヤとの取組で、遂に團扇はシカゴに揚つた。

夜はホテルの黄金の間と云ふので晚餐會。大會だけに振つたもので、酒宴半ばに、氷細工の人形や鷲をかつぎまはつたり、シカゴの歌を合唱したり、なか／＼盛んな事であつた。

又演説には、商業會議所の連中許りで無く、シカゴ大學長のウイ



グモア博士や、イリノイ大學長のゼームス氏など、碩學の顔揃も見える。

我が團からは例の濫澤團長、神田男の外に、松方君も久し振でやつた。

この宴を名残りに、一同夜半に汽車へと歸る。

(四二) 同二十八日 (火) 曇雨

朝サウスベンドに著いた。停車場の側がストロドベエカーの車輛會社である。即ちこれを參觀した後、市内の中學校をも一見した。

五萬五千の人口に對しては、なか／＼行届いたものである。それから更に自動車飛ばして、郊外にあるノートルダム大學に

行つた。これはカトリック派の大學だが、小學程度から専門の各料まで一ト通り揃つて居て、生徒が七千人もあると云ふ、なか／＼立派なものだ。

圖書館、禮拜堂、博物教室など見た後で、食堂で午餐を饗せられ





その後又自働車を列ねて、市内の基督教青年會館へ行つた。此處は例のストードベーカー氏が、創業五十年の紀念として、會に寄附したと云ふ新築だけに、この町には過ぎた結構さで、先にシカゴで見ただのよりは、殊によると優つて居るかとも思つた。

此處でざつとしたレセプションがあつて、一度汽車へ歸へり、服を改めてまたクリバア、ホテルへ出かけた。晚餐會に臨む爲めである。

今夜の會には唱歌はあつたが、何故か酒は出なかつた。

又宴後の演説中、何とか云ふ地方代議士が、日本の商業道德を疑ひ、法律の不備を論じかけた時、接伴委員中のグリーン領事が、矢庭に立つて辯駁的注意を與へたのは、平素温厚の君子とのみ思はれた同氏の、器量一段をあげて見えた。

蓋しこれは、先方の不穿鑿から來つた誤解であつたのを、グリーン氏に依て速くも辯妄の機を得たのは、彼我一様に感謝せざるを得ない。

會後車に歸れば、程も無く又動き出した。

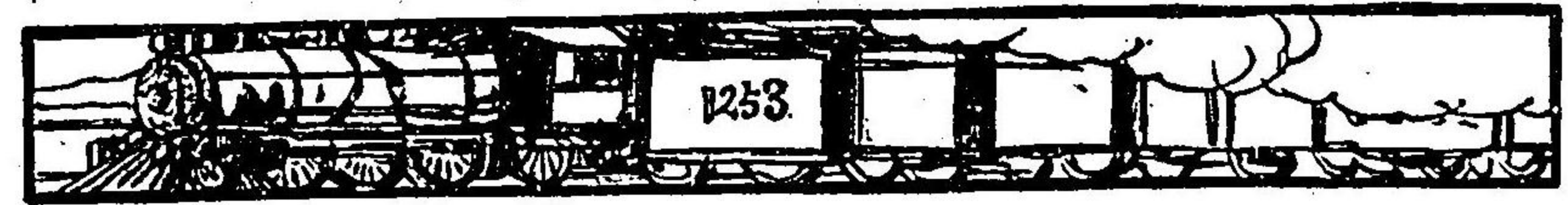
(四三) 同二十九日 (水) 晴時々雨

昨日より天氣が定まらず、時々雨を浴びる事もあり、従つて大分冷氣を感じた。

グラントラピッツに着いたのは、朝の六時頃であつたが、九時には車を出て、まづ商業會議所の歡迎式に臨み、それから一寸グラントラピッツ夕刊新聞社を覗いた。田舎の新聞社としては、諸般の設備の完全な許りか、其賣子の少年等の教育に、極めて意を用ゐて居る所が少なからず嬉しかつた。

次ぎに有名な家具製造所を見た。これは成るほど大仕掛なものだが、また價段も廉くないものだ。

この途中で、根津渡瀨の兩君は、その乗つて居た自働車を、荷車に衝突させられた機みに、根津君ははげしくショックを受け、渡瀨



君はひどく脊骨を打つた。けれども別に大した事は無かつたが、可愛さうに荷馬車の馭者は大地に投げられて、そのまゝ氣絶してしまつた。

午餐は市外の高地にある、ケントの倶楽部で饗せられたが、恰も歸省中の米國大使、オブライアン氏もわざわざ出席して、一同と握手をした。聞けば氏は、此地が故郷であると云ふ。

午餐後一行は別れ々に、又た各工場を見に行つたが、拙者は高石君と共に、バントリンド、ホテルに根津君を見舞つた。此時はもう大分元氣が出て、枕元の熊谷學士も手持無沙汰に見えたが、一時は顔の色も無かつたと云ふ事だ。

その後途中で買物などして、一まづ汽車に歸り、夕方からまたバントリンド、ホテルに向ふ。この晩餐會の席上では、オブライアン大使の演説もあつた。又紐育の高峰博士も、わざわざ此處まで迎ひに來られた。



宴後再び汽車に歸り、眠りの中にデトロイドに向ふ。

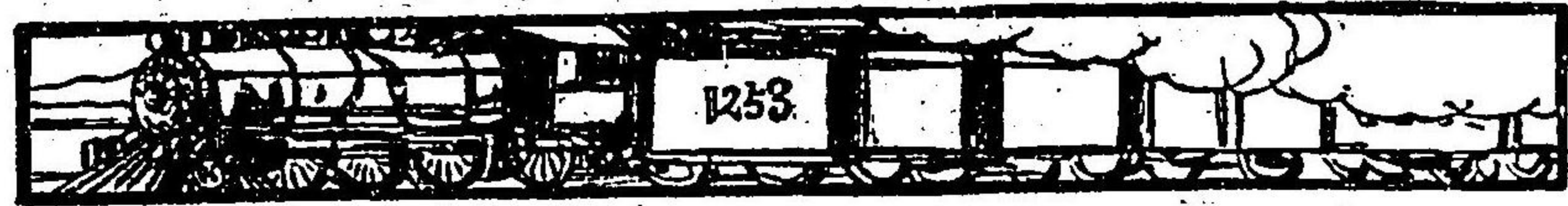
(四四) 同三十日 (木) 曇

朝の中にデトロイドに著いたが、此處では一寸驚かされた。それは一行を自働車で迎へて、その先に騎馬巡查を附け、悠々と市中を練り出された事だ。何の事は無い千兩役者の乗込と云ふ格。

已にしてカデラック、ホテルに著くと、其まゝ又自働車を飛ばして一行は煖爐會社や、水道事務所へと案内された。

但し自分は、金僊、藝陽などと云ふ風流人と、別に車を轉じて、専ら公園の視察に取かゝつた。

公園と云へば、驚くのは、單に水道公園内の、水力時計の珍なる許りでは無い。ベレ、アイルと云ふ島の公園の、大にして美なる事だ。即ちカナダと米國とを隔てゝ居る、エリー湖の入口に臨んだ、周圍十哩許りの中島を、残らず公園にした度胸の好き、只感心する他はない。





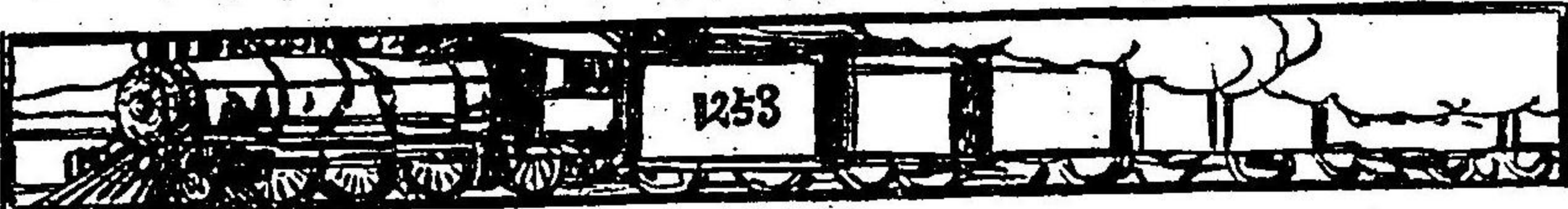
然し此處も二時間許り、自働車で走りまはる中、大分寒さが身に染みて来たので、今度は園内の動物園から、水族館、植物温室などを見る中、時刻が来たのでボート倶楽部へ入った。

午餐は此處の食堂で、有名なパーク、デビス製薬會社の御馳走。高峰博士は同社の顧問、即ち主人側に立つたのである。

されば食事の終るを待つて、直ちにその會社に赴き、大々的の製薬工場を、殆んど隈無く案内された。

拙者の少からず御厄介になる、タカジャスターゼやカスカラサクラダなどの、盛んに造り出されるのを見ては、相憐むべき同病者の、世界にどれ程多いか解かる。

デトロイドは製薬の都であると同時に、又自働車の都である。さればその製造所の數ある中で、これも世界一と稱せられる、バアカード會社の工場を見た。こゝでも亦大分足を勞らせ、宿へ歸つたのは午後六時。



入浴の後、根津君の全快を祝して、熊谷、小池、多木君等と、つひホテル前のチヨプスイに食し、それから八時にテンプル座へ出かけた。今夜のテンプル座行は、この地の有志の招待であつたが、これはむしろ大寄席とも云ふべきで、有樂座の演藝と大差は無い。

この芝居行にも、巡査は一行の警護をして、露拂ひをつとめたがその途中で會ふ程の男女が、皆口々に長い喇叭を吹き立て、またブリキの鈴を振り立て、居る。まさか我々を歓迎する爲でもあるまいと思つたら、案の定これはポストンのベースボールの本場所、この地の選手が勝利を得たので、それを喜んでの事だと云ふ。アメリカ人の勝負に熱注するのは、今更ながら驚く許りだ。

(四五) 十月一日 (金) 盛

朝の中には珍しく手紙書く時間を得た。午前十時歓迎委員の案内で、一同自働車を列ね、バアロウス會社へ出むいた。これは有名な計算器を製造する所だ。



まづ支關で一寸社長の歓迎の辭があつて、それから各工場を見せられたが、委しい事は此處に書けない。只驚くのは、今までのこの器械は、只加算許りであつたのが、追々工夫を加へて、昨今は立派に乗算も出來、追ては減算、除算にも及ばうと云ふ事だ。

で、目下の所でも、已に數十種の器械があるさうで、目下米國の各銀行に、これを用ゐて居らぬ所は無いと云ふ。

一ト通り見物の後、一室で幻燈の説明があり、又日本風の算盤と一つ競算をやつては如何だと云ふ事で、其道には覺えの町田君、懐中算盤を取つてこれに臨んだが、残念ながら三十秒許り負けた。

中食はデトロイド俱樂部での饗應、『東郷』と云ふ瓜に舌鼓を打つた。

午後はフリーヤ氏の美術室を見に行つた。氏は有名な日本美術通。殊に光悦、光琳の物を、多く藏すると聞き及んだが、成る程光悦の屏風三双、雪舟の墨繪屏風、住吉慶恩の地藏縁起などは、古畫通の



根津君をして、頗る感嘆の聲を發せしめた。

但し主人公フリーヤ氏は、目下清國漫遊中なので、即ち氏の肖像を出して貰ひ、それに對して招待のソーダ水を揚げて、濫澤男の發聲で、遙に萬歳を唱へた所が、留守を預つて居る氏の友人某は、大いに之れを喜んで、早速其旨を電報で知らせた。それを受取つた氏も、定めし満足の笑を洩らしたであらう。

夜はホテルで正式の晩餐會があつた。この席では代議士にして且つ外交委員たる、デンビー氏の演説が、最も一同の耳を傾けしめた。云ふまでも無くその論旨は、日米の親交を重んずるにある。

會後汽車に歸る事例の通り。

(四六) 同二日 (土) 晴

午前七時クリーブランドに著き、九時に汽車を出で、ホルレンデン、ホテルに入る。

此日一行は、午前各工場を見、午後は公園をまはる順序であつた

が、拙者は中野、土居、南、渡瀬、伊藤、久保田の諸氏と共に、遠く三十哩の郊外に、有名な大園藝會社を見に行く事にした。

最もその途中、ガアフィールドの墓のある共同墓地を過ぎ、更に米國一、否世界一の大富豪、例の石油王ロックフェラー氏の別荘をも訪づれた。

但しそれは、ほんの庭だけを見せて貰ふ心算であつたのだが、恰も好し主人ロックフェラー翁は、孫や友達と、後庭でゴルフをやつて居たので、案内の人の紹介で、圖らずこれと握手するを得た。翁は漸く七十に成つた許りと聞くが、瘦軀鶴の如く、齡よりは衰へて見えながら、而も極めて愛想よく、余等の不意の訪問を、むしろ大いに歡び迎へ、態々執事の男を、余等の自動車に同乗させて、邸内隈無く見せてくれた。

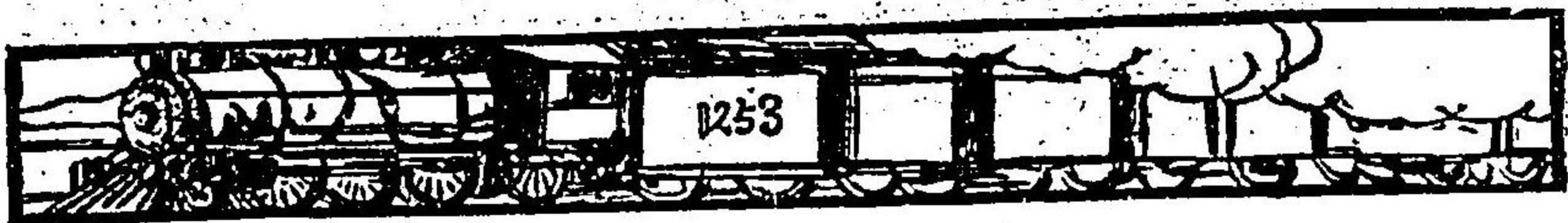
石油王の別荘を出ると、道は又一直線に、自動車は矢の如く、ガアフィールドの舊宅だと云ふ、邸の前をも過ぎて、行く事二十哩許り、



時刻も午後に成つて、漸く空腹を感じたので、途中で葡萄を買つて虫を休め、それから又十哩ほど飛んで、漸くベインズビルと云ふ小都市に著いた。

とあるホテルで中食をすまして、更に二哩ほど行つた所が、即ち園藝會社である。これはストル、エンド、ハリソン會社と云つて、建物には立派な物は無いが、花卉、果樹の栽培してある敷地が、エリイの湖水に沿うで、實に二千町歩もあらうと云ふ大會社。自動車で畑地をまはつて、薔薇畑で少し講釋を聞いたが、何しろこの部分だけでも、日本の甘町歩、花の種類が四百餘種とあつては、聊か驚かざるを得ない。

この仕末だから、ざつと見た許りで二時間かゝつて、四時頃に漸く辭して歸つたが、今夜はカントリー、クラブの晚餐會に招かれて居るので、直ぐその會場へと向ふのに、すつかり日が暮れてしまつた。日があれば景色の好い等の所も、あたら關の錦である。



錦と云へば、今夜の會には綺羅を著飾つた婦人連が多く。食後は舞踏が初まつて、面白さうに遊び狂ふのを、一行の連中は手をポケットにして、只徒らに見物する許り。

それが敢て馬鹿々々しいのでは無いが、何分拙者は朝からの遠出に、大分疲勞を感じたから、中座御免を蒙つて歸へり、直ぐに湯に入つて寝た。十時前に夢を涉り得たのは、此頃珍らしい事である。

(四七) 同三日

(日) 晴

今日は日曜でノウ、プログラムだ。それを利用して、ホテルの一室に總會が開かれた。議題の第一は、恰も御來遊中の久邇宮殿下に、御機嫌伺ひの爲め伺候する者を、一行の中から選ぶと云ふ事であつたが、結局濫澤團長の指名で、中野、土居、西村、神田、伊藤、大谷の六氏と極まり。水野總領事夫婦と、松原領事と、及び接伴委員長ローマン氏が、これと同行する事に成つた。

今日は天氣も好く、また少し温かい。其處で中食は例のチヨブス



イ、同行も例の高石、松村、正岡の三氏。食後馬車を備つて、西公園をドライブと洒落込んだ。

西公園には別に人工は加へて無いが、湖邊に面した芝原には、テニス、ベースボール、フットボールなどの遊戯場が設けてあり、折から休日の事として、學生や職工と見える青年が、頻りにゲームを争つて居た。

公園を出て更に西へと向ふのに、此邊は別荘地と見えて、數奇を盡した邸が多い。殊には紅に黄に色づいた木立、碧を湛へた湖水と對照して、一層の景致を添へて居る。今日半日の清遊には、少からず愉快を感じた。それで馬車賃一人前七十五錢、決して高くは無いのである。

夕食は又してもチヨブスイ、但し家は別のを選んだ。其後は佐竹根津、松村、名取、高石君等と、的も無く町を歩いて、活動寫眞を見たり、自働眼鏡を覗いたり。



今朝極まつた久邇宮殿下御機嫌伺委員は、夜の十時に汽車に乗込んで、ナイヤガラへと向つたのである。

(四八) 同四日 (月) 晴

午前中は鋼鐵會社に向ふ者もある。技藝學校へ行く者もある。拙者はこれを辭して室に立て籠り、半日筆に親しむ事にした。

午餐は基督教青年會に招かれて居る。即ちこれに出向いたが、會場が商業會議所の一部なので、丁度同じ構内に、原林之助君を招待して居た、建築業者の會食所へ案内され、一寸面を喰はされた。こんな事はよく日本の料理屋である事だが、何處でやつても極りの好いものではない。

青年會の方に招かれたのは、澁澤團長を初め、田村、西池、石橋渡瀬、熊谷、南の諸君等であつたが、主人側には、實業家中の信徒を初め、大學教授、牧師、傳道師も見えた。

食後は拙者一人で、青年會館と婦人青年會館とを見に行つた。



案内者はサルバンスと云つて、實業界の有力者であつたから、その途中で、銀行やら、本屋やら、陶器店やら、銀細工屋やら、頼みもせぬのに見せて呉れて、思の外時間を取つたので、初め同行の筈であつた石橋君は、遂に途中から御免を蒙つた。

青年會館はシカゴのと大同小異、婦人青年會館は、むしろそれより優つて居る様だ。

夕刻ナイヤガラ行の連中は歸つて來た。即ち共に商業會議所に於ける、此地での正式晚餐會に臨んだ。此席に、例の石油王も出たが別に演説する事は無く、却つてガアフィールドの嗣子で、現に辯護士をして居る人が、雄辯を揮つたのである。

聞けば石油王ロックフェラー氏の、かゝる宴會の席に出たのは、二十餘年來無い事ださうだ。以て氏が、如何に我が一行を迎へて居たか、知れやう。

氏の席は恰も澁澤男の隣であつたが、水野總領事を介しての間答



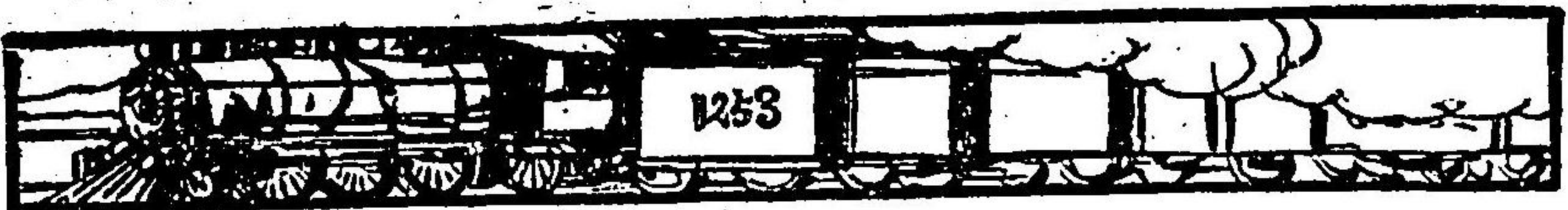
には、頗る價值ある物があつたらしい。

(四九) 同五日 (火)

午前はダンカルクに寄つて、有名なロコモチーフの製造所や、又大葡萄園を見る筈になつて居る。然るに拙者は、昨夜汽車に歸つた時から、少し熱が出た様な心地で、今朝は頭が重いから、獨り車中に残つて、此間シカゴで紛失した日記を、おぼろげながら又書き直しに掛つた。

見物に出た連中は、十二時頃に皆歸つて來たが、直ぐと觀覽車に集まつて、接伴委員長ローマン氏の爲めに三鞭の盃を舉げ、その誕生日を祝したのである。

已にして午後二時半、汽車はバフアローに著いた。例の通り出迎の自働車に分乗したが、拙者の合棒は、石橋、正岡の二君で、等しく記者仲間である處へ、案内の委員が又それに縁のある人々であつたから、直ちにその向きへと見物にまはつた。



第一はエキスプレス印刷所。此所では新聞を出して居るが、重なる仕事は地圖、教科書、三色版、銅版等の印刷であつた。夫れからまた次に見たのは、ナイヤガラ印刷會社と稱する、石版印刷工場である。前者では、製本器械の精巧が目につき、後者ではトタン印刷の手際が感服された。

此等を見物してまはる間に、マッキンレイの記念碑も見た、又その最期の家も見た。云ふまでも無くマッキンレイは、此地で刺客にやられたのである。

又湖邊の遊園に沿うた兵營には、昨日フィリップンから歸つたと云ふ、兵士の群の休養して居るのも見た。

今朝からの頭の痛は、午後に成つても去らぬ許りか、自働車の上で風に吹かれて、どうやら熱も増して來た様に覺えた。けれども獨り脱けても歸れず、やがてまた公園の美術館に連れ込まれた。小ぢんまりとした新建の陳列所と云ふ丈で、別に取り立て、云ふ程の物



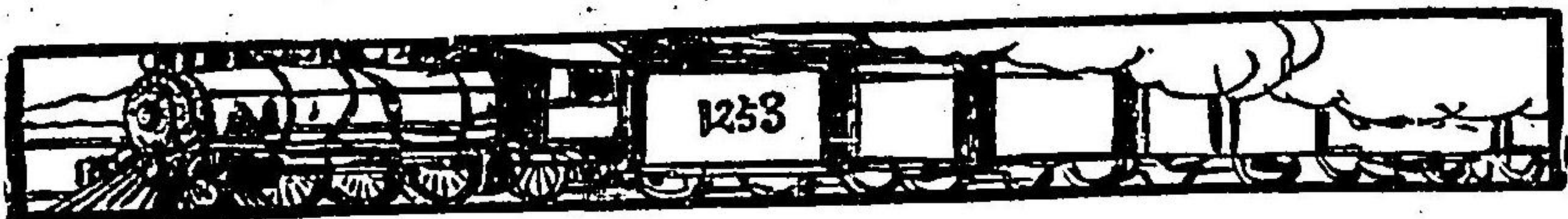
もかつた。

其後公園の倶楽部に立より、レモン水に渴を醫して、其まゝ歸途に就いたと思ふと、又途中の道草に、婦人倶楽部と云ふのを覗かされた。婦人本位の國だけに、かう云ふ物には立派なのがある。而も丁度一隊の貴婦人が、茶話會を開いて居た處で、それ等にも紹介されたが、思ふにその婦人連には、臨時の餘興に成つた事だらう。

かくて所謂誰彼時、初めてイロクイヤ、ホテルに送り込まれた。今夜は一行が五六人宛に別かれて、市の有志者の家族的晚餐會に、それ／＼招待されて居たのだが、拙者は例の不快の爲めに、御免蒙つて直ぐ床に入り、熊谷君から藥を貰つて、汗を搾る事二回、十一時頃にはやゝ輕快を覺えた。

(五〇) 同六日 (水) 快晴

午前は商業會議所で、正式の歡迎式があり、それから各工場を參觀の順序であつたが、拙者は尙御免蒙つて室内に立て籠り、まだ少



しは重い頭を抑へながら、通信二十枚許りを書いた。

中食はホテルの食堂で、歡迎員の馳走に成り、それから一時四十五分發の、特別汽車に乗り込んで、いよ／＼ナイヤガラ見物と云ふ事になつた。

昨夜苦い思ひをして、二度まで汗を搾つたのも、實はこれの爲めであるから、何でこの行に洩れてならう。殊には朝からの上天氣、元氣も爲めに全く恢復して、勇み進んで走せ參じた。

二時半頃ナイヤガラに著くと、直ぐ出迎の自動車に乘せられて、まづ瀑の落ち口から例の三人姉妹島邊をまはり、それから又大橋を渡つて、今度はカナダ側から瀑の全景を賞した。

曾ては地理書でも見、又活動寫眞でも馴染になつた、世界一の大瀑を、今眼前にする愉快さは、一寸筆紙には盡し兼ねるが、さて有り體に云つて見れば、成る程大は大に相違ないが、その上に、雄とか、壯とか云ふ字を仕けるには、聊か躊躇せざるを得ない。只一言

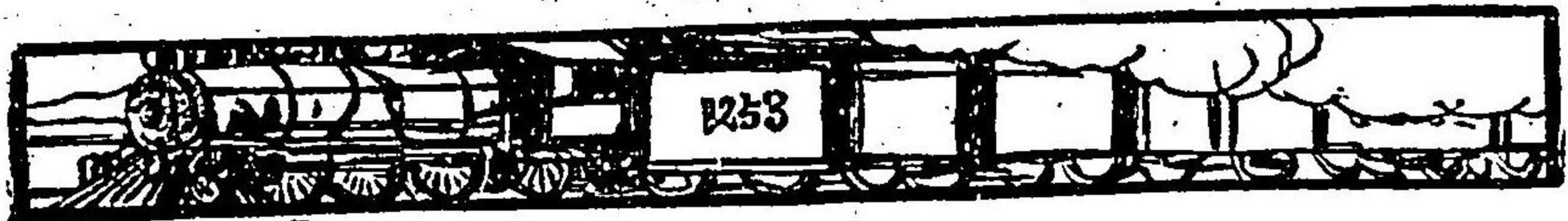


に云つて見れば、大人國の箱庭を見る心地だ。
かくて一ト通り見物の後、カナダ側のレストランに集まつて、其處でカナダの通商事務官から、懇切な歓迎を受け、三鞭をあげて、わが天皇陛下の健康を祝されたから、此方からも盃をあげて、英國皇帝の萬歳を三唱した。此處では暫時英國のお客、およばれ日記も此の數行は、色を變へて刷らねばなるまい。

元來ナイヤガラの瀑は、米國とカナダとの兩國に跨つて居る事は、今更云ふまでも無いが、落口の景色は米國側が宜しく、全景を見るにはカナダ側が勝つて居るのも、亦萬評一致であらう。殊に今日は珍らしい上天氣、折柄の岸の紅葉の、濃淡錦を飾つて居る上に、水煙は不斷の虹を架けて、其麗しさは畫も及ぬ。

▲瀑しづき虹をし秋の錦かな

そこの紅葉二片三片拾つて、畫葉書の上にはりつけ、これを友人の好事家に送る。



▲錦には紅葉はあれど虹の橋
但し虹を貼る事は出来ない。

さてこの瀑を見るのには、小船で瀑壺をまはるのが、更に興味あるべく思はれたが、我等は却つて電車をあてがはれて、これより下流を遊覽する事になつた。まづカナダ側の崖頭に沿うて、道々梢の紅葉、草の花を賞しながら、遙かにオンタリオ湖の見える邊まで來て、ブロックス將軍の紀念塔の下から、橋を米國側へと渡り、それから急流、激湍を右にしながら、元のナイヤガラの町へと歸るに、川に巨岩の奇なるこそ乏しけれ、水飽くまでも豊かに、ある時は渦と鎮まり、ある時は浪と逆まく。此等に目を奪はれては、二時間許りの行程に、毫も倦厭の色なく、やがて元の停車場前に歸つた。けれどもまだ時間があるので、一同水力電氣會社に案内されて、その發電所を見物したが、其又宏大な事には、瀑を見たより更に驚かされた者もあらう。



斯て七時汽車に乗込む。時に水野君報じて曰く、「張之洞死す」と。夜に入てホテルに歸り、食事を済ますと、今度は自働車のお迎で、恰も明日から開場すると云ふ、工藝共進會の開場式に臨んだ。これはその當事者が、澁澤男の手を假つて、開場の火蓋を切つて貰はうと云ふ、兼ての計畫だつたのである。

然るにその會場たるや、何の事は無い、只の勸工場式の建物。それに幾萬の群衆が、ひしひと詰め込んで居るのだから、その空氣の悪さ、呼吸もせまる位である。

病後の拙者何でこれに耐へられやう。後には陳列品をも見せて、茶菓をも饗せられると聞きながら、一と足先に御免蒙つて、婦人組の歸るを幸ひに、その自働車に便乗して、そのまゝ汽車へ歸つてしまつた。

一トまづ汽車に歸つてから、發車にはまだ二時間ほどあるので、その間に一寸停車場を出て、レモン水を一杯飲んで居る時、プラットホームで賑かな人聲が聞こえ、人々が慌てゝそれを見に行く。拙者も野次つて行つて見たら、これは新婚旅行者を、その親類や友達が、祝儀の席から送つて來ての騒ぎで、新郎新婦の頭から、何の爲めか米粒を浴びせかけながら行く。日本の田舎にもありさうな事だ。

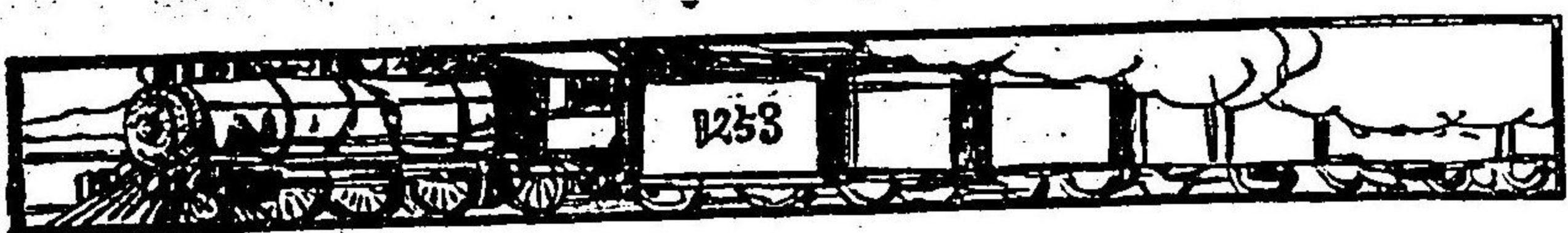
(五一) 同七日

(木) 晴

朝ロチェスターに著いた。昨日から見ると大分温かい。然るに拙者は、又た少し不例を感じた。それは頭の代りに、今度は腹部が痛み出したのだ。

此處には有名なるコダック會社もあり、又絹織物の工場もあるさうで、一行はその見物に出たが、拙者は棄權して車に残ると、高石、正岡などと云ふ筆の人々も、同じく今日は怠けて居る。

そこで午時はこれ等の人々と、町へ食事に出かけた。高石君は例のチョコプスイを主張し、二ヶ所まで探り得たが、共に不潔で入るに忍びない。止むを得ず只在るランチ、ルームに入つたが、時刻がお



くれたので給仕に手間取り、三時頃に漸く要領を得て、そのまゝ車に歸つ来た。

處が妙に疲勞を感じて、本を讀む氣も、筆を執る氣も出ず、窓の外では高石君や正岡君が、近所の子供を集めて、面白さうに毬投をして居るのを、硝子越しに眺め乍ら、拙者は遂に床中の人と成つた。熱を測れば八度五分。こんな風で今夜も晩餐會には出ない。

今朝から顔を見せないで、見舞に來てくれる人もあつた。

同室の熊谷君が、晩餐會から歸つて來た處で、篤と診察して貰つたら、持病の膽石が頭を擡げかけて居るから、當分警戒しろと云ふ事だ。

聞けば今夜の晩餐會には、グランド將軍と共に日本へ行つたと云ふ老人も、わざわざ出席したとやら。

(五二) 同八日 (金) 快晴

今日はイサカに著いて、コーネル大學を見に行く日だ。

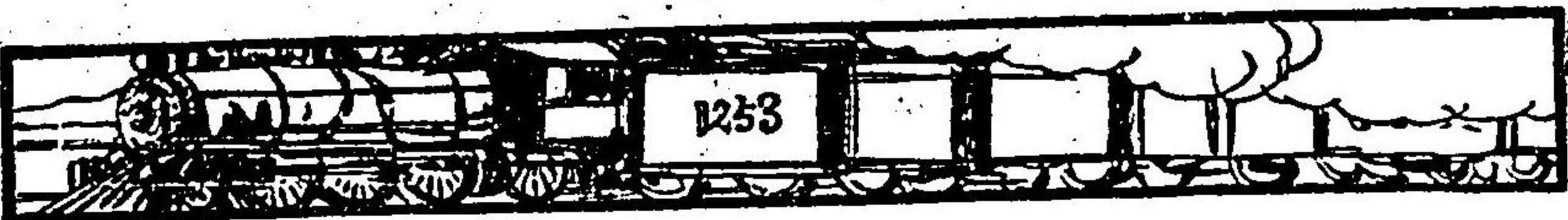


けれども拙者は昨夜からの病氣で、食堂へも出られない仕末。終日室内に暮らす事となつた。それを氣の毒がつて、水野夫人や、神田夫人から、花を見舞に贈られた。それをばコップに活けて、窓の縁に置いて、ちつと睨み合つて居る中、面白い夢を見た。

その薔薇の花の、丁度三輪あつたのが、何時の間にか三人の子供に成つて、拙者が書齋で勉強して居るのに、父さんくと頻りに戯れかゝるでは無いか。……覺めて見たらば、丁度十歳から五歳までの、男の子や女の子が、五六人よつて來て、窓の外で遊び狂つて居た。

夜は此町のホテルで、晩餐會があると云ふ。其頃熱は又九度一分。獨り残つて呻吟して居る處へ、澁澤男爵夫人からのお使で、高梨嬢が葡萄と菓子とを持って來てくれた。悪いとは知りながら、その二粒をやつて見た時の甘さ。

今夜の晩餐會には、コーネル大學の總長で、曾て日露交戦當時には、在露國の大使であり、又平和會議にも列したと云ふ、ホワイト



氏も出席し、又我が一行の爲めに、特に日本語の歌を唄った婦人もあつたさうだ。

渡米以來こゝに四十日、今日位日を永く感じた日は無い。

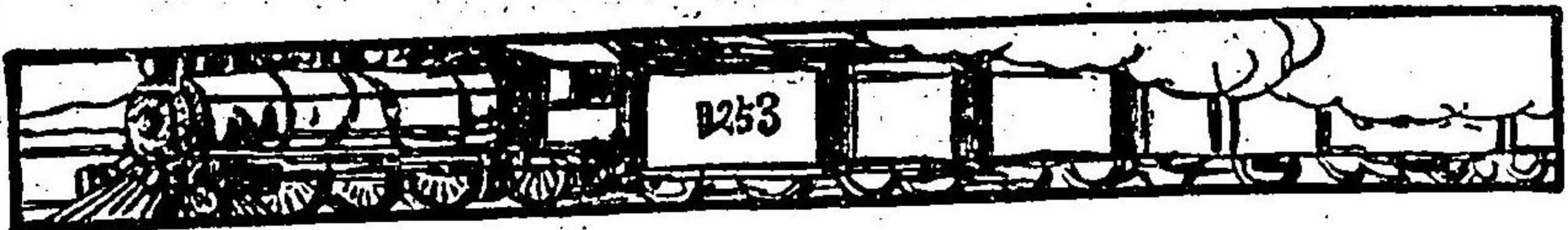
(五三) 同九日 (土) 快晴

午前八時シラキユースに著いた。昨日終日養生した故か、今朝は餘程元氣も出た。

即ち出迎の自働車に乗つて、熊谷、正岡の二氏と、まづ低能兒の教育所を行つて見た。小さいのは幼稚園程度の子供から、大きいのは飼ひ殺しの洗濯婆さんに至るまで、此所で養はれる者數百名。國立丈に設備は調つたものだ。

各教室を參觀した後で、講堂で生徒の體操を見せられた。但しその巧みな事は、不低能兒も瞠若たる許りだ。

次で婦人病院をも見た。これは餘り大きくは無いが、小氣味の好い程清潔な病院だ。但し小兒科も兼ねて居る。



これ等の參觀を終つてから、十二時頃エーツ、ホテルに送られた。尤も中食は郊外のカントリー、クラブで饗せられ、又大學でフートボールを見せられると云ふ事であつたが、拙者は病後の故を以て、午後一切のプログラムを棄權し、夕方まで休養した。

その効あつて大分恢復して來たので、この夜を空しく更すのも約らぬと、正岡君の誘ふが儘に、近所のウイーチング座を覗いて見たら、思の外の獲物があつた。それは時代劇「ベン、ハア」である。

作者も大した物で無く、筋にも優れた處は無いが、何しろその大仕掛な事は、一寸今までには見られない處だつた。殊にその幕毎に、古代の希臘、羅馬、土耳其、埃及乃至猶太の風俗を寫して居るので、其衣裳を見た許りでも、活きた歴史畫を見る感がある。

斯て今夜の晩餐會に出なかつた報酬は、此芝居で十分餘あるを覺えた。

(五四) 同十日 (日) 快晴



午前は室に籠つて執筆。

午後は一行マンリウスの學校に招かれた。其所には日本通で有名な、フルベツキ博士父子が居て、大いに我等を歓迎する筈だ。

然るに拙者は、まだ遠方への運動と、晚餐會とを警戒されて居るので、残念ながら之を辭した。

そこで午後は伊藤、久保田、正岡の三氏と、一寸近所のカーネギー圖書館を見て、後更に馬車を備ひ、これで公園を見物に出かけた。

公園と云つても、別に人工は盡して無いが、只高地にある丈に、眺望の好いのを賞する許りだ。

夜は又グランド、オペラハウスと云ふ、名ばかりは素晴らしい、實は有樂座式の大寄席を見に行つた。處がこれも又掘出物で。腹で

聲を出す奇藝やら、臍を抱へさせる二場物の笑劇やら、犬と猿の曲藝やら、蛇使ひの舞姫やは、正しく話の種である。

かくて十一時汽車に歸つた。發車の頃は夢である。

(五五) 同十一日 (月) 快晴

朝著いたのがスケネクタデー。そのまゝ汽車で乗り込んで、世界第一と稱せられる、大電氣會社の構内に止まり、これから工場内を參觀に及んだ。

この會社は、日本とも縁故深く、殊に三井とは特約の關係があるので、此間紐育へ先發した岩原君も、支店の諸役員と一所に、此處まで迎ひに出かけて來た。

何がさて大々的の工場、ざつとその一部を見せられた丈で、時間も正午に及び、脚も棒に成らんとした。

此所には日本の技師も、數名見學に來て居るが、其等の人々の話によると、委しく知るには二ヶ月を要すると云ふ。何にしても大きなものだ。

午後は構内の食堂で饗應を受け、食後一同俱樂部に案内されたが、拙者等は辭して車に歸り、直ちに荷造りに取りかゝつた。これは明





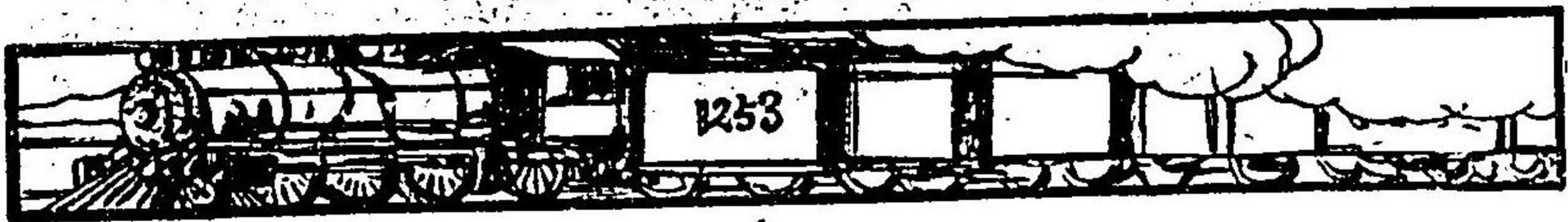
日紐育に著けば、残らず揚げねばならぬからだ。
夜はホーク倶楽部と云ふのに、晩餐會が催された。今日は殆んど全快を感じたので、即ち之に出席した。その代り熊谷君は、昨夜の癩に中てられ氣味で、今夜は留守番をする事に成つた。

今夜の宴席に異彩を放つたのは、スタインメツ博士である。博士は所謂の佝僂の人だが、世界に聞えた大學者で、電氣と數學とにかけては、殆んど並ぶ者も無いと云ふ事だ。されば例の電氣會社でも、顧問として特に優遇して居るので、ドレス、トキシード揃の宴席に、博士許りは脊廣御免。それ丈でも正しく異彩だ。

晝間は大分温かつたが、夕方からは寒くなつた。その夜の一時に汽車はガラ／＼と揺ぎ出した。かくして明十二日はいよいよ紐育に入るのである。

(五六) 同十二日 (火) 快晴

目が覺めて見ると、汽車はもう紐育に著いて居る。停車場の出



迎には日本の紳士が澤山見えた。先に別れた松方、紫藤の二君も。但しこの途中には、非常に景色の好い所があつた筈だが、残念ながらそれは夢の中に過ぎてしまつた。

その代り面白い事がある。それは他でもない、恰も今日は閣龍がアメリカを發見した記念日である許りでなく、去年太平洋沿岸の實業團が、初めて我が日本の地に入つたのも、丁度この月、この日であつた事だ。

そこで、アストル、ホテルに著くと直ぐ、取敢へず紀念の寫眞を撮り、又同行の接伴員一同を招待して、祝賀の爲めに午餐會を開いた。

尤もその前に總會を開いて、種々な事を打合はせた。
今日は何等のプログラムも無いので、午後は一同休養と云ふ事になつた。然し多くの人々は、何でホテルに立籠つて居やう。殊に此地には、在留の日本人も多く、これ等の人々が案内に来るので、それ



それ見物やら買物やらに出て行く。
 夕飯は三井物産會社の招待で、日本俱樂部に日本料理の御馳走。
 同行の岩原君は、此際主人側に立つたのである。尤も招かれた連中には、例の接伴員諸氏も居たから、それ等の多くは、日本料理の初物に、七十五日宛生き延びた譯だが……

又今夜の宴會は、全く水入らずであつたので、何れも袴を外づさ
 いるを得ず、中野君の謠曲を皮切に、土居君の義太夫も出た。伊藤
 君の朗詠も出た。

その中に番が米人側にまはると、例の演説が又はづんで来て、果
 は今度の旅行を紀念に、今後双方とも交誼を續け、互ひに取調の便
 宜を謀らうと云ふ、極めて眞面目な、而も有益な相談が纏まつて、
 十時頃に解散した。

歸宿後余と頭本君とは、澁澤團長の室に立よつて、明日の團長の演
 説の相談に與かつた。それは宗教家の一團が、特に團長を招待する



會なのである。
 今夜途中でコロンブスの像の前を通つたら、盛んに花環が供へて
 あつた。

(五七) 同十三日 (水) 晴
 午前は神田男、熊谷君と共に、クーツ教授の案内で、コロンビヤ大
 學を參觀に出かけた。まづバーナード女子大學から、その寄宿舎、
 それから本校の圖書館、運動場、教員養成所等を見る事二時間許り、

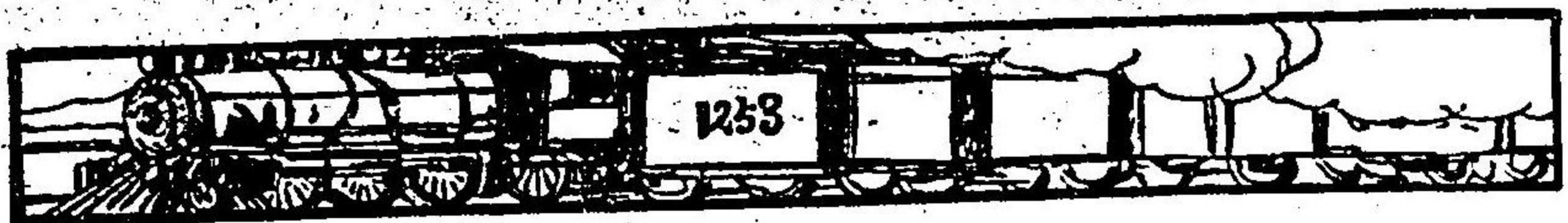


歸途には地下鐵道を利用して見た。ロンドンのよりは陰氣で無い。午餐會はホテルで開かれた。これはスキナー氏の牛耳を執つて居る、當市の絹業組合の招待であつた。

食後は直に自働車を列ねて、一同グランド將軍の靈廟に詣でた。廟はハドソン河畔、頗る形勝の地に建てられて居る。巴里で見た那翁のよりは、規模も結構も劣つて居るが、その代りより神聖に、より多く敬虔の念を起させる様だ。此時濫澤團長は、親しく石棺の上に登つて、用意の花環を供へたのである。

參詣が済んで表へ出ると、又しても寫眞機が待ちかまへて居る。歸途は道をかへて、コロンビヤ大學の前から、中央公園を通り抜けたが、例の自働車の上からでは、景色もろくに目には残らぬ。但し紅葉はなかく好かつた。

此日列を作つて行つた自働車は、妙に黄塗りの揃ひであつた。何處やらの神經家が見たら、黄禍論の種を作つたかも知れない。



夜はホテルで宗教家連中の晩餐會。但し之に招かれた者は、團長を初めとして、神田、西村、大谷、西池、渡瀬、田村、石橋、頭本川崎(團の書記)山崎(副領事)瀬古(三井物産)及拙者の十二名。主人側の重なるものは、コロンビヤ大學のノックス博士、慈善會社幹事長のデビン氏、萬國青年會幹事マツト氏、及我が金澤で傳道して居た、フルトン牧師などである。

今夜は別に高田商會の招待會があつて、それへも十名許りの團員が臨んだ。

(五八) 同十四日 (木) 陰晴

昨日までの好天氣が、少し陰つて来て、どうやら薄寒く成つて来た。朝は團長の室に招かれて、明後日の演説の草案を作つた。

午前十一時頃から、一同商業會議所に出かけた。これは歓迎式に次いで午餐を饗せられる爲めだ。所がその式の前に、會員の議事を傍聽するを得た。議題は航路補助案で、大分議論に花が咲きさう



であつたが、時刻が移るので延期となつた。
 それでも食事は六時頃になつたので、一しほ御馳走が身に著いた。
 歸途には各自見物に出かけた。中には近所の有名な、シンガア塔
 に登つた者もある。けれども拙者は用があるので、只團長や中野君
 と、頭本君の東洋通信社を見せて貰つた丈で、急いでホテルへ歸り、
 夕飯までの時間を利用して、少し許り通信を書いた。
 夜は例の日本俱樂部で、日本人會のレセプションがある。その前
 に水野總領事から、若松屋と云ふのに日本料理を饗せられた。同席
 は中野、日比谷、松方、西村、頭本、及日本銀行の井上(準之助)君。
 席上牛鍋をつつきながら、團員各自の財産調が初まつた。之は中々
 趣味ある問題であつたが、天機はむしろ洩らすに忍びぬ。
 日本俱樂部のレセプションでは、會長 高峰博士の挨拶、水野總領
 事、今西正金銀行支店長の演説などもあつて、なか／＼盛んな事であつた。

(五九) 同十五日

(金) 晴



朝の中は雨であつたが、暫時にして青天が見えて來た。今日はハド
 ソン河の舟遊と云ふプログラム。この天氣は正に天祐である。
 紐育商人俱樂部の案内で、四十二丁目の棧橋から、特別の汽船
 に乗り込み、其所のドックの盛んな所から、自由の神像の壯觀を嘆
 賞し、河口をブルクリンの方へまはつて、世界に名高い鐵橋を眺め、
 それから次第に上流に向つて、ハルレム河へ入つて來ると、景色が
 非常に好くなつて、甲板の上は容易に去り難く、更にハドソン河へ
 出ると、これがまた畫の様な眺め。
 グランド將軍の靈廟の下から、此間あつた、ハドソン河の三百年
 祭の式場も見て、再び元の棧橋に著くまで、約七八時間の舟遊には、
 此程の旅の疲労も、正しく洗ひ盡されたと思へた。
 此種の舟遊は、紐育在住の人々でも、滅多には行らない事だと
 云ふ話。誠に一刻千金を争ふ、所謂ビジネスメンの歴々が、特に



わが一行の爲めに、一日の閑遊を共にした事は、大に多とすべき處であらう。

只恨らくは澁澤團長が、二三日來風邪の氣味で、用心の爲めに今日出られなかつた事だ。

上陸したのは午後四時、一旦歸宿した後、日比谷、原、町田氏等と共に、生稻へ食事に出かけた。名を聞いた丈でも料理の如何は知れやう。其處へ丁度一宮君も來た。君は正金の支店長次席で、拙者の舊の同窓の友だ。

即ち食後は共に連れ立つて、ニューヨーク座を見物した。外題は『廣小路の持主』と云ふので、例のミュージカル、コメディであつたが、その中には眞面目な、深い様な處もあつて、まづは其の部の上乗な物と見た。

(六〇) 同十六日 (土) 曇

朝の中に、隣室の熊谷君を誘つて、一寸近所に買物に出で、早速革

製の寫眞立を求めて、これに子供等の寫眞を挿み、室の一隅に飾る事にした。

丁度その時、留守宅の書生の處から、榮二出產當時の詳報が來た。二度繰り返して讀んだのも無理はあるまい。

午後一時からは、兼て評判のあつた、平和協會、日本協會合同の招待で、一同ホテルの大午餐會に臨んだ。正面には、タウンセンド、ハリスが、初めて日本の公使館に掲げたと云ふ、名残りの星章旗が掛けてある。その下に立つての團長の演説、所謂平和の大使として

は、蓋し重任の一つであらう。さればこそ、いつもの當意即妙に反して、一昨日から拙者にも書き綴らせ、更に水野君とも相談して訂正した原稿を、朗讀的に辯じた許りで、その通譯も、特に同行の接伴員、グリーン氏を煩はす事と成つた。

尤も通譯係の頭本君は、新聞記者としての立場から、別に氣焔を吐く必要があつたからだ。



主人側の演説には、ニューヨーク大學總長、フインスレイを初め、ノックス、クラークなどの博士連が、それ／＼耳を傾けしめた。又來會者には、此地の紳士、淑女を初め、在留日本人の主なる顔觸れが、皆夫人同伴で見えて居た。

夜は正金銀行の招待で、一同ヒポドローム見物。兼て聞いては居たが、その大道具、大仕掛には、誰も感嘆せざるは無かつた。

但しその中に、日本の風俗を寫した處は、例に依つて日清混線の杜撰な物、何時に成つたらこれが改まるかと思へば、聊か心細い感もする。

又この幕の間に、ニュージーランドの土人の舞踊があつた。處がむしろその方が、面相と云ひ、肌色と云ひ、乃至手足の動かし方から、掛聲の調子まで、大に日本的なので、更に／＼變な氣がした。

何しろ此のヒポドロームでは、凡そ二三百人の人間が、同時に舞臺で動ける様になつて居る。而もその大勢が、少しも混雜せずに居



るには、只感服の他は無い。

伯林のシューマンなどでも、毎度奇抜な水藝を見たが、此處のは水中から出沒するのに、泰然自若として、一向濡れた顔をせぬ處に、何かの秘傳があるらしく、間があつたら研究して見たいと思つたが、遂にその意を得なかつた。

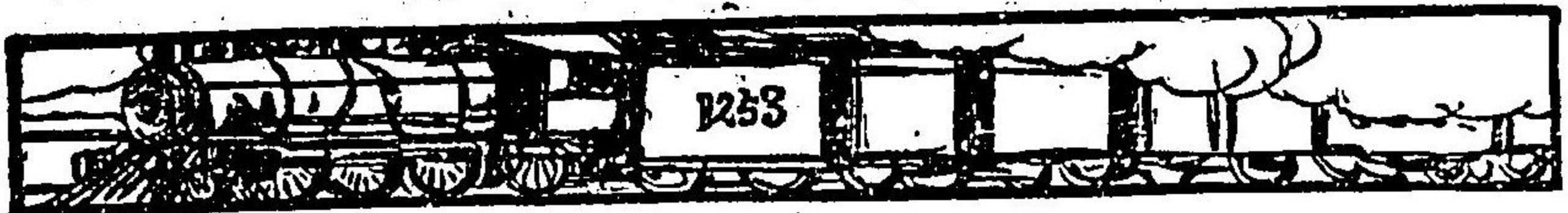
(六一) 同十七日

(日) 陰晴

天氣の曇つて居る故か、大分冷氣を催して來た。

朝農商務の研究生で、元と奈良縣の工業學校に居た、松田鹿三君の來訪を受けた。手島高等工業學校長の紹介書もあり、特に玩具の研究に來て居ると云ふ事で、大いに頼もしく感じたから、此間の子供博覽會の事や、又兒童用品研究會の事など話しておいた。但し同氏の話に依て見ても、此地でも多くの玩具は、獨逸出來の輸入品だと云ふ。

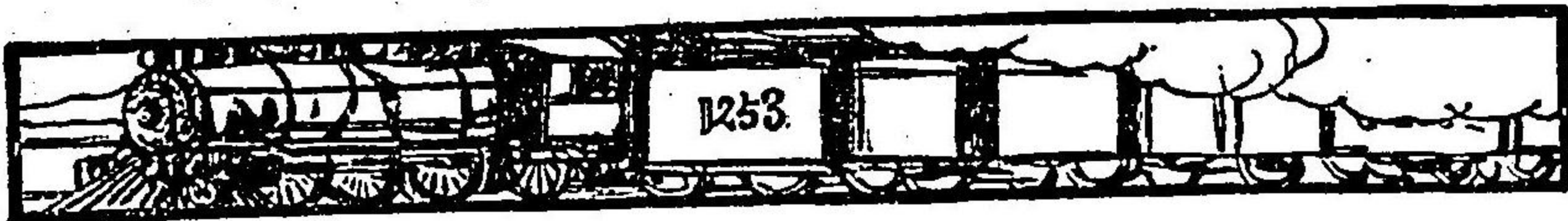
十一時から、元と博文館の編輯部に居た、遠藤君の案内で、市外





の動物園を見に行つた。但し時間があまり無ので、ゆつくり見る事は出来なかつたが、夫でも動物園と云ふ所は、下手な書工の安心する所だと云ふ事を悟つた。虎を描いて猫に類しても、丁度それらしい獣も居るし、鵜を寫して鳥が出来ても、又それに似た鳥もあるものだ。門前の小レストランで、折からの紅葉を賞しながら中食を済まし、それから共済會の大會へと臨んだ。これは在留の日本人間に、互ひに救済する目的で組織されたものだと言ふ。今日の大會には、澁澤團長、中野會頭、石橋代議士、及び拙者が演説をした。會場はカアネギー館の一室、來會者は千餘人。他に餘興として、天野嬢のピアノやら、某ミッスの獨唱もあつた。

會が六時頃に済むと、直ぐ日米週報の中村氏に導かれて、正金の一宮君と一所に、原某と云ふ、下宿屋風の家^{いへ}に日本食をやつて、それから五一會と云ふのに臨んだ。これは留學生の一部の團結で、最も信用ある會合だと云ふ。此處でも亦一席の馭辯を揮つて、ホテル



へ歸つたのが十一時。

今日ほど多く同胞の顔を見、又邦語を喋つた日はあるまい。

(六二) 同十八日

(月) 小雨

兼て頼んで置いた、三井物産の井上君が、朝の中から来てくれた。

これは買ひ物の案内の爲めだ。

まづ赤毛布の誰も行^ゆく、ワナメーカアへと志して、玩具や子供の服飾品をあさつて見たが、さて思つた程の獲物も無かつた。階上の食堂で午を済ませて、尙二三の賣場を廻つた揚句、此處を出て正金銀行により、一宮君に會つて、逆爲替を小切手に替へてもらつた。この正金の店の下は、紐育第一のナショナル、バンクなので、序に一寸見せてもらつた。大々的金庫を中央にした、白作りの堂々たる建築、但しそれには別に驚かないが、テレアウトグラフと云ふ、文字を現はす電信機や、デクトグラフと云ふ、無線電話機を見せられた時は、一寸面白く感ずつた。銀行へ行つたので氣が大きくなつ

たのでも無いが、更に金細工屋、銀器屋とまはつて、大枚のお買物を遊ばす中に、秋の日は早や暮れてしまった。

夜は買物の出来ぬ國の、餘議無くあとは後日にとまはして、井上君に送り込まれたのは、例のまた生稻である。

今夜は此處で早稲田大學の校友會があつた。招かれたのは、中野、佐竹、上遠野、川崎及び拙者。主人側には、華盛頓の大使館から垣原書記官、エール大學から朝川教授なども來合せ、これに來留校友、及ポストンからも來會した者も合せて、主客三十名許り。小山君の司會で演説數番あり、又餘興には高柳氏の長唄やら、谷口氏の席書やら、生稻主人の庖丁式などあつて、一同歡を盡して散じたのが十二時過。日本風の宴會も、矢はり夜の更けるものだ。

(六三) 同十九日 (火) 晴

午前久保田金僊君と、近所のメーシーへ買物に出かけた。ワナメーカーに次いでデパートメント、ストアだが、むしろより活氣の



あるを認めた。第一ワナメーカーで見なかつた玩具が、此所には澤山あつたのが嬉しい。

中食もこの中で済ませて、午後三時頃まであちこち漁つて、まだ漁り足らず、歸りには只ある古本屋へ入つて、獨逸出の美術書二三を見つげ出した。

歸著後通信を書く事十餘枚、七時から、日本俱樂部に於ける高峰博士の招宴に臨んだ。

但し此日は、團長初め中野、日比谷の諸君が、スキナー氏の織物工場へ出かけて、歸つて來るのが少し後れるので、その時間を利用して、神田、松村、原などの諸君と、つひ近所の、水野總領事の役宅を訪づれた。但し主人公を初め、其家族は、今我々一行と共に、ホテル住居をして居るのだから、つまり空巢をお見舞申すに過ぎない。

場所は中央公園に面した最好の地にあり、家は最新式の石造の大





厦。その十一階の一半を占るからは、室敷の割に屋賃の高いのも、蓋し無理ならずと感じた。處がけしからぬのは、其銅の扉を明けるがはやいか、奥から牛鍋の臭ひがブンと來た事だ。これは留守番の書記生君が、折から夕飯の最中であつたからだ。何を隠さう、實は何れも北山の我々、否、主人公が真先に立つて、その鍋に指頭の突貫を試みたのは、よりけしからぬ事であつた。

兎角して時刻を移して、設けの會場へ出かけた時には、やがて團長の一行も見えた。即ち直ちに食堂へと導かれる。同席は、澁澤、神田兩男爵、中野、日比谷、大井、土居、岩原、堀越、頭本、熊谷、大谷、水野、西村、原、松村、川崎、の諸君。これに主人側の接待役、京都の牧野畫伯も居合はせた。

今夜の料理は鹿の肉としめじ茸、何れも博士の別荘での獲物ださうで。博士はこれを獲んが爲めに、四五日前から別荘に歸り、日頃の腕にヨリを掛けて、子鹿五頭を仕留めたと云ふ。

已にかくまで心の入つた御馳走、客も之に酬る處なかるべけんや。眞面目の挨拶が濟むと、やがて各自の吟咏が初まつたが、進んで果は藝盡しとなつた。中にも大いに珍とすべきは、大井老人の端唄と、澁澤團長の義太夫であらう。

又主人の博士の追分の美聲には、一座感に堪へざるを得ず。要するに、渡米以來今夜ほど、最も日本式に、風味の整つた膳に向つた事は無く、又今夜ほど、主客胸襟を開いた事は無からう。宜なる哉、堀越侍従長の、屢々御催促申上げるに拘らず、團長のお神與、容易に動かざりし事やダ。

(六四) 同二十日 (水) 晴

兼て約束をしておいたので、九時過にはもう井上君が來てくれた。そこでまた買物に出かける。大層景氣が好い様だが、その大部分は委託品、九分の一のまた九分一までが、即ち土産物であるに過ぎない。



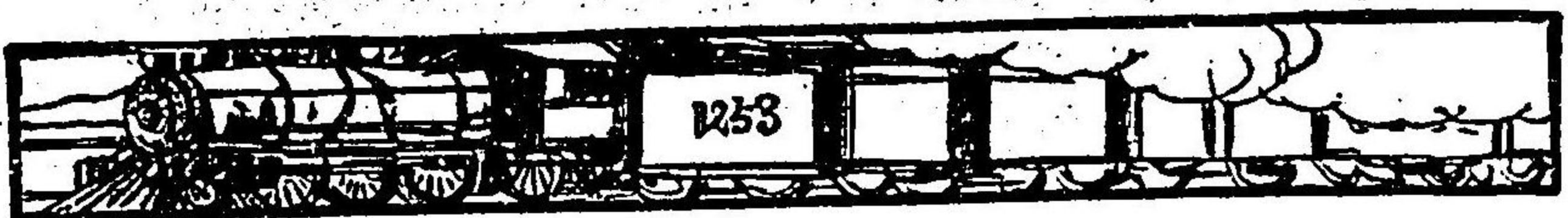


但し同日は自己用の物をと云ふので、まづロジャース、ビートで春廣と外套。出来合だが巧く合うものだ。ノックスで帽子。グンラツプと並び稱せられる店だと云ふ。バツトで襟飾。これも亦その品では、此市の名代の家だと云ふ。同じ地質でありながら、流行のハシリとオクレとで、一弗から四弗半まで上下して居る。

一昨日廻つた中には、例の猶太人の店があつて、其處には五十錢の襟飾、一弗半のチョッキなどもあつたが、それで居て、談判に依つては一割の愛嬌がある。處がかう云ふ老舗になると、所謂るワンピースの動かすべからざるものがある。

此間ホテルへ時計問屋の來た時、思つたより貴い何のと、熱を吹いた紳士もあつたが、それ等は八百膳で出す鯛も、四谷の夜店に見る鯛も、同じ物だと思ふ連中だらう。

など、話しながら、正午はフルトン、ビルディングの穴倉で、大急ぎで安直の中食を濟まし、更に一昨日の金屬問屋へ行つて、注



文の品の出来上りを受取り、ホテルへ歸つたのが二時。

其處で待合せて居た三四人の有志者と、ドラマチック、アカデミー、即ち例の俳優學校を見に行つた。これはカアネギー、館内の一室にある。兼て一宮君から照會して置いたので、ド、ミールと云ふ教授、即ち此所の出身で、一ツ廉の名優に成つて居る人が、親切に案内してくれた。但し生憎初等科の方は、時間の都合で見られなかつたが、高等科の方の舞臺稽古は、大小二ヶ所見る事が出来た。

又毎日の課目の中には、イブセンの『ヘッダ、ガブラア』があつた様に覺えた。クラシックでは相變らずシエクスピヤ物。其他の掘出物は、その幹事室の机の上に、不圖見付けた『小公子』の脚本だ。これは一つ土産にしようと思ふ。

二時間許此所で費したが、未だ暮れるには間があるので、更に博物館へ行つて、此頃の呼び物と聞えた、ペリーの北極探検の土産物と、ルーズベルトの亞弗利加の獲物とを見た。毎度ながら目につく



のは、例の子供に關した物。即ちペリーの子息の乗つたと云ふ、小さなボートのあるのが嬉しかった。

入口の廣間にある、大々的の隕石も目を驚かすが、それよりも、前世界の動物の骨の、殆んどお伽噺を生で見える様なのや、又五本指の猫脊であつた時代からの、馬の進化を骨で見せてあるなぞには、つひ足を停ませられた。

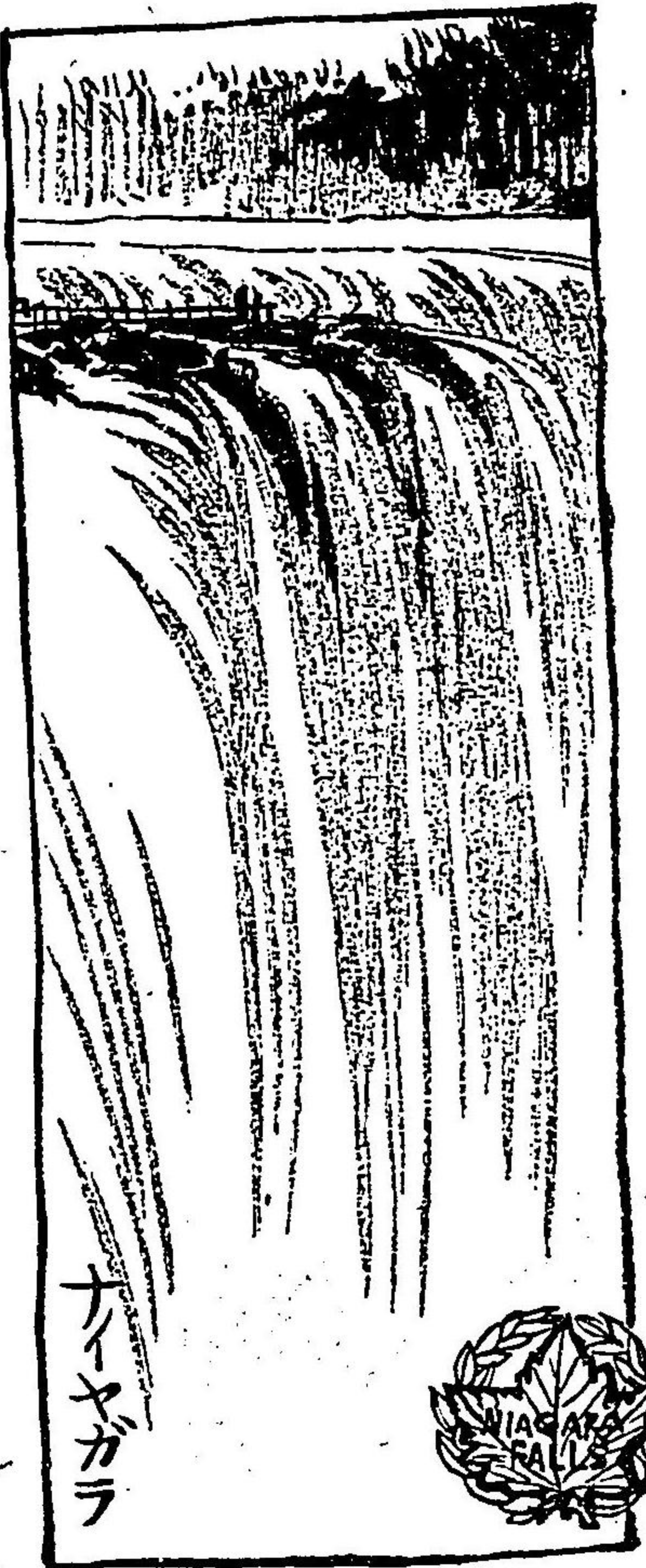
歸途にはマレイと云ふ料理屋に寄つて見た。これは一名を羅馬花壇と呼ばれる位で、巴里で見える様な特種の結構、赤毛布の口を明かせるには足れりだ。

六時に約束して一宮君と落ち合ひ、正岡、久保田、白峰などと云ふ、芝居好の面々と共に、アストル座の見物に招かれた。

その前に夕食をブラウンスと云ふ料理屋で食つたが、此所が又頗る通な所、殊に芝居に縁のある老舗とかで、壁にかけてある肖像が、皆古代からの名優で持ち切つて居る。それで居て、客は男子に限

られて居るなぞも、更に嬉しい所では無いか。

アストル座の出し物は、已に二年も打ちつゞけて居ると云ふ、「メン、フロム、ホーム」と云ふ世話物。座頭ホッチの藝風の、高田式



に滅法濫いのが、又頗る受けて居るらしい。

今日濫澤團長以下團員の多數は、午餐をエキイテール社に招かれ、其歸途ハリス氏の墓参をしたと云ふが、拙者は前の次第で、私用の爲に御多分に漏れた。

又夜は、澁澤團長一人の資格で、當地の富豪シツプ氏初め、第一流の紳士數十名を、第一流の某亭に招待して、盛んな晩餐會を開いた。序ながら書き留めて置く。

(六五) 同二十一日 (木) 曇

紐育ももう今日限りと云ふので、午前は荷造りに掛つたが、買物の爲に大分嵩が増して、其の仕末には少からず困んだ。

此の午團長以下主なる面々は、例のシツプ氏の招待に臨んだ。

中食後、フルトン、ホワイト二氏の案内で、市内の學校と病院を見に行つた。同行は大谷、松村、熊谷、龜田、井上の五氏。

さて、午後のプログラムは、第一に商工中學校。此所では例の神田男の勅語朗讀と云ふ處を、大谷君の演説があつた。通譯はフルトン氏で、中途に大谷君が言葉につかへ、日本語をフルトン氏に尋ねたなぞは、むしろ満場大喝采であつた。

次に兒童遊戯場、附けたり少年農園。これはかゝる繁華の都には、



頗る必要、有益の物である。

第三が市立病院、これは頗る大なる計畫の、その一部分より出来上つて居らぬが、それでさへ見て廻るに二時間許り掛つた。

此の病院は恰も川の岸で、その一部には、通船の廢物を利用した、結核患者の保養所が設けてあるが、その上甲板が總て學校に成つてゐて、それに結核性の少年少女が、隔離的に教育を受けられる設備の出来て居るには、少からず感心したのである。

その次ぎには看護婦の寄宿舎を見て、その居間の立派なのに驚き、更に無宿者の宿泊所を見て、その食物の上等なるに驚き、兎角して日の漸く暮れんとするに、いよいよ驚き慌て、歸つたのが午後六時に近い頃。

大急ぎで荷支度をして、大急ぎで風呂に入つて、大急ぎで衣服をつけて、今夜は三井の支店長福井君の私宅に招かれた。蓋しお名残の晩餐會の同席は、水野君夫婦、中野、日比谷、佐竹、小池、名取



加藤、及び瀬古副支店長の諸君であつた。

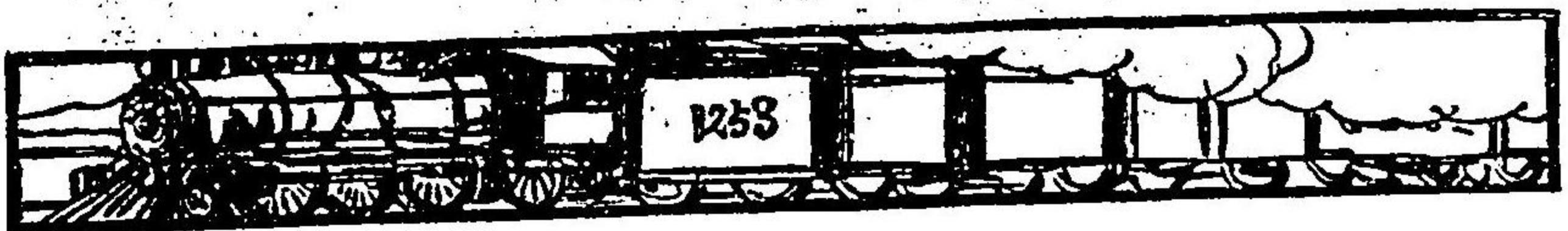
かくして此夜遂に紐育を辭し、又しても例の廻遊ホテルへと歸つた。

何を云ふにも、人口四百萬の大都會、高が十日位の滞在では、實にその上つ皮さへ見られない。中にも心残の事が三つ。一つはブルクリンの橋を渡つて見なかつた事、二はハドソンのトンネルを潜らなかつた事、三はメトロポリタン塔へ登らなかつた事だ。

いや、塔と云へば、此他にシンガアや、タイムスやら、高い建築のニヨキ〜立つた町では、昔こそ天國にも隣ると見えた、寺院の塔のゴヂック式なるも、さながら駄鳥の前の青鷲、てんで丈競べも出来たものでない。蓋しこの現象も、亦何かの意味があるのでは無いか。

(六六) 同二十二日 (金) 曇

九時にニューヘブロンに着いた。これは僅か午前間に、エール大



學を訪ふ爲めであるから、他の工場は、只門前を通過するに止めた。

然るに工場は相變らずの歓迎で、一々團員に紀念品をくれる。まづゴム靴製造場では、人形用の小靴。時計工場では、ニッケル製の懐中時計。コーセット會社では、飯事に使ひさうな小形のコーセット。この分では、鐵砲工場ではピストルでもくれる事かと思つたら、此所では綺麗な書ららと、雷管形のピンとをくれた。

自働車十數臺で押し廻つて、到る所に物を貰つてあるく工場は、何の事は無いシルクハットとを被つて、バッヂをつけた高等乞食だと、相顧みて苦笑せざるを得ない。

已にして、エール大學に著いた。有名な大學だけに、流石設備も整つて居る様だが、委しく參觀する違はなく、只千人を一時に入れ得ると云ふ、大々的の食堂を通りぬけて、割合に小さな本部の建物に立より、その樓上で、總長ハットリー氏に會つたが、總長は澁澤團長に贈るに、二百年祭當日紀念牌を以てした。これは先に伊藤公



にも贈つた事のあるものだと言ふ。

十一時には再び汽車に歸り、午後二時頃にはプロビデンスに着いた。此處は本團に縁故のある、提督ペリーの出身地なる、ロード、アイルランド州の首府である丈で、何となく人氣立つて見えた。業々しい騎馬巡査の先驅で、まづ市役所と州廳とに、市長と知事の歓迎を受け、それから各方面の見物に向つたが、拙者は大谷君、龜田君など、程近い師範學校を覗いた。例に依て男生徒は薬ほども見えない。

次に二百五十年前の建立と云ふ、此國では古い寺院を見て、更にブラウン大學を訪ふた。あまり大きな大學ではないが、前大臣ジョン、ヘイ氏を出したので名高く、又その人の紀念として、目下圖書館が建てられつゝあつた。

エールにはバンダフィールドの寄附した寄宿舎があつたが、此處ではロックフェアアの金で出來た、立派な青年會館を見た。



それから少し町外へ出て、何とか云ふ病院の、廣い綺麗な庭ぐけをまはつて、又引かへし、五時頃ゴースラム銀器製造會社へ来て、一同に落合つた。

この會社は、曾てペリー提督に贈つた、日本渡航の紀念品をも、製作したとか云ふ由緒のある會社で、その盛んな工場を、一々委しく見せた上に、俱樂部で接待の茶を出して、更に銀製の紀念牌を分配した。

かくて一度車に歸つて、又候例の窮屈袋をつけて、夜は特別電車で半時間、此地の名所とも云ふべき、スクワンタム俱樂部の晚餐會へ招かれた。

スクワンタムとは、土人語で上機嫌と云ふ事だと云ふが、何しろ大西洋の入江に臨んだ、如何にも景色の好さうな處に、數寄を盡した建物があるのだから、晝はさぞかしと思はれたが、惜しむらくは、夜に入つて、新月もちらりと顔を見せた許りなので、その景勝を賞



する事は出来なかつた。

其代り、庭中には小さな電燈を飾り、日米の旗を列ね、その上花火までも打揚げての款待、蓋し當地でも稀有の盛會であつたらう。又今夜の御馳走が、頗る珍とすべきもので、土人傳來の貝料理を初め、其他鰕、魚の新鮮なを選んで、鳥獸の肉を避けた心盡しには、誰か舌鼓を打たずに居られやう。

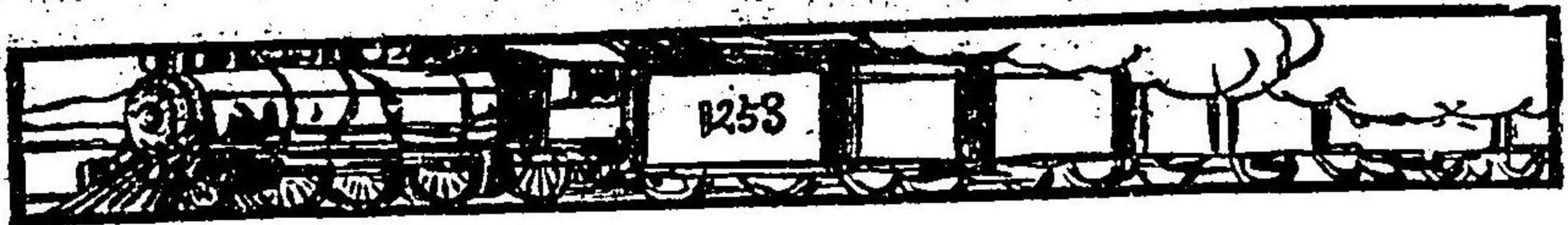
但し餘興の樂隊が、無暗に君が代を濫發したのには、聊か痛入らざるを得なかつた。

痛入ると云へば、今日の新聞に面白い事があつた。それは何から割り出したか、今度の實業團の日本の紳士の、財産を總體合計すると、一億萬弗に上ると云ふ事だ。此間紐育での相場附も思ひ合せて、これも痛み入らざるを得ない様に思つた。

(六七) 同二十三日

(土) 快晴

昨夜十二時に發した汽車は、今朝もうポストンに著いて居つた。



プログラムによれば、今朝は團員が二隊に別かれ、一隊はフオーア、リバアの造船所に、一隊はツールサムの時計製造所に、參觀に出かける筈である。

然るに拙者は正岡君と共に、その二者ながら棄權して、まづ指定のホテル、バーカアスに投じ、それから横山、影山なんぞ云ふ、曾て早稻田で出席簿をつけた事のある、留學生諸氏の案内を頼んで、まづケンブリッジ町に向ひ、ロングフェローの舊宅を訪つた。

此日恰も此家には、婦人組のレセプションがある筈なので、主人の老婦も座敷を飾つて、ちやんと待ち受けて居る處であつたが、快く一行を迎へて、家内隈なく見せてくれた。

中にも故人の書齋だつたと云ふ、玄關脇の一室には、その遺愛の文房具が、其儘大切に保存されて居る外に、當時盛んに行遊したらしい、エマーソンやホーソンの額も懸つてゐた。

然しそれよりも嬉しかつたのは、曾て故人の詩中に入つた、古い銀



冷屋の遺材を以つて、小學兒童が拵へあげて、特に贈つたと云ふ木製の椅子だ。少しはあやかる様になど、代るく之に掛けて見る。

尤も此家はロングフェローばかりで無く、一時はワシントンの本營にも成つたと云ふ、歴史的の面白い由緒もあるのだ。

此家の側には、モント、アウバンと云ふ墓地がある。其處には此の大詩人の外に、名士大家の墓碑があるので、序に之にも廻つたが、思ひの外景色の好い處で、殊に中央の高塔に登れば、ポストン市が一ト目に見えるのだから、我知らず此處に時を移した。

午後一時には團員が集つて、ハアバート大學を訪ふ筈になつて居る。即ち拙者は、その以前に例の二氏の案内で、大學内の學生俱樂部に、學生並の中食を済まして、夫から紀念館の接見會に臨んだ。恰も總長は不在であつたが、書記長グリーン氏が主人役をつとめ、又新任の商科大學長、ケイ博士の觀迎の辭、濫澤團長の答辭があつた。



その後で紀念の撮影があつて、更に又一回は運動場で、ハアバート對ブラウン大學の、フットボールの競技を見せられる筈の處を、拙者等は又エスケープして、急いでシンホニー、ホールに向つた。此處では今日珍らしくも、沙翁の『夏の夜の夢』が演せられるからだ。

聞けば今日のフットボールでは、頭を踏み割られて大怪我をした者があつたと云ふ。それから思ふとこのホールで、高尚なクラシック劇を見た方が、少くとも拙者如きものには、大いに要領を得たと感じた。

夜は例の商業會議所の、正式の晩餐會である。會場はアルゴンクキン俱樂部と云ふので、日本通で評判の高い、モース博士の演説もあつた。

(六八) 同二十四日 (日) 雨

日曜と云ふので、例の通りプログラムは無い。どの暇を利用して



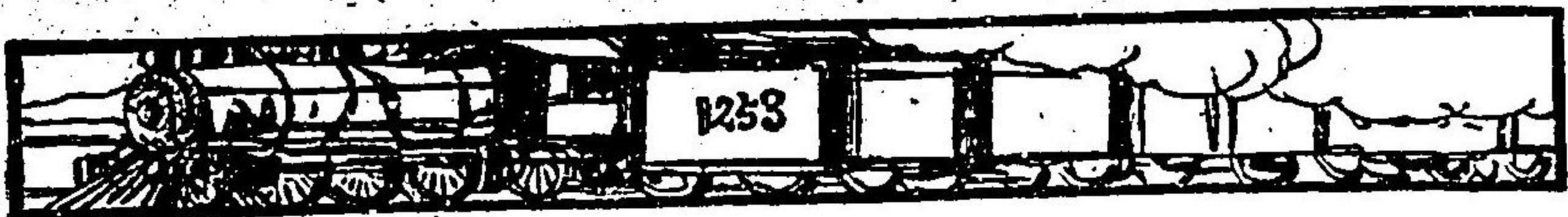
團長はペリー提督の墓参を思ひ立つた。

同行は中野君、頭本君、加藤君、ローマン君、當地の商業會議所の委員某氏と、及び拙者の六人である。

但し此日の墓参は、敢て弔魂の爲めでは無く、むしろ謝恩と云ふべきであらう。五十餘年前の開國の恩人に、平和の大使を以て任ずる、渡米實業團の團長が、特に一日を割いて墓参をするのは、元より當然の、而も大切な事である。處がその墓は、ポストンからは七十哩、州もロード、アイランドに屬して、ニューボートと云ふ、大西洋岸の要港にあるのだ。

二時間許りでその地に著き、市長、助役等の案内で、思ひのままに墓参を遂げ、歸りには最寄りの海兵團を參觀し、又大西洋岸の、有名な富豪の別荘地をも見物して、夕方には又ポストンに歸つた。

此日の事は別に委しく書くつもりだから、日記の中にはわざと略さう。



歸宿後直ちにバンドーム、ホテルのレセプションに出席した。

これは當市の日本人會と、浪華會との主催である。會する者約二百餘名、先に紐育からカナダへ向つた、南、渡瀬の二君も、此會では顔を見せて居る。

此夜ツレーン、ホテルに水野君の病を訪ふた。君は昨夜からの風邪氣で、今日の墓参にも行かれなかつたのである。

(六九) 同二十五日 (月) 晴

午前十一時までは萬年筆に親しみ、それから藝陽、金僊の二君とコンザルパトリウムを見に往つた。これは手もなく音樂學校だが、一寸覗いた舞臺には、丁度少女の一隊が、舞踏の練習中であつた。それから美術館へと向つた。此所には東京の美術學校を出た、彫刻専門の新納君や、又詩畫専門の富田君などが、日本美術部の囑托をうけて、恰も在勤中であるから、大いに心強い感じもする。

建築は宏大なもので、品物も亦感嘆すべきだが、實はまだ開館前



なので、十分に見て廻る事は出来なかつた。

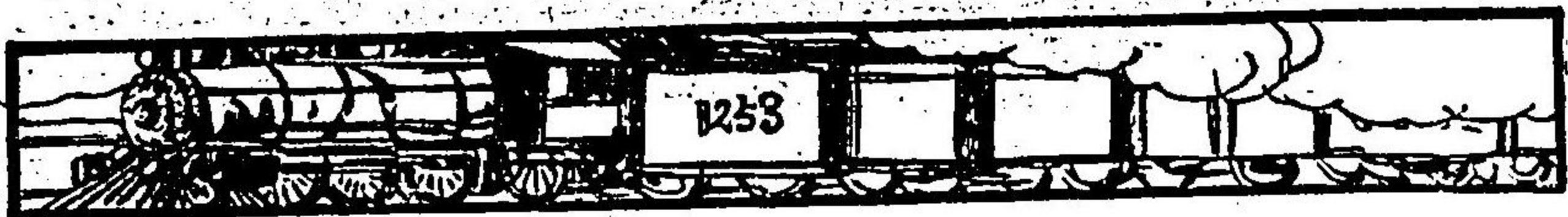
序にその隣にある、美術研究所も參觀した。これは至つてお龜末なもので、同じ亞米利加の物ながら、此所ばかりは世界一とも覺えず、又その御自慢も聞かされなかつた。

中食は美術館の床下、實は食堂で御馳走になつて、歸途には圖書館を見に寄つた。

これも評判の物だけあつて、成る程大きい、立派なものだ。壁畫にも亦見るべきものがあつたが、我が一行を當て込みのつもりか、美術部に陳列した日本寫真には、却つて少しも目が留まらなかつた。

美術館で結構な古物に涎を垂らして、少くかぶれ氣味の拙者と金僊君は、更に富士商會と云ふ、小さな日本の雜貨店に飛び込み、その依托販賣品だと云ふ、埃だらけの古物の中から、希臘、羅馬の古錢やら、埃及物の破片などを、一ツ廉掘り出した氣で歸つた。

今夜は早稻田の校友會に招かれた。同席は上遠野、正岡、高石、



久保田の四君、それにポストン、ハアバード、ケンブリッジ等に在學する、學生十名許り、オリエンタール、ホテルと云ふ、支那料理屋の一室を占領して、快談に時を移さうとしたが、夜は芝居行の約束があるので、残念ながら食ふと直ぐ立ち、コロニアル座と云ふのに出かけた。

今夜の外題は「ミス、イノセンス」と云ふ、例に依てのミュージカル、コメディ。評判のアンナ、ヘルド嬢の、巧みにその皺を隠して居る化粧法に、只感心する許り。

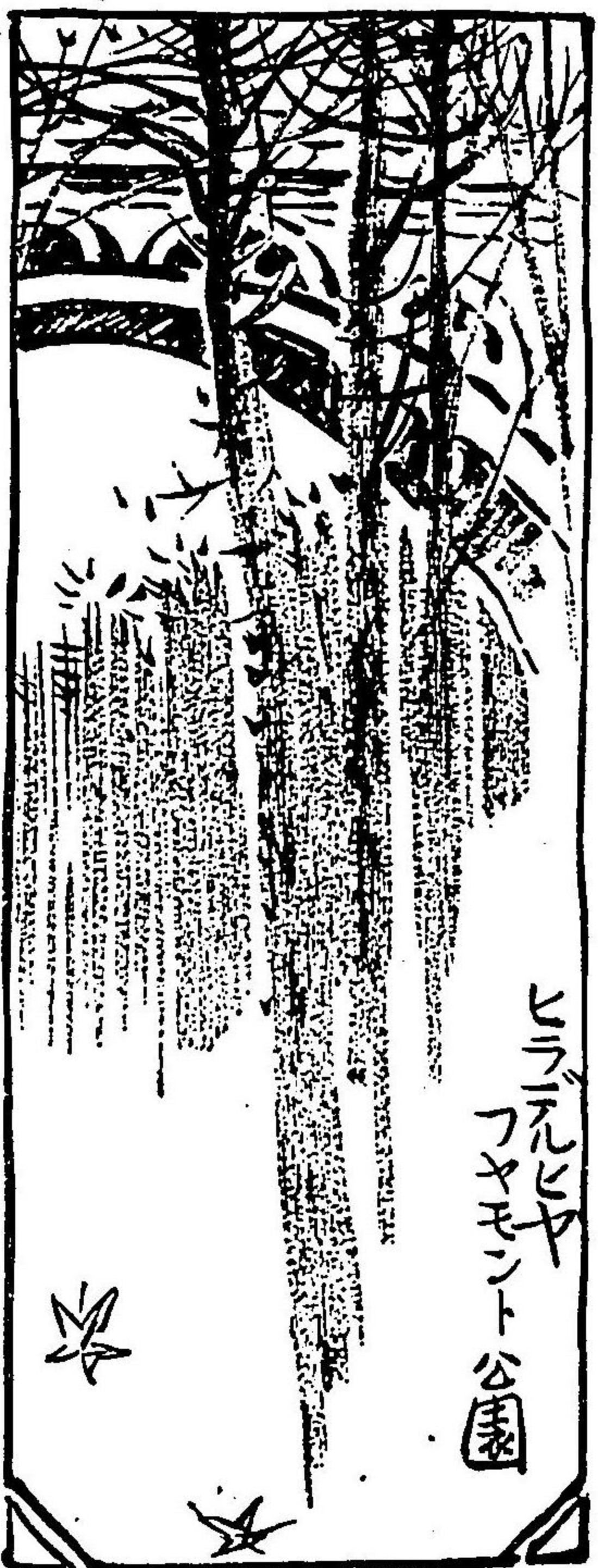
今日はコンザアバトリウムで、舞踏の稽古を見、又美術研究所で、人體寫生を覗いたが、不思議に夜の芝居にも、その稽古や寫生の場があるの、よく、演藝美術に縁のある日と、相顧みて金僊君と笑つた。

かくて芝居のハネから、直ぐと汽車へ歸つたが、思へば此のポストンの三日は、他人は知らず、拙者に取つては、石炭の煤も浴びず、

機械の音も聞かず、頗る非實業的に暮し得たのを、大いに感謝せざるを得ぬ。

(七〇) 同二十六日 (火) 晴

朝著いたのはウースターと云ふ處だ。此處にはクラアク大學と云ふのがあつて、その學長ホール博士は、有名な兒童心理學者だ。さればその人に會ひ度さに、神田男や名取君と、自働車をその大學へ向けて貰つた。



處が時間が短いので、博士とは手を握つたまゝで別れ、却つて生理

學の教室に、ハッチ教授と會見して、そのマラリヤ驅逐の手柄話を聞かされた。

大學の次は工業學校へとまはつた。これも有名な物だと聞いたが、門外漢には何を見せられても、解つた様な顔をするに過ぎず、一寸面白く感じたのは、自働車の速力を試験する機械だつた。

それからウースター、アカデミーと云ふのも見た。これは日本の高等學校的のもので、特に大學へ入らうと云ふ者のみを、教育する所だと云ふ。他とちがつて生徒は男子許り、遊戯室から寄宿舎まで見て廻つたが、時間が迫るので委しい事も聞かれず、十二時にはもう汽車に歸つた。

午後二時には又スプリングフィールドに來た。此處には大規模の兵器製造所がある。無論國立で、日本の砲兵工廠と云ふ所だ。

平和の使節に甚だ不向きの様だが、之も一種の工場だと云ふので、歓迎委員は一同をこれへ案内し、所長某大佐の案内で、幾棟か



ある大工場を、隈なく參觀するを得た。

中で誰の目にも着いたのは、フィリップンの屯田兵に持たせると云ふ、肉切庖丁の様な異様な剣だ。

その後公園を見物したが、折からの黄葉に夕映する景色、さながら水彩畫の中に遊ぶが如く、例ながら浴びる埃も、あまり苦にはならなかつた。

さても今日は渡米以來、最も特筆大書すべき日である。それは例の伊藤公の、ハルビンに於ける不時の薨去を、早くも聞き得た日であるからだ。蓋しこの訃音は、曉方已にグリーン氏の耳に入り、それから一行に傳へられたのだが、これを聞き得た程の者、誰も眼を圓くして、夢ではないかと疑はぬ者は無かつた。

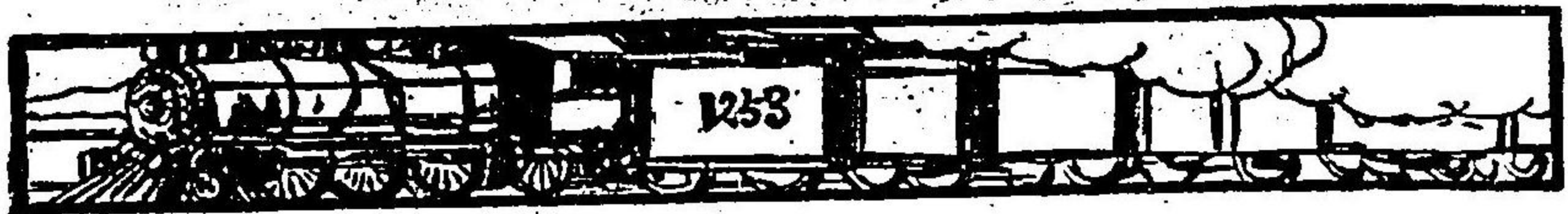
されば國家の元勳に對して、その弔意を表すべく、今夜の此市の晩餐會は、一同出席を辭する事にして、午後五時には皆車に入り、そのまゝ後尾の觀覽車で、臨時の總會が招集された。

議題は伊藤公の薨去に付いて、本國へ公式の弔電を送る事、及び今後同公國葬の當日も、同じく晩餐會を辭して、弔意を表する事など、此日の總會は何となく濕り返り、何の事は無い、赤穂城渡しの評定と云ふ觀があつた。

かくて此夜は車中に食して、其まゝ外へも出ずに居る處へ、ドングエッド夫人が來訪された。これは當市の青年會長の奥さんで、兼てから拙者のお伽噺を譯して居るが、それに付いて承諾を得たいと云ふ用向きであつた。無論異存を云ふべきで無い。

尙話の盡きぬ夫人も、永くは妨げ度く無いと云ふので、三十分ほどで歸つて行つた。

それを送り出して後、停車場まで畫葉書を買ひに行つた途に、ポイス、クラブと云ふ看板を見た。その前に立つて居る子供に、何をする所だと聞いて見たら、私達の遊ぶ所ですと答へた。面白さうなので入つて見たかつたが、『大人は入れないよ』と云はれてしまつた。



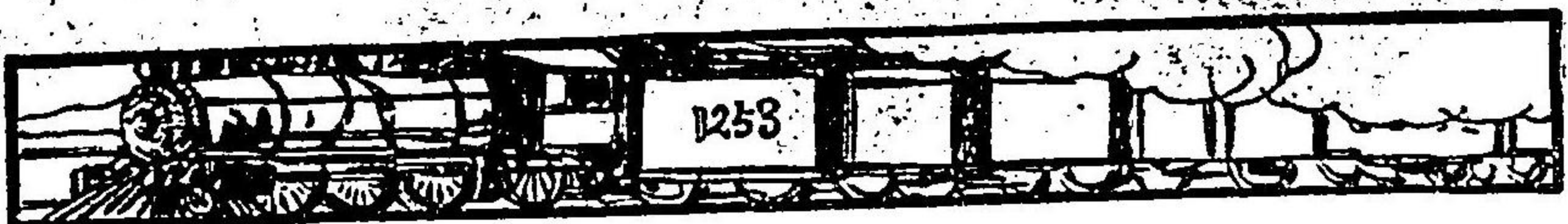
(七一) 同二十七日 (水) 晴

朝九時ニューワークに著いた。直ぐ市廳に歓迎式があつて、それから諸方の見物、午後エヂソン電気工場參觀と云ふプログラム。但し拙者は、例の通信の爲め上半日を棄權して、車の中に筆を走らせて居る中、汽車は又動き出して、ジェルシーと云ふ町へ来てしまつた。これは線路の都合から出た事だ。

その爲めに折角楽しんで居た、午後のエヂソン行にも参加する事が出来ず、仕方が無しに車を出て、何處かで飯を食はうとすると、幸ひ紐育のメトロポリタンの頭が、つひ鼻の先に見えて居た。

即ち電車でハドンソンの岸まで走り、それから渡船で七分許り、五日振り又紐育の土を踏んだ。けれどもゆつくり見物は出来ない。下町の只あるランチへ入つて、三十八錢と云ふタアブルドートで腹をこしらへ、三時までには車に歸つた。

その後で車は動き出して、元のニューワークへ來ると、朝から出た



連中は、程無く皆歸つて來た。聞けばエヂソン氏夫婦も、特に一行を招待に出て居たと云ふ、返すくも残念でならない。

尙此町では、處々に日章旗を立て、居たが、之れに黒布のつけてあるのは、矢はり伊公哀悼の爲めだらうと云ふ事だ。

汽車は六時に發車して、九時にはレディングに著いた。見物は明日の事と、皆々油断して居る處に、停車場では奏樂が響く、潮の如く人が寄せて來る。例の歓迎のお祭騒ぎだ。

夜の事で下車には及ばぬが、せめて挨拶だけさせてくれと云ふ頼み。即ち觀覽車を臨時の接見所にして、團長初め一行が居列び、其所で歓迎者と握手する事にしたが、何しろ平民主義の國だけに、何等制裁もつけなかつた者か、我もくと押かけた、男女老若、猫、杓子、その數何百と云ふを知らず。シルクハットの紳士も來れば、ネクタイも著けぬ労働者も來る。花をつけた若い娘も居れば、水漬垂らした田舎婆さんも居る。イヤもう來るはく。殆んど果しが

付かないので、遂には警官の手を借りて、漸く打ち切る事が出来たが、後で見ると我等の手は、半ば知覺を失つた様になつて居た。警官と云へば、昨日あたりから到る處に警官が付いて、陰に陽に一行を保護する様に見えた。ハルビン事件の影響か。

(七二) 同二十八日 (木) 晴

汽車は昨夜のまゝの居すわり。朝は更に動き出して、サウスマウンテンと云ふ處へ、精神病院を見に行つた。州立だと云ふが、頗る整頓したものだ。が、それよりもその景色の好いのに、一層病人が羨ましく成つた。

いつそ此處に入つては如何だ、その資格もありさうだが、など、冷かし合つた者もあるが、さてそんなら残つて居やうと云ふ、奇抜な先生は出なかつた。

再び停車場に歸つて、それから自働車行列となると、昨夜の樂隊もおなじく自働車に乗つて、真先に囃しながら走る。その次が警



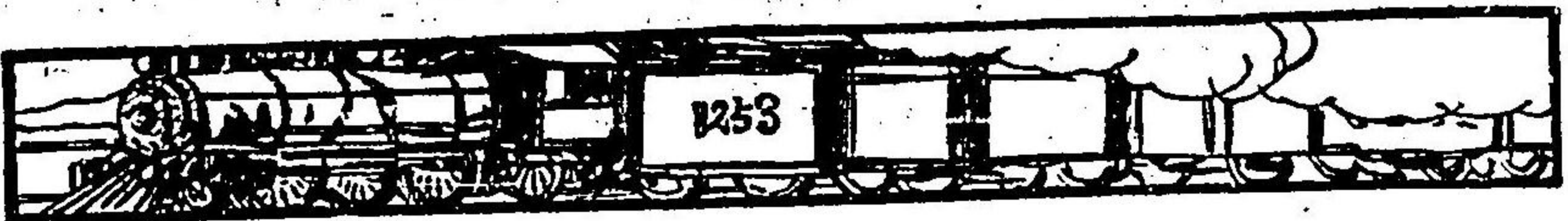
官の自働車。イヤ仰山な事であつた。

最初に此地の鐵道會社の工場を見る。此所では汽鑿車の宙釣りが目についた。

次には中學校に立より、その大講堂に、千餘人の男女の學生を集めて、市長の歡迎の辭がある。神田男の勅語朗讀がある。生徒の合唱がある。

又途中を迂回して、公園、水道貯水場などを、車の上から覗いてまはつたが、恰もその公園の後の、高い岡の上に當つて、支那風の建物の聳えて居るのには、誰も等しく質問に及んだが、單に好事の茶亭に過ぎぬと云ふ事だ。

かくて十一時半には、又車中の人となつたが、人々は尙残り惜しげに、停車場内まで送つて來た。元來此地は、最初のプログラムには入らなかつた處だが、中途から強ひて申込んで、遂に一行を立寄らしめたのだと云ふ。その歡迎のほども無理は無い。只恨むらくは





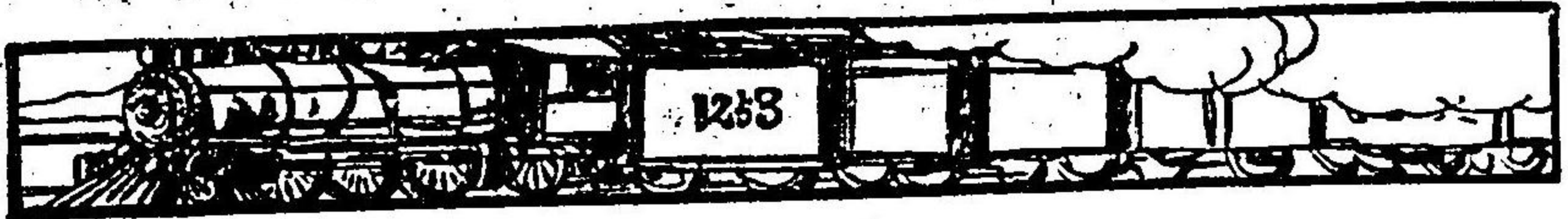
時間の少かつた事だ。

更に記念すべきは、此地で恰も市中を廻る中に、初雪のチラ／＼と来かけた事だ。但し雀が見えないので、その三里までに及ぶべくも無い。

午後一時にベツレヘムに着いた。聖書で耳なじみの名、さては由ある寺院でもある事かと思ふと、これはしたり大々的の製鋼所。天國どころか、天日も爲に光を失ふ許りの、矍々たる煤烟の中を、其所に此所に導かれて、活地獄の様な鍊鍛作業を見た。

然し一等戦艦に用ひる、大きな大砲や鋼板の、無造作に仕揚げられる處を見ては、流石に快哉を叫ばざるを得ず。男子としては一度は見えて置くべきものと、二時間許りの巡覽に、足の疲れるも辭せなかつた。

その中に雨になつた。随つて暮れるも早く。三時に此所を立つて、汽車は六時と云ふのに、早や燈許りの、ヒラデルヒヤの大停車場に着



いた。

直にベラ棒素敵なホテルと、誰やらが車中から駄洒落て居た、ベレビュー、ストラッド、ホテルに投じた。このホテルは、維新以前の幕府からの使節も、行李を解いた家だと云ふ。不思議な御縁と云ふべしだ。

今夜は即ちノウブプログラム。例の支那飯研究隊は、巡査に道を聞きながら、十餘町も空腹を抱へて、支那居留地のファー、イーストに登つた。

(七三) 同二十九日 (金) 晴

午前九時半、ホテルの隣の製造家倶楽部に勢揃ひをして、これから案内されるまゝに、自動車の列を作つて、まづさし當り獨立記念館へと向つた。

米國へ来る程の者は、この町のこの建物の、この國、この國民に取つて、如何に大切であるかを知らぬ者はあるまい。國祖ワシント

ンが、股肱の謀將と此所に獨立を宣言したと言ふ、當時の歴史を忍ばしめるには、其紀念品も残つて居る。椅子、卓、インキ壺、それで書いた同志の連署状、さては有名な獨立の鐘に至るまで、由來を聞けば日も足らぬであらう。

其所を案内者の急ぎ立てるまゝに、僅か半時間許りで出で、その程近い處に、更に獨立には縁の深い、當時の本營になつたと云ふ、民家の残つて居るをさへ見ず、直ちに造幣局へと向つた。

貴い寺は門からの譬、金色燦たるモザイク張りの支關に、まづ感心させられた上で、階下の貨幣製造所へ導かれたが、生憎今は銅貨拂底の折から、その補充の忙しさに、折角楽しんでゐた金貨の顔は、遂に見せられる事無しに了つた。

其代り思ひ掛けないものを見た。それは直径二寸許りの、山吹色の圓煎餅様の物。これが見て居る前で、機械で打ち出され、一面に大統領の顔が出ると、他の一面には、『日本實業家來米歡迎紀念』と、

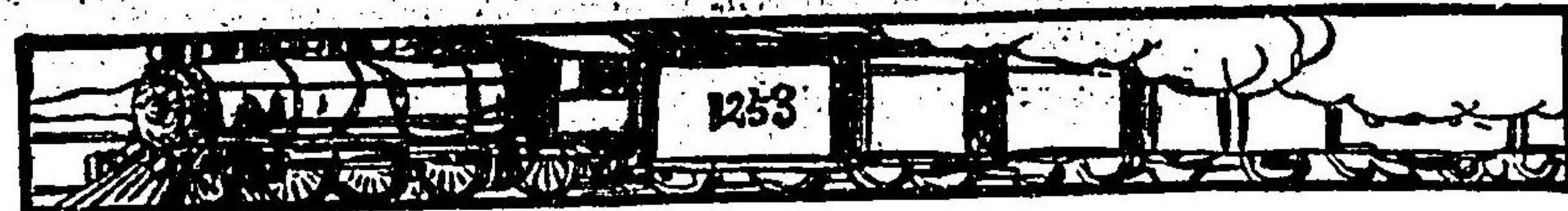


漢字まで添へて刻み込まれた。

これは此所の局長から、わが團長の手を経て、天皇陛下に獻納する筈の物で。又我々一行には、同じ物の銀製なのを贈られると云ふ。今日一行の參觀を待つて、その目前でこれを仕揚げて見せるとは、一方ならぬ心入れと云ふべしだ。

造幣局の次には、商業博物館へ向つた。此所は館長ウ・ルン博士が、頗る熱心に經營してゐる丈、世界でも一寸類の無い、頗る秩序立つた、教育的の陳列法が行はれて居る。本團今回の視察の目的には、大いなる適當な研究所であるのだ。但しその日本の部のは、先年の博覽會の遺物だと云ふが、聊か杜撰な物もある様に見えた。

これまでは一行一團となつて廻つたが、此所から各方面に別れて、中食を饗せられつゝ、更に視察すべくなつた。拙者の招待されたのは、即ち有名なワナメーカーアのデパートメント、ストア。聞けば紐





育のは支店で、此所の方が本店だと云ふ。

さればこそ、目下増築中の部分が竣工したら、世界第一と誇るに足らう。それよりも感心したのは、中食後に演藝館で催された、店員の奏樂、女店員の體操、及び丁稚隊の操練等であつた。同行は西村、石橋、川崎の三氏のみ。他に招待されて居る者の、何故辭して來なかつたかを、むしろ残念に思へる位だ。

此夜はオベラ、ハウスと云ふ座に、久し振で『マクベス』を見た。道具が甚だ振はなかつたが、『マクベス』役者も、同夫人に成つた女優も、共に見物を動かすには足りた。

(七四) 同三十日 (土) 晴

今日は舟遊の案内を受けた。即ち九時頃から特別汽船に乗つて、一同ダラウエア河に泛んだが、さまで風も無いのに、中々寒い事であつた。

▲初冬のデツキに猪首列べたり

やがて上流に舟を進めて、ヘンリー、ヂストーン會社の鋸製造所を見た。拙者等にはあまり縁の遠過ると思つたが、見物には却つて興のあるものであつた。

それよりも、次に見た水道の瀘過池こそ、素人にはさつぱり面白くは無いの。濟まないが、急いで船へ歸つてしまつた。

午餐は船中で饗せられて、午後は下流のレギー島に、海軍の營所を訪問したが、拙者は少し買物があるのに、明日は日曜と來て居るから、此所で御免蒙つて、皆の軍艦を見物して居る間に、高石君と電車に便乗して、一直線に市中へ歸つた。尤も今日の船遊は、紐育のほどには行かなかつたので、主人側の誰彼も、此所からよろしく引取つた者もある。

夜はホテルで正式の晚餐會。例の如く演說數番あつた中に、何とやら云ふ法官の辯士は、一寸面白い事を云つた。

一體米國人の辯を弄して、宴席で長々と演說をやるのは、實はそ



の家庭に於て、毎度細君の長説法を聞かされるから、その鬱憤を晴らすに過ぎない。その證據には、同席の上院議員某氏も、亦州知事某君も、共に獨身者だから、演説が至つて短かゝつたと云ふのだ。これは今夜上のガレリーに、婦人連の傍聴が澤山あつたからでもあらうが、この説が又不思議に、日本人にも適用され得ると見えて、現に濫澤男を初め、神田男にしても、水野總領事にしても、かゝる席に立つて挨拶をする人は、皆夫人同伴なのも妙でないか。

(七五) 同三十一日 (日) 快晴

午前は全く宿に居て、通信の筆を執つた。
午後二時半、自働車は一行の爲めに列をそろへた。即ちそれに乗つて、公園から市外見物。

公園は東と西とにわかれて居るが、その規模の大なるには、誰も感嘆せざるを得ない。聞けば先年大博覽會のあつた處ださうで。今も名残りの美術館や、また日本風の樓門などが残つて居る。又小山の



上に、此州の創建者ベン氏の舊宅も認められた。ペンシルバニア州とは、このベン氏の名から出たのださうで、市内で一番高いと云ふ、市廳の塔の頂邊にも、氏の像が祀りあげられて居る。

かくて東西の公園を、遺憾なく乗りまはるのに、西は人工に優り、東は天然に富んで、殊に秋の錦を飾つた眺め、何とも云はれたもので無く。常は決して自働車を通さぬと云ふ、溪流に沿ふた幽邃な道を過ぎ、此頃出来上つた許りと云ふ、セメントの大橋を仰ぎ乍ら、

▲セメントの通天橋や檜紅葉
▲自働車や道に落葉の渦幾重

など、車の上に駄句る間に、いつか進んでチエスナット、ヒルに來た。

此邊は水こそ無けれ、東京でなら濫谷か、目黒とでも云ふべき別莊地、名ある富豪の贅澤の程は、此處彼處の邸宅の、善美を盡されて居るのでも知れた。

中にもワイドナアとか云ふ人の邸は、何さま王侯をも凌ぐべく見え
 えたが、去つて市中に入るに至つて、その獨立經營と聞く、立派な
 育兒院のあるのを認めて、此國の所謂る富豪なる者の、心掛には一
 層感心したのである。



かくて薄暮ホテルに送り込まれた。此の途中、ホルドキン會社の
 前に、其製作に係る大汽罐車の、特に一行の爲めに飾つてあるの
 を見た。これも世界一だと云ふ。



此夜はノウプログラム。即ち例のファー、イーストを征して、淋し
 い日曜の夜の町を、そこはかと無く逍遙し、果は製造家俱樂部の接
 待などうけて、十一時に車に歸つた。出發は十二時半。

このヒラデルヒヤ滞在中、名譽領事マック、フアデン氏は、我が一
 行に贈るに、純金の小鈴を以てした。これは彼の獨立紀念鐘を寫し
 て、特に作らしたものである。好個の紀念品と云ふべしだ。

(七六) 十一月一日 (月) 快晴

天氣のせいも又温くなつた。その九時頃著いたのは、即ち大米
 合衆國の首府、ワシントン府の大停車場である。先に紐育に居殘
 つた、松方、岩原の二君も、先まはりして此處に落ち合つた。わが
 松井代理大使夫婦初め、此市の重なる役員達に迎へられ、直ちに自
 働車に分乗して、まづ國務省、議事堂、圖書館、博物館等を、その
 門前から眺め、ワシントンの紀念高塔の下を過ぎて、ポトマック、
 ロック、クリークの兩公園を見物した。共にあまり人工を加へては





無いが、其處に又一層趣味を感じた。

更に動物園を通りぬけて、療兵院の構内を過ぎ、再び市中をさして引返した。動物園ではこんなものがある。

▲栗鼠や尾に落葉を叩きく去る

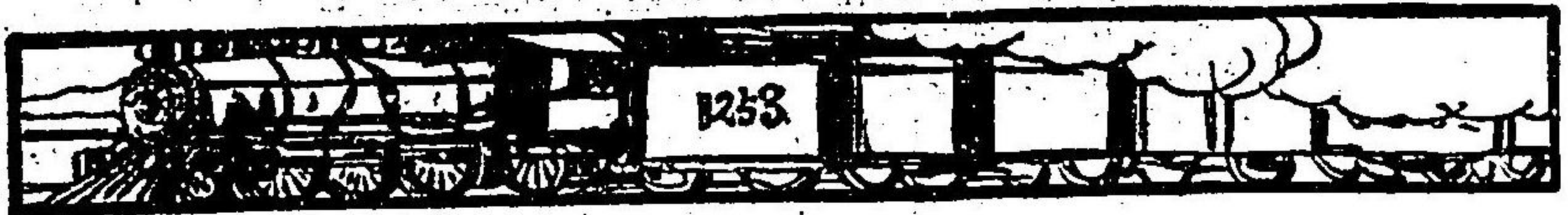
▲半眼に駱駝の眠る小春かな

車上の人にはこんな餘裕もあるが、氣の毒なのは護衛の警官だ。

お役目とは云ひながら、自働車に背を圓くして、自働車隊の前後左右を疾走する苦しさ！

かくて一行も例の通り塵埃だらけに成つたが、それをろくに拂ひもあへず、國務省に出頭して、國務卿ノックス氏、同次官ウィルソン氏、及新東洋局長に擬せられて居る、日本通のミラア氏等に會つた。ノックス氏は小柄で髭の無い、如何にも温厚な好紳士。何處やら我が西園寺侯に似て居る。

一行に一々握手し了つた後、團長には何か内談があるとかで、更



に別室に迎へられたが、他は案内の役人に導かれて、軍務省から、大藏省、及び大統領の役邸たる、有名な白聖館等を見て、一トまづホテル、ニュー、ワラードに入つた。

さて中食を済ましてからは、ワシントンの墓参と云ふ、大切なプログラムを踏む事になつた。

ワシントンの廟所は、その舊邸と共に、市を去る事十六哩、モント、ワアノンと云ふ處にある。即ち一行は、特別汽船をボトマック河に泛べて、途々奏樂に耳を娛ませながら、二時間許りでその地に著いた。見れば小高い岸の上には、黄に赤に、木々の梢の遺憾無く飾られて居る中に、一棟の家構が見える。舊邸は即ちこれであるのだ。

まづ端艇で棧橋に著き、それから乗合馬車に乗ると、山路を三つ許りうねつて、はや靈廟の前へ出た。蔦の面白くからみ付いた、煉瓦造りの外圍ひの、鐵柵に絶つて中を覗けば、中に大偉人の石棺は、その夫人のと列んで、靜に横はつて居る。これを彼のグラントの比



すれば、同日の論には成らぬ程、至つて質素なものであるが、その質素は蓋し遺言によるので、寧ろ敬虔の念を増さしめる。

澁澤團長まづ禮拜をして花輪を捧げ、つゞいて各員參拜の後、紀念の爲めの撮影をしたが、惜しむらくはそのレンズの中に、折からの秋の錦の色が、其儘入り得ぬ事である。

▲錦著て人は眠れり秋の山

蓋しこの墓邊には、各國の帝王、貴顯から寄進した、種々の樹木があるが、その中でも、先年我が伏見宮殿下が、親しく參詣あらせられた時、特に植ゑ置かれた若木の槭は、恰も眞紅の照りを示めし、その丈こそ高からざれ、正に異彩を放つて見えた。

墓參が濟んでから、石徑を斜に登つて、舊邸の庭へと來たが、此處からは木々の梢の間から、ポトマック河を眼下に眺めて、船からさこそと思はれた景色の、更に佳なるに驚かざるを得ず。しばしは我を忘れて居たが、人々の促すまゝに、やがて舊宅の各室を見に入



つた。

然るに階下、書齋、食堂、東西の客室から、階上の居間、夫人室、果はその臨終の寢室まで、當時を忍ばしめる遺品の數々、これに一足を停めたなら、さなきだに秋の日の、朝から來ても足る事ではあるまい。

まして今日は午後からの參觀、心は飽くまでも残りながら、委細は書葉書と、名所案内とで、後にゆつくり見る事にして、急がしくも此處を辭し、歸途は婦人の連中と共に、電車でワシントンに歸りついた。

兎に角このモント、ワフロンは、聞き及んだより好い處だ。かゝる景勝の地、而も由緒深き處にこそ、専ら人物養成を主として、精神教育の機關を設くべけれど、などと頼まれもせぬ考案に、頭を傾けつゝある中、電車は二度許り乗換へさせられて、漸く六時過にワシントンに歸つたが、船で歸つた連中は、それよりも一時間ほど後れた。



夜は八時から案内されて、まづ國會附圖書館を見た。世界で有名な物だけに、正しく立派な、宏大な事だ。他の圖書館と異つた所は、議員の爲に特別席のある事と、少年閱覽室の設けの無い事だらう。次に評判の議事堂も見た。支關の次の圓形のホールには、米國歴史の壁畫がある。これには誰も足を停めやう。建築のすばらしい割に、議席は思つた程立派に見えなかつた。此國の事だから玉座の設備はないが、その代り大統領室と云ふのがある。

此等を見物してからが、商業倶楽部のレセプションだ。今日は朝から立てつゞけのプログラム、流石同行の接伴員連も、大分疲勞を感じたと見えて、常から立話を平氣な連中、今夜ばかりは椅子にグニヤリとなつて居た。

(七七) 同二日 (火) 晴

昨夜は窓を明けて寝た位、今朝もイヤに暖い。此國で所謂るインちゃん、サンマア(印度の夏)なるものだ。



午前九時自働車を驅つて、一同アーリントンの營所に向ひ、其所の馬場で、騎砲兵の操馬演習を見た。これで服装がカーキで無ければ、手も無く曲馬師かと思はれる巧みさ。中にも砲兵の一分隊が砲車を自由自在に曳きまはす熟練、暫く拍手の鳴を止めなかつた。此所で不思議に感じたのは、騎兵の中のある者が、劍を右に佩びて居た事だ。日本でもこんなのがあるか知らん?

一時間許りに演習が済むと、直ぐ其所を辭して、歸途には陸海軍共同墓地を通りぬけた。いつもながら西洋の墓所の綺麗さ、それに第一眺望の好さ! お墓參をかこつけに、辨當持參で遊びに来る、呑氣な軍人遺族もある事だらう。

十二時ホテルに歸り、服を改めて、ウィルソン氏の招待に臨んだ。これはノックス氏の一族に不幸があつたので、代つて一行に午餐を饗したのである。無論婦人連も同席で、美人と評判の奥さんが、其席上を斡旋して居た。